

鹿兒島県史料集 (57)

通 昭 録 (六)

鹿兒島県立図書館

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料集第五十七集としてここに「通昭録（六）」を刊行いたします。

「通昭録」は、江戸時代後期 得能通昭（享保十四年生 寛政元年没）が郡奉行や勸農使として務める傍ら収集した膨大な数の詩歌や文章・史料などをまとめたものです。

内容は、薩摩藩主の編年記・薩摩藩及び公儀の法令・故実・室鳩巢などの漢学の説、番町皿屋敷の由来などの話、和歌・和文・随筆等を含みます。

今回は、八十余巻のうち巻之四十三から巻之四十八までを刊行することといたしました。

本史料集は、東京大学史料編纂所蔵本を底本とし、鹿児島県立図書館所蔵本、都城島津邸所蔵本を参考に、鹿児島大学教授の丹羽謙治氏によって、編集・校閲・校訂が進められ、刊行の運びとなりました。長期間にわたる丹羽氏の御苦勞に対し、心からお礼を申し上げます。

また、この史料集が本来の目的であります郷土資料の保存と地方史の研究や県民の文化向上に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成三十年三月

鹿児島県立図書館長

原 口 泉

目次

解題	ii		
別表	xi		
例言	xii		
通昭録卷四十三	和文の部	1	
通昭録卷四十四	同	17	
通昭録卷四十五	落葉集	一	33
通昭録卷四十六	落葉集	二	57
通昭録卷四十七	落葉集	三	74
通昭録卷四十八	落葉集	四	81

解題

本書には『通昭録』巻四十三から巻四十八の翻刻を収録する。底本は、後に述べるような理由により、東京大学史料編纂所蔵本（島津家本 さI・1・12・33）とし、都城島津邸所蔵本と鹿児島県立図書館蔵本と比較した。

巻四十三および四十四は「和文之部」として、写本や版本から得能通昭が写し取った和文（書簡や俳文を含む）を収録する。巻四十五～四十八の四巻は得能自身が作った和歌、和文（紀行文）を収める「落葉集」と題する歌文集である。

全体の構成および出典については別表にまとめて後に掲げる。以下、(一) 和文之部と(二) 「落葉集」、それぞれについて概説する。

(一) 和文之部

巻四十三に二十種、巻四十四に五種の文章を収める。ただし、巻四十三の「楠氏石碑之銘」は朱舜水の漢文を含むものである。

巻四十三の冒頭の五つの和文は、「御即位之文」「大嘗会之文」「菟裏女房奉書」「院女房奉書」「三条西殿姫君へ教訓文」である。大嘗会など堂上の儀式の内容を奉書や手紙の形式で伝えるもので、写本の形で流布したものであろう。

続いて、芭蕉の弟子の一人、森川許六が編集した『本朝文選』（『風俗文選』）収載の俳文、深草元政（一六三二～一六六八）、木下長嘯子（一五六九～一六四九）、沢庵宗彭（一五七三～一六四五）といった江戸初期の僧侶や文人の文章などを収録する。興味深いのは、鎌倉時代の日記『源家長日記』の一節を「倭歌の文」として収録していることである。

巻四十四にはやや長文の五つの文章——「惟新公賜於下公主文」「大高源五呈母文」「おのこ草」「咬嚼吧文しゃぶたらぶみ」「釈迦真実法門」——を収める。

この中で最も注目されるのは、巻四十四の鉄舟の「おのこ草」である。

鉄舟とは、元禄十四～十五年（一七〇一～〇二）にかけて、彗星のごとく浮世草子作者として現れ、消えていった都の錦こと宍戸鉄舟のことである。鉄舟は元禄十六年四月、赤穂浅野家の浪士の討ち入りで警戒下にある江戸に下り、無宿人として逮捕され、薩摩に流罪となり、山ヶ野金山、後に鹿籠金山かごで流人生活を送った。その後恩赦にあい、鹿児島を去り、一時上方文壇に復帰したとされるが、詳細については未だに不明の部分が多い。流人として鹿籠金山にいた時期（宝永二年～宝永末年）金山役人関市左衛門らの支援をうけて比較的自由が保証されていたのか、赤穂事件に取材した実録を数々執筆した。鹿児島県立図書館蔵『武家不断枕』は自筆本ではないが、その初期のものである。『通昭録』巻二十九、「石馬集」巻一に、鹿児島に護送される途上（尾張の鳴海）で詠んだ「行すゑはいかになるみの塩干湯跡にこゝろを沖つ白波」という歌が入っている。さて、この「おのこ草」と題する文章は、「天下泰平国土安穩とは珍しからすといへとも、当世静謐にして土中の金子を掘出す日本第一の重宝山、此所に究れり」と、冒頭から金山が舞台であることを示し、続いてその遊郭の衰微の様子を語り、「酒色の二に疎からば何かは物のあわれはなからん」とうそぶきつつ、酒と色と男伊達

を讚美する戯文となっている。若いころ、悪友に誘われ、遊里に入りし、放蕩を繰り返したという鉄舟の過去を踏まえたものと言える。注目されるのは次の部分（傍線は引用者）。

旅寝の床の徒然に二合飯の八つ腹、臍の下物淋しく寝られぬまゝに、たはこのつゞけ呑も下地なふては済ぬものと、宿を立出詠むれば、いつも同しとはいへとも、滑川流水杉村の風景はとふもいわれぬ。

傍線部にある「滑川」とは、鹿籠郷東鹿籠（枕崎市）にある小字であり、花渡川の上流部を指す。ここは嘔穴群が見られる場所である。この特徴的な「流水」と「杉村」（杉の集まっているところ）の風景の意と解釈すれば、「おのこ草」は鹿籠金山で書かれた可能性が高いといえる。実録や自伝的な文章『捨小舟』のほかにこのような戯文をものしていたことが確認でき、またこうした文章が薩摩藩内で流布していたことも知られる。

「惟新公賜於下公主文」は島津義弘が娘の於下に宛てた手紙で、慶長十四年（一六〇九）の琉球侵攻の話題が述べられている。「旧記雑録 後編」巻六十八に収録されている。

「咬啗吧文」は、長崎の学者、西川如見の創作とされるが、鎖国令のために、イタリヤ人の父、日本人の母とともに日本を離れジャワ島に赴いたお春が知人に宛てて送ったもの。帰国が叶わない悲しみをせつせつと訴える。

伏斎樗山の『田舎莊子』から取った「釈迦真実法門」は、『田舎莊子』外篇の巻五「閻王訴状」と巻六「如来真実法門」を、一部省

略しながら繋ぎ合わせた内容となっている（ただし、文末など細かな異同が多数存在する）。

（一）「落葉集」

「落葉集」は戊戌の年水無月、すなわち、安永七年（一七七八）六月に序文が書かれている。これによると、この年の夏、書を曝す日、幼時から折に触れ興に乗じて詠んで消閑の便とした歌の数々を、多くの書き損じ（通昭は「反古」と謙遜）の中から取り出し、「落葉集」と名づけて秘め置いたとする。

「落葉集」という題名は、謙遜してつけられたもののように思われる。よみは「らくようしゅう」「おちばしゅう」いずれか決めたいが、後者であるとすれば、得能の本姓である「越智」を掛けているとも考えられる。

巻四十五所収の、安永九年（一七八〇）「大島後紀行」には次のようにある。

僕か書集たる落葉集を愿敬法師の見て、

埋木の落葉もすてすかきよせてあわれみ深き水くきのあと
ゝいひこしけるかへし、

おもわずよかれきの落葉かきよせて紅葉の色と人の見んとは
法師又かへしとて、

枯木にも花の咲とは聞斗錦の色を初てそ見し

といひしかへし、

にしきとは何か見るへき霜かれて芥そつもる庭の紅葉は

「落葉集」は、その序文がしたためられた段階、つまり安永七年（一七七八）六月の時点で、歌文集として一応の完成を見ていたものと思われる。それを、翌年の大島渡海の際にも持参して、これを愿敬法師にも見せたのであろう。その一方で、『通昭録』その後も詠んだ歌や紀行（歌日記）をも合わせ、『通昭録』の巻四十五（四十八としたのである。なお、『通昭録』総目録の完成時（安永九年秋）には、「大隅紀行 下」まで出来ており、「勸農紀行」以下の紀行はその後増補追加されたものであろう。

「落葉集」は、冒頭から、九歳、十三歳、十四歳の時に詠じた歌が並ぶ。歌および紀行（歌日記）の配列は年代順に並べられている、例えば、明和における二度の江戸参府の旅に基づく紀行文の後、巻四十六の冒頭に、明和八年（一七七二）の冬十二月に死去した九歳の長男弥太郎に手向ける追善供養の歌および哀傷歌が並び、その後安永六年（一七七七）の「大島紀行」と続いていくという具合である。通昭の和歌については、「大隅紀行 上」に次のようにあるのが注目される。

僕は頓阿法師か草庵集を愛し、羈旅にはいつもたつさへて、ね
さめの友としける。今夜も亦、小夜更、目さめければ、灯かの
けてよめとも、文字さたかならず。集をさしおきてよめる、
老はうし世の交や水くきのあとさへうとく見るめかずみて

「草庵集」とは、中世の歌人、頓阿（とんあ）（一二八九〜一三七二、俗名は二階堂貞宗）の家集で、江戸時代には版本で流布した。通昭が旅

に携行した同書は懐中でできる極小本（豆本）の形態のものであったかもしれない。特定の師について歌を学ばなかったという通昭はこの書を愛し、これを通じて、二条派の和歌を己のものとしたと推測される。

「落葉集」収録の紀行（歌日記）を左に掲げ、その概要をまとめておく。

① 「丁亥吾妻紀行」 通昭39歳

明和四年（一七六七）閏九月十一日より十月三日、鹿兒島より東海道を經由して江戸にいたる旅日記である。歌数三十六。

② 「戊子紀行」（仮題） 通昭40歳

明和五年（一七六八）四月一日より五月十日、江戸から鹿兒島まで、甲州街道・中山道經由の旅日記。歌数三十六。

③ 「庚寅紀行」 通昭42歳

通昭自序によれば、明和七年（一七七〇）春、「君」（島津重豪）の参府に随従して鹿兒島から江戸に向かう旅の途上、筆に任せて詠んだ歌を、無事を報ずる手紙に添えて故郷に送ったものという。「丁亥吾妻紀行」とは異なり、日付はほとんどなく、名所や時候に合わせて詠んだものである。歌数は八十五。

④ 「辛卯紀行」（仮題） 通昭43歳

五月二十八日江戸を発ち、東海道經由で京都、大坂、瀬戸内を通り、赤間が関を経て、長崎へ廻り、天草、阿久根、向田（川内）を經由する。阿久根に八月十五日、鹿兒島着は翌日である。歌数三十七。

⑤ 「丁酉大島紀行」 通昭49歳

安永六年（一七七七）十二月十六日から翌七年四月十六日まで
の紀行。歌数四十二。

この年、大島、黄界島、徳之島の、いわゆる三島に対して、
島内で生産された砂糖を全て藩が買い入れる制度（出来砂糖惣
買上制）が実施されたが、三島とも不作のため、藩は通昭に命
じて、引合米帳を焼き捨て民を潤す施策を講じた。通昭は島内
各所を回り、倉を開き真米を配布、この仁政に人々が喜ぶ姿を
描いている。なお、『通昭録』巻七十には、この「大島紀行」
で登場する登世勝の文章「賀仁政序」が収録されている。

⑥ 「大島後紀行」

通昭51歳

安永八年（一七七九）一月二十七日から四月十六日までの大
島紀行。通昭は横目として二回目の下島である。歌数四十九（た
だし通昭の歌のみ）。

⑦ 「大隅紀行」(上、下)

通昭51～52歳

安永九年（一七八〇）九月四日より、桜島から国分、福山を
へて大隅の各地を巡検する旅の日記。歌数は上が四十五、下が
二十一。

⑧ 「勸農紀行」

通昭53歳

安永十年（一七八一）春、前年に引き続き、勸農使として鹿
児島近郊の村々を巡回した時の紀行。後述するように、郡元村
一之宮神社や鶴戸神社では、農業の障害となる木々の枝を、神
にその旨を告げて伐らせており、通昭の官吏としての奮闘ぶり
が躍如としている。歌数四十四。

⑨ 「水俣紀行」(仮題)

通昭53歳

安永十年（一七八一）春、藩主（島津重豪）の帰国の出迎え

のため、肥後国水俣の川原まで出張、出水で藩主の一行と合流
して鹿児島に帰るまでの紀行。歌数九。

⑩ 「福山紀行」

通昭53歳

天明元年（一七八一）、公命により、八月十九日、城下堀江
より船出して、大隅国福山郷に赴いた折の紀行。歌数五十四。

⑪ 「財部紀行」

通昭53歳

天明元年（一七八一）十二月十八日より、大隅国財部郷に赴
いた折の紀行。歌数七十三。末尾に「誹諧六歌仙」と題する「財
部真人」「大納言恒吉」「散位橘市成」「左大臣清原百引」「松山
内侍」「前左大臣末吉」の戯歌を載せる。

⑫ 「天明壬寅紀行」

通昭54歳

天明二年（一七八二）夏、この年の洪水と暴風と蝗害による
農村の疲弊の状況に応じて税の減免を行うために、福山、末吉、
高原、霧島、飯野、栗野、加治木より鹿児島に至る。歌数二十八。

⑬ 「癸卯春紀行」

通昭55歳

天明三年（一七八三）春、勸農使として、大隅、日向を巡回
した折の紀行。歌数六十。

得能通昭自身の和歌、文章が集められているのがこの巻四十五、
四十八の最大の特徴であるが、通昭自身の文章には、彼の気質や性
行、もの考え方がよく現れている。これらが年代順に配列される
時、自ずと自叙伝的な様相を呈する。

「丁亥吾妻紀行」には次のような一節がある。

十月朔日 晴 道すから荷物重く馬いたむなど馬子の悲しむに

つけて、多くは歩行のみしける。身のくるしむにつけてもあれみ心の心は仁のはし也となん聞しかは、おもひなくさめて、めくみある心のはしとおもふにそ夜すからたとる道も苦ならす

通昭は、重荷のために馬が傷むと悲しむ馬子の言葉をうけて、自ら歩行で旅を続けた。他者の痛みを自らのものとする「仁」の態度を示すのである。極めつけは、翌年の帰国の際の、抜け参りする少年伊佐松とのエピソードである。

江戸を出ける夕かた、伊勢詣する童の宿に泊らせよといふをきくに、もとは武州川越とやらんの者にて、去年の春父におくれ、せんかたなく江戸に出て京橋に住ける工匠の家に住へしか、今日主人の餉おくとて品川まで出しそのまゝ、伊勢へ参る也。年は十一、名は伊佐松、同行もなきなど語るを聞いて、いとあわれ也ければ、伊勢の追分までは列れゆくへしとて、朝夕の事など念比に沙汰して、追分にてわかるゝ時よめる、
今よりは誰をたよりにおさな子のはるけき道をたとり行かまし

通昭の墓碑銘を撰した山本正誼は、その中で「君仕為郡奉行領勸農事頗以惠愛見称」と書いた（鹿児島県立図書館蔵『秋水先生文集』所収）。また、通昭の法名は「遺愛院去後見思居士」であり、「惠愛」をもって称えられるほど、当時から彼の仁愛は評判だったのである。

通昭の慈愛、仁愛は天性のものであつたらうが、若い頃、経済的に苦勞をした経験もこのような民に対する慈しみに繋がっている。

と考えられる。困窮の原因のひとつは、父の病氣にあつた。薬餌に財を投げうち療養に努め回復したものの、江戸詰のまま父は病没してしまふ。この時、通昭二十六歳であつた。

おろかなる身は世のましわりもおのつからうとく、家まつしければ、従つて財用もとほしく、さわかしき年のくれも物しつかなるは、是や誠に貧楽とやいふへき、
西にはしり東にいそく此月の今宵もしらぬやとのしつけさ

この後、明和八年（一七七二）には愛児を九歳で亡くしている。その悲しみのさまは、巻四十七の冒頭に記されている。

父親の死後、通昭は一家を支えるとともに、母親によく仕えた。実母とは早くに死別、その後二人の母に仕える。紀行の中でも、三人の母のことがしばしば見えている。鹿児島市武岡墓地にある得能家の墓碑に、

仲兵衛通倫 宝暦四年八月一日
妻阿□理 元文三年八月十二日
妻竹 寛保三年三月三日
妻那津 天明四年六月廿九日

とあり、これに従えば、通昭は元文三年（一七三八）八月に実母（朝隈氏）を亡くした。「落葉集」冒頭に登場する、九歳の時の秋、西にかたむく月を見て歌を詠めと通昭に命じたのはこの朝隈氏である。「財部紀行」では、旅宿のあるじの高齢の父母のもてなしをう

けて、「その母也とて八十余りなるか出たるを見て、初のたらちめを思ひ出し」悲しくなり、涙を制止できない通昭がいる。二番目の母（竹）とも寛保三年（一七四三）、十五歳の時に死別する。

「財部紀行」には、次のようにある。

中のたらちめの世を過給ひ、けふは四十年の忌日にあたりけれども、手向たに心にまかせず、かくなん申侍りける、
年へても思ひ出れば悲しさのまのあたりなる心地こそすれ

三番目の母（那津）は「舐犢の愛」（親牛が子牛をなめ愛するように親が子を妄愛すること）が深かった。そのため、通昭は再度の大島渡海の辞退を申し出るほどであった。紀行でも、裏の島に茄子がなった夢を見、母が聞いたら喜ぶであろうと記し、また無事、鹿児島に戻った時には、母（那津）の姿を次のように描いている。

四月十六日午剋斗に、江月川の下流に船着ける。子どもの迎來り、たらちめも松原まで出給ふと聞て、うれしさいわんかたなし。

次に、通昭の交遊関係について見ておく。

明和五年（一七六八）の江戸から鹿児島に帰る時の紀行の冒頭には、この旅が「久智君任満て国に帰り給ふに」従ったものであることが書かれている。「久智君」とは家老の榊山久智のことである。この旅の途上、豊前の田の尻で、榊山久智の歌が近侍の人を通して届く。

豊前国田の尻にて春雨ふりこめつゝ、船のうち物さひしかりけるに、久智君の近侍の人、歌よみけるとて畳紙に書つけたるを示されけるをよみて見るに、海上霞を題にして、船人の楫をたえてもそことなくかすみこめたる春の海つら、まかひなき主の御歌也ければ、読て其人して奉りける、
春霞立ちかくしたる海つらにまかふ色なき君かことの葉

普段から榊山久智とは和歌を通しての交流があつた模様で、それは次のような記述からも窺うことができる。

久智君の御許、藤の花盛、人あまた召して歌よめと仰こと有ければ各よみて奉りけるあとにてよめる、
もろ人のことにはかゝる藤波は今しほの色やますらん

『通昭録』巻二十一に服部南郭の「薩州八咏亭巻跋」という文章が収録されている。新築地にあつた榊山家の別邸の「八咏亭」についての文章であるが、時代的に跋文を南郭に依頼したのは『松操和歌集』にも入集している久初（久智の父）かとも推定される。右の引用箇所も「八咏亭」だった可能性もある。また、通昭と久智との関係は文事を通してのことだけではなく、主従関係をも想定することができるように思う。

一方、通昭の朋友として名が出てくるのは、「小倉知直」「田中盛庸」「伊東祐陳」「妹尾盛祐」「東林碩」らである。このうち小倉知直は「わきてしたしき中にそ有ける」と通昭自身が語っている。そ

の他、交流で注目されるのは、中神怡顔齋なかがたいがんさいである。

中神氏は、予か家熟に文を論する友なり。今年、庭萩錦を敷き、顔を怡はしむるといひつゝ、怡顔を齋のよひ名とせし。一日、来りて花見よと聞へければ、盛章、幸中なといさなひまかてける。中門の扉を開けは、左右の萩花眼をさへきり、物のあやめもわかぬほとさきみたれ、松峯の山になひき、桜岳の嶽につゝ、心地して、世に又類ひもあらしと覚へける。

怡顔齋の名の由来が記されている。中神怡顔齋なかがたいがんさいは、通称を織右衛門、諱は長舊、のち長廢。元文三年（一七三六）二月三日生。三木原宝寿院廣通の第三子で、中神長救の嗣となり、宝暦三年八月に家督相続。寛政六年（一七九四）閏十一月二十三日没。「唐芋出世来由記」などの著者で、毛利正直『大石兵六夢物語』に先立って、怡顔齋によって兵六物語が執筆されていることが知られている。怡顔齋の文章に表れている笑いや滑稽といった知的で戯作的要素は、通昭の歌文の中にも見出すことができるだろう。

通昭は、島津重豪による種々の改革を領内の末々まで浸透させる役割を担った優秀な官僚であったが、その思考や態度・行動は儒教的な合理性をもつものであった。それが端的に現れているのが、島津吉貴の護侍僧として即身成仏を遂げたという密教僧空順への態度であり、農民たちが盲目的に信ずる迷信や伝説への果敢なる処置である。

前者は、「大隅紀行 上」に見え、桜島の獅子尾山正福寺馬頭観音堂の傍らに空順の入定の跡を見て次のように書く。

吉貴公の側室於須磨の方、石室を作らしめて空順に賜ふ。順、是に入て死す。其事の是非は論するに暇あらず。死も亦人の難き所、国家の為に死するといふ其志は憐むに堪たり。

通昭は国家のために死んだ空順を憐れんではいるが、是非をここでは論じないというのは、彼が空順に対して何もか考えをもつていすることを示し、それは決して好意的なものではないことが推察されるだろう（ここには前代の藩政への批判も含まれているかもしれない）。

一方、後者については、「癸卯春紀行」で、根占川北村の岡にある性察（性密カ）和尚の崇りを怖れて祀る農民たちに向かって、通昭は墓前で断固たる措置を示す。

草の家こほち捨て二たひ修する事あるへからすと堅く令し、墓前に立て戯れていへるは、性密和尚地下の靈、勸農使越智通昭か言を聞け。爾元来迷闇徒、不弁義理致冤死、費民財勞民力造茅屋、於爾何益、今破茅屋除民害、不毀石室、爾之福也嗚呼、

似たような例は他にもある。「勸農紀行」で鹿兒島近郊を巡回した際、郡元村一之宮大明神の境内や田畑の間に、古木が生い茂り農業に支障を来しているのを見た通昭は、民に農業を本とする新政の趣旨を説いて木を切らせ、鶴戸神社の周囲の樹木を、神威を怖れて木を切るうとしない農民の前で拝殿に駆け上がり、次のように祭文を唱えるのである。

僕（通昭のこと―引用者）、宮殿に登り拝礼して神に申す。勸農氏越智通昭 公の命を奉し、村里を巡て農政を授く。今、神の所在山林繁茂して田畠の害をなす。下民、神威を恐れ、枝伐る事なし。夫、神は直にして曲らず。正して邪なく、国土を護り民人を恵む。樹木を吝み民に禍するの理あらんや。故に、昭、今農政の為に樹を伐て害を除く。神以て照鑒せよ。祭終て里民に告ぐ。於是、樹を伐る。

これらの例から、通昭の非合理的な迷信や信仰を極力排除しよとする態度を見てとることができるだろう。

通昭は官吏として筋の通ったことを着実に行う人物であると同時に、先にみたように、弱いものに情をかけ民を慈しむ一面を持っていた。幼い子供を亡くしてからは旅の途上で出会った抜け参りの子供に対して示したような異常なほどの情愛をかけ、けなげに自分をもてなそうとする善良なる民には同情の涙を流す。『落葉集』に収められた文章や和歌からは、島津重豪の治政を体现する新しい近世官僚の姿が現れている。

最後に、テキストの問題について触れておきたい。

都城島津邸蔵本（以下「都城本」）は、写本作成の際、筆写者の「くせ」が写本に現れている。本書では本文に反映させていないが、「桜島」「鹿児島」の表記が「桜嶋」「鹿児島」となっていることが多い。また、東大本（得能本）でひらがな書となっていたものに、適宜漢字を当てている場合がしばしば見られる。

一方、鹿児島県立図書館本（以下「県図本」）は、巻四十三から四十六までは、東大本（得能本）とさほど異同が見られないのに対し、巻四十七と四十八については、極めて顕著な違いが見られる。

その一つは、カタカナを使用している点である。その理由については不明とせざるをえないが、筆写者の問題であることは推測するに十分である。巻四十六の筆写者と巻四十七の間に筆写者が異なっているということである。同じ筆写者が「大隅紀行」の上と下（原本は勿論、漢字ひらがな交じり）で、一方はひらがな、もう一方はかたかなで写すということの説明がつきにくいだろう。

巻四十七の東大本と県図本のそれぞれの冒頭を左に掲げてみる。

《東大本》

高山新留村に泊ける夜、折々時雨して徒然也ければ早く休みけるに、あるし夫婦、僕か夜ことに宿移りして昼のつかれなど語りあひ、あわれ明日は終日小やみなく降つゝけかし、明日の夜まで此やとにとめて数日のつかれやすめ奉らんなどいふを聞て、

かりの宿にとめしとおもふ心にもとむる情の深さをはしる

《県図本》（傍線・破線は引用者）

高山新留村ニ泊ケル夜、折々時雨シテ徒然シケレニワク休ミケルニ、アルシ夫婦、僕カ夜トニ宿移リシテ昼ノツカレナト語りアイ、アワレ明日ハ終日小ユミナク降ツマケカシ、明日ノ夜マテ此ユトニシメテ数日ノツカレユスメ奉ランナト云才聞テ、加里ノ宿ニトメシトオモフ尤ニレトムル情ノ源キライシカ

県図本は、冒頭から「高山」の「山」を脱し、原本の「や」を「ゆ」と読み誤って「ユト(宿)」「小ユミナク(小止みなく)」と表記、和歌のなか(傍線部)でも、原本の「も」を「レ」と誤っている。漢字もわずか六行の間で数か所(点線部)の誤りが存在する。

二巻にわたってこのような状態であるため、今回は東大本を底本とするとともに、巻四十七、四十八の二巻については都城本比較するだけで止めた次第である。

(注)

*1 「東京大学史料編纂所蔵 島津家文書マイクロ版集成」(丸善雄松堂株式会社)を用い、判読が難しい箇所は直接原本を確認した。

*2 枕崎市文化資料センター南溟館に自筆本が所蔵されている。酒食で身をもち崩した「浮かぬ舟」「二の次」という二人の人物が対談をする形式で描かれ、「おのこ草」とも関連する内容を持つ。

*3 「国老并用人記」『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺記録所史料二』(所収)によれば、久智は、通称左京、樺山主計久初の子で、宝暦六年十二月より家老職を務め、宝暦十一年病気の為依願免職、明和元年回復したため再び家老職に復帰、明和七年より江戸御側家老、安永二年九月十五日病気を理由に依願免職。『松操和歌集』に六首入集。

*4 前掲「国老并用人記」によれば、久初は樺山家二十五代樺山相馬忠郷の子で、享保十一年六月より寛延三年九月二十一日まで家老を務め、在職中に死去。

*5 中神怡顔齋については、『新薩藩叢書 四』「中神怡顔齋小伝」を参照した。なお、同書には怡顔齋の「唐芋出生来由記」「出ほうだい阿久根松」「対勝目氏記」「茶記」を収録する。

参考文献

- 『角川日本地名大辞典46 鹿児島県』(角川書店、昭和58年)
- 『鹿児島県史 巻二』(鹿児島県、昭和15年)
- 『古典俳文学大系10 蕉門俳論俳文集』(集英社、昭和45年)
- 『近世文藝資料12 長嘯子全集』(古典文庫、昭和47年)
- 『近世文藝資料15 深草元政集』(古典文庫、昭和53年)
- 『飛鳥井雅章集 下』(島原泰雄編、古典文庫、平成6年)
- 『叢書江戸文庫13 佚斎樗山集』(飯倉洋一校訂、国書刊行会、昭和63年)
- 『新薩藩叢書 四』「中神集」(歴史図書社、昭和46年)
- 『鹿児島県史料 旧記雑録後編 四』(鹿児島県、昭和58年)
- 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺記録所史料二』(鹿児島県、平成25年)

〔付記〕

本稿をなすにあたり、友野春久氏、橋口亘氏、関利治氏のご助言を得た。ここに感謝の意を表する。

別表

(注)〔 〕は作成者による仮の題。また、出典欄の〔 〕は年代が後のものを示す。

巻	通番	題名	作者	出典	備考
43	1	御即位之文			
43	2	大嘗会之文			
43	3	禁裏女房奉書			
43	4	院女房奉書			
43	5	三条西殿姫君へ教訓文			
43	6	旅賦并引	許六	『本朝文選（風俗文選）』（宝永三年刊）卷三	
43	7	倭哥の文		『源家長日記』	抄録
43	8	東山長嘯辞世の辞	東山長嘯	『萃白集』（慶安二年刊）卷十	
43	9	人心の辞（人心の詞）		「諷諫」（『明心宝鑑』寛永八年刊）	漢文を訓読
43	10	伝意斎文			
43	11	平安城の文			
43	12	芳野記	飛鳥井大納言雅章		
43	13	芳野賦	丈草	『本朝文選（風俗文選）』（宝永三年刊）卷二	
43	14	深艸元政腰張文	〔深草元政〕		
43	15	伏見隠者の文			
43	16	多葉粉盆記			
43	17	楠氏石碑之銘			
43	18	沢庵和尚文	沢庵		
43	19	鶴の記	町田俊雄		
43	20	智光夫人墓誌銘	山田君豹		
44	1	惟新公賜於下公主文	〔島津義弘〕	〔「旧記雑録後編」卷六十八〕	
44	2	大高源五呈母文	〔大高源吾忠雄〕	〔鍋田晶山『赤穂義臣纂書』〕	
44	3	おのこ草	鉄舟		
44	4	咬啗吧文	春女	『長崎夜話草』（享保五年跋刊）卷一	
44	5	釈迦真實法門	樗山	『田舎莊子外篇』（享保十二年刊）卷五、卷六	省略、異同あり
45	1	（和歌）	〔得能通昭〕		
45	2	丁亥吾妻紀行	〃		
45	3	〔戊子紀行〕	〃		
45	4	庚寅紀行	〃		
45	5	辛卯紀行	〃		
46	1	（和歌）	〃		
46	2	丁酉大島紀行	〃		
46	3	大島後紀行	〃		
46	4	大隅紀行 上	〃		
47	1	大隅紀行 下	〃		
47	2	勸農紀行	〃		
48	1	〔水俣紀行〕	〃		
48	2	福山紀行	〃		
48	3	財部紀行	〃		
48	4	天明壬寅紀行	〃		
48	5	癸卯春紀行	〃		

例言

- 一 底本は、得能家より伝来したものと推定される東京大学史料編纂所蔵の島津家本（さ I・1・12・33）とし、鹿児島県立図書館蔵本、都城島津邸所蔵本を適宜参照し、注（*1、*2、……）で異同を示した。出典の判明している一部の文章については版本と校合した場合もある。
- 一 本文作成に当たっては次のような方針をとった。
- 1 漢字は、常用漢字にあるものはこれを用いたが、別字である「藝」「附」「艸」など一部の漢字は底本のままとした。
- 2 変体かなは、通行の字体に改めた。
- 3 闕字、平出がある場合はこれを反映させた。一方、詞書の中に引用歌がある場合、改行を行なった箇所がある。
- 4 挿入がある場合、指定箇所を組み入れた。その際は一々注記しない。
- 5 私に句点（。）読点（、）を加えた。
- 6 「」は他本によって補った部分である。
- 7 破れや虫損で文字の識別ができない場合は□、あるいは□□でこれを示した。
- 8 踊字「々」は「々」ないし「々」に改め、「くく」はそのままとした。
- 9 丁移りは煩雑になるため記さなかった。
- 10 注は本文の該当箇所*1、*2などと傍書し、文章の場合はその末に、和歌および紀行文については、「詞書と和歌」の直後に記載した。

- 一 本文および解題の作成は、丹羽謙治が行なった。
- 一 本文には今日からみて不適切な表現が見られるが、原文の資料性に鑑み手を加えていない。

和文之部

通昭録卷之〔四十三〕^{*1}

和文之部

- 一 御即位之文
- 一 大嘗会之文
- 一 禁裏女房奉書
- 一 院女房奉書
- 一 三条西殿姫君へ教訓文
- 一 旅賦并引
- 一 倭歌の文
- 一 東山長嘯辞世の辞
- 一 人心の辞
- 一 伝意斎文
- 一 平安城の文
- 一 芳野記
- 一 芳野賦
- 一 深艸元政腰張文^{*2}
- 一 伏見隠者の文
- 一 多葉粉盆記
- 一 楠氏石碑之銘
- 一 沢庵和尚文
- 一 鶴の記
- 一 智光夫人墓誌銘

*1 東大本に巻数なし。県図本は鉛筆で「四三」（本文と別筆）。
都城本により補う。

*2 都城本・県図本「深草」

御即位之文

御即位と申は、天子受禪の後、正しく位につかせ給ひてはしめて百司に見えさせ給ふよし、先南殿に高御座をまふけ、親王代、擬侍従、大将代等の座をまふく。執柄の座には太宗の屏風を立、内弁は玉の冠をめして休幕に出入し、儀式をとり行ひ給ふ。外弁の公卿は、握につく。庭上にはいろ／＼の旗鉾、日月の象の幢をたてわたし、近衛の次将は桂甲を着て弓箭を帯し、南階の東西に列す。天子、礼服を着御なり。御座定りて、執翳の女孺^{*1}、竜顔をおほひ奉る。劔璽の内侍二人、褰帳の女王一人、典侍一人左右に候す。女王、典侍すゝんて御帳をかゝく。女孺をふすれば震をはしめて見え給ふ。群臣おの／＼面をふす。主殿寮、図書寮の司、火炉の下に行て香を焼く。是、位につかせ給ふよしを天に告るなり。宣命使、版につきて、判旨をのふ。群臣、再拝舞踏す。武官の輩、万歳の旗をふるつて万歳をとなふ。擬侍従、進んで大礼事終り給へる由を奏す。女孺、翳を奉る。女王、典侍すゝんて御帳をたる。天子入御、兵庫の司、征をうち、百司の出入をつくる有さま、誠に厳なる事とおもひやられまいらせ候。国／＼の大名、小名よりの使、雲のことくにつらなり、天つ日嗣の御調物、くもらぬ御代のためし、さそとさつし入まいらせ候。めてたく、かしく

*1 県図本「女口」

*2 県図本「褰帳□女王」

大嘗会之文

大嘗会と申奉るは、かけまくもかしこき世々の聖主、御位しろしめして行せ給ふ御事とかや。しかはあれと、中頃 後土御門院御即位の後中絶侍りしに、貞享四年 東山院御宇に絶たるをつき、廢れるをおこしおわしまして、今はた元文三の霜ふり月になん執行わせ給ふはいともかしこきおゝんめくみなり。いてや、秋半のころほひ卜定とて、大内にしては、賀の木を焼て龜の甲を炮る事あり。神祇官卜部朝臣、是を勤む。古歌に、香久山のは、賀か花にうらとけてかたぬく鹿のつるこひなせそとよめる、誠や治れる時に近江の志賀の御祓ありて、伊勢、石清水、加茂下上の御社へ奉幣使たつ。御禊の御儀式は大内にて行わせらる。扱、紫震殿の御前に松の木柱に茅ふきわたしたる神殿を、二所に宮作ましますとなん。天つ神の宮を悠紀とし、国つ神の宮を主基と申奉るとかや。内侍所の御前に廻立殿をたて、陣の座、宣陽殿、月花門の腋に塾殿をかまへ、卜部、忌部の官人は幣帛をさゝけて詔詞を申、兵庫寮は御戟を建て、主殿寮は斎火をかゝけ、主水司は水をまふけ、内膳の官人、神膳を調へ、陪膳の采女、是を司る。其外、百官其さま／＼につかふまつる御神事は、中の卯の日とかや。天子出御ならせ給へは、車持朝臣、茅の蓋をさゝけ、子部宿祢、笠取直執綱し、近衛次将は劔璽^{*5}を持、関白をはしめ、前行の大臣、宮王、其外御巫、猿女など各事／＼にし^{*6}たかふとかや。大蔵省、布單をしき、宮内輔は葉薦をもて筵道をしき奉る。掃部寮は是を巻、小忌、大忌、公卿は冠に日蔭のかつらをかけ、前後を守護し、月卿雲客列をたゝし、天子歩御ありて悠紀殿より主基殿へ入らせ給ふ。亥時始より寅刻終までに御神事納

り給ふとそ。明の日より悠紀、主基の節会、清暑裳の御神楽、豊明の節会あり。南向に高御座をまふけ、色／＼さま／＼の御遊ありて、群臣に御酒を賜ふ。風俗吉志舞を奏し、楽人楽を調へ、伶人小忌の衣の袖をかへしまふとかや。誠に上なき御神事なり。むへなる哉、御裳濯川の流たへす、岩代の松に契をむすひ置て、正木のかつら永き世のかす／＼かきりなき代のめてたさを仰きまいらせ候。かしく

* 1 都城本は闕字なし。

* 2 都城本「廢れたる」

* 3 県図本には破れあり。「いともしきくみなり。」

いてや、秋半の

* 4 都城本は「御儀式……紫震殿の」を欠く。

* 5 県図本「劔□を持」

* 6 県図本「し□□ふとかや」

* 7 県図本「大蔵省、□草を□□宮内輔は葉薦をも□□筵道□□奉る」

□奉る」

* 8 県図本「冠□」

禁裏女房奉書

仰 葉室前大納言とのへ
十一 十五 冷泉前中納言とのへ

大札無為無事にとけおこなはれしめてたさを、将くん家より申入れ候。御代官にひこねの侍従、中条しゝうをのほせられ、ことに国俊

の御太刀^{*1}、白かね五千両、わた五百ゆひ、しん上おわしまし候そ、
ゑいかんの御事にわたらせおはしまし候。一位の御かたよりも御よ
ろこひを申させおわしまし、御たる、さかな、しろかね千両、しん
上の御事にて、おもしろく覚しめし候よしをよく／＼心得候て申ま
いらせ候。かしく

*1 県図本「御太刀、白かね□□わた五百ゆひ、しん上おわ
しま□□ゑいかん」

院御所女房奉書

院御 享保二十
十一 十五 葉室前大納言とのへ
冷泉前中納言とのへ

此たひ登壇の日、いさゝか陰雨候へとも、一事の妨なくとりおこな
はれ、院の御かた、へちしてよろこひおほしめし候。まつ／＼御代
官にひこねの侍従、中条しゝう、はや／＼としこうにてめてたさを
申入れられ、此御所へもまいらせられ候て、国宗の御太刀、しろかね
三千両、わた二百把^{*1}、けさんに入させおはしまし候。めてたく御ま
んそくの御事にわたらせおわしまし候。一位の御かたよりも御よろ
こひを申させおはしまし候て、白かね五百両、御たる、さかな、し
ん上の御事にて、めてたくいく久しくと祝おほしめし候よしをよく
／＼心得候て御申つたへ候へのよしを心置候て申せにて候。かしく

*1 県図本に破れあり。「□□二百把、けさんに入させ□はしま□

□めてたく御まんそくの御事にわ□らせ」

三条西殿御姫方へつかわされ候文のよしにて、人のとりはや
し候まゝ写、末／＼の子共に御見せられ候 かしく

ふとしてよそへこし給へく候かと、千秋万歳めてたく覚候。申まて
も候はねとも、身持やさしく心もとなしやかに、さゝれ石の岩ほ
となりて苔のむすまて繁昌候て、孫彦の養ひ、我／＼か行すゑをも
はこくみ給ひ候へく候とうち願まいらせ候まゝ、筆にまかせて申へ
く候。いきとし生るもの、其理をしらさるものはあるましく候へと
も、第一に慈悲の心有て人を育ひ、畜のうへまでも露の情をかけま
くもかたしけなくもおもひ給ひ、一面は楊柳の風になひき、春の雪の
梅の梢に積るかごとく、ものやわらかにして、人の心を知り、ひか
めるをすて、扱又、心の中は石や金などよりもかたくこしちかなる
事をきらふ。賢人二君に不仕、貞女両夫にまみへす。此理りを心
かけ、一方に心をむけ給ひ候はゝ、神や仏の御守もおわしますへく
候。紀有常か娘か歌に、

風吹は興つしら波立田山よはにや君かひとゆくらん

などの名歌、今迄のほめことにて候。第二に客人、稀人などの時は、
内には無念無心の事ありとも、いさゝかそのけしきをみせず、高き
もいやしきもけちめなく、にほ／＼ととりむかひ、春は花、夏は卯
花、涼しき風、秋は千草の花、月のみきり、冬は雪、霜、時しらぬ
時雨など折にふれたる物語などして、いかに念比にとりはやし給
へく候。されとも、若き人などのあまりにむつまじけなるもいさゝ
かに候。男も女もあまりものを言ひすこし候こと、いかゝ。口は是
禍の門、舌は是禍の根源と申事、実もと思ひ候。

郭公人もことは多かるにしなすくなしと一声そなく

殊更食し給ふ時、口たて、よそめ^{*4}ある事、いかゝ。甘き物はあたる事も候。辛き物^{*5}はむせる事も候。しほはゆきものは咽かはき、座敷をしけく立ち、ものさわかしきやうに候。第三に、召仕もの疎略にて、何事もおもふやうにならず候はゝ、忍ひやかによまひこと異見など云ひ遣し可給候。それをもおとこ⁶などのきゝ給ふやうにはいかゝに候。みめかたちつくしき美女房も、腹立たる顔はせはみくるしきものに候。科をも聞ましき物をと思われ候はゝ、此方へ返しあるへく候。返し候はゝ、難も損も有るましく候。あまり科をおほせ候へは、よそにてあしき名を語るものにて候。或歌に、

みよし野のなつみの河の川淀に鴨も住なる山かけにして

心は、みよしのの川水はやく流れ候なり。鴨は水の上にする物なれども、あまりに水はやく所になわす。川淀とて水少しよとむ所に遊ぶ。況や人間に於^{*6}、けはしき所にはなからへかたく候。第四には、夫婦の間の事、たかきもいやしきもむつまじき事こそよそのきこえもうらやみ、こゝろにくゝも有へく候。たとひ万年をたもち給とも、いさゝか男などに見かきられぬやうにたし⁷み給ふへく候。男をも神や仏などのやうにうやまひあるへく候。只世の中の体ともを見聞給ひて、心をもみしかくなくすこし給ひ候はゝ、ゆくすゑよき事あるへく候。

ことたらぬ世をな恨みそかもあし⁸みしかくてこそうかふ瀬もあれ

人の女のみぎりんきの終りこそふたりのはちを頭しにけり

しかはあれと、世になきあつかひ御わたり候はゝ、恨をも、述懐をも、よその聞えもくるしからず候。第五には、人中にていかにも心

かるゝとは多⁹敷事よく候。然れども、舞、平家、詩歌管絃、奔走の座敷にて、見ましき、聞ましなと思ふとも、面白きやうにとしなし給へく候。扱又、あまり心ゆきたるもいかゝに候。第六に、看経の事、いかゝに候。惣して女の物もふて、仏神をけしからぬやうに敬ひ尊ひ給ふ事、いかゝ。心の中に信心をいたし給ふへく候。

心たに誠の道にかなひなは祈らすとても神や守らん

第七に、人のあしき言葉をつかひ、連歌などおかしけに詠し、女の上にはしへ、みめ形、惣して見くるしき事打出し笑ふ事有へからず。打あひ候人も、前にては其詞にしたかひ、やかてかけにて物語ある物にて候。身の上をはしらすして、人の上になり候へは、言ひ安く候といはれ候事いかゝにて候。第八に、何にてもあれ、人に所望ある事いかゝにて候。但、さりかたき用の事は各別たるへく候。それほどあなたへも返しあるへく候。又、我にしたしき人、少しもの遠きやうに候とて、此方よりなをさりにある事いかゝにて候。

つらきとて我たに人をわすれすはさりとて中の絶やはつへき

つらけれと恨みんとはた思われず猶行末をたのむ身なれは

第九に、よそよりいさゝか成る物出来り候とも、はえゝ^{*11}しき返事あるへく候。用なき物とて使見聞く所にて打捨給ふ事、無下に候。第十に、男おほめき出で、或は鷹野、或は遠路などの草臥の時は、女からも、夢にもむすはず、用心を心^{*12}にかけ給へく候。それもことゝ敷やうにはいかゝに候。何も心得の前にて候へとも、能上にもよくおわしませと存候て、かやうに申候へく候。めてたくかしく

* 1 県図本「し」

* 2 県図本「人□□□」

- * 3 県図本「かけ□□□」
- * 4 県図本「よ□□ある事」
- * 5 県図本「□□物は」
- * 6 県図本「於て」
- * 7 県図本「給ひ□□□ゆくすゑ」
- * 8 都城本「かなひは」
- * 9 県図本「も□遠き」
- * 10 県図本「なをに」
- * 11 都城本「はゑ〜」
- * 12 県図本「かひ」
- * 13 県図本「まいらせ候」

旅賦并引

許六

旅は風雅の花、風雅は過客の魂、西行、宗祇の見残しは皆誹諧の情なり。我翁、白川の田植歌を聞初、奥羽の間をめぐり、高館の夏草に兵共か夢を驚かし、あつみ山の夕涼には吹浦を詠め、佐渡に横たふ天の川に初秋の袂をしほり、それより蛤の二見を渡りて七百三十余程を吟す。曾良か落髪の力量を感じて、一飯を分て風流を尽さる。ひとひ芭蕉庵のたゞき、絵の雑談に及ふ時、予に旅十体の絵をかゝせて讀して何某か求めに応ず。其風雅にたより、俗語をあつめ、狂賦五段となす。あなかしこ、奥の細道、草枕の類にはあらず。旅店のさま、上段に書院、床、劔菱のすかし、火のなき火燵にやくらかけて門口の入湯かたふけて居たり。底に少砂のさわるはよへの残りもいふかし。出女のたて島は春秋をしらす。根太、板敷は落て、隅

〜迄置とゝかす。天井、襖は雨もりにきわつき、鉄行灯はくらく、紙はわらんへの心といふ事に燃たり。分売草鞋売にせかまれ、やう〜に枕をかたふけ、心よき寝入はなは、馬さしの声に夢を破る。出立は七つといひふくめたるに、旅人も亭主もよく寝て、夜の明てふためくほとにもくし。

大名の寝間にもねたる寒さかな

道つれのをいはゝ、船頭の胸つくしをとり、駕籠廻しをたゞき、馬さしとつかみあひ、一僕の跡にさかるをねめまわし、鶏の鳴かぬに、つれの男を起し、挑灯とほして夜道を行を手柄とし、入湯の一番に入たるは何の為そや。つはの枯葉に雨のはら〜といふ前に、

世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も此情にかなへり。海道の売物に、餅、酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくわねは、未来焔王の前にてからき目をみるといへり。寒天にも冷素麩をすゝむるは逢坂の茶屋、饅頭のほか〜とみえたるは見附の台也。卵子の煮ぬきは木曾の旅、はなかみは竹にはさみ、銭の看板は筒をかけたたり。昆蕪の田楽は何ものゝ喰けるぞ。

乗掛に春の密柑や宇津の山

舟、川の上、馬、駕籠の情、しは〜かそへかたし。五月の大水もかり金の手形に書入、おのか草の戸は流るれと、首たけの借銭を納してしはらく息をつくものは島田金谷の賊なり。水の浅深を何文川とこたえたるは大なる洒落なり。天竜の中の瀬は馬人足を空にまどふ。乗る人は股たけ入て荷を肩にかけて待ち、あかるものは負れ支度して船端に立ち、旦那か鐘をかた手たるは、渡し場の情なり。馬士、駕籠昇は軽重に日月を送る。一盃の酒に浩然の気をやしなふ。一生を漂々飄々とすまして雲助の号を蒙り、炎暑の日も玄冬のあし

たも榎の木の下に賊^{*20}りて蟻の都に至る。終に飲食を座敷につかず、汁かけて出す。馬士の食と非られ、小便ははしりなから、吸からは手の裏にはたき、銭は耳の穴に納め、今は犢鼻^{*21}禪に結ぶ。一とせの名残もくれて世にある人々のことふく月日を、出替の季と定けるは世をやすうおくる人にも似たり。

出女も出かわり顔や年のくれ

流浪漂泊の上にごそあわれなるためしおほけれ。独坊主には宿をかしかね、同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝、雲の夕くれに情ふかきあるしは、長持くさき布子かして、ぬれたる物を焼火にあふる。あるは三宝荒神といふ物にしかみ付てしはらく足を休れと、極めの札場より追おろされて、却^{*22}てのらぬ前より股をすくめて、両方の手に杖を携て、あゆむへしとも見えず。人間病死の到来は時も所もまたす。医療のたすけうとく、懐中のふり薬はやう／＼急病を防ぐ。巡礼、飛脚の族は路頭に倒れ臥し、片目なる肝煎に追たてられ、老僧の愍にて門下に入、おとろへかさなり、終に黄泉の下に趣く。かねて何国の土とならん終を知らず。犬走の土中にこめて、年の齡、衣類の模様を小札にされる、何国のいかなる人といふ名もしらすなり行也。岡部の辻堂の笠に経文をよみて、同行の別れを惜み、隅田川の念仏を尋て、我子の古墳にのほる。今来古往の人、旅懐の情を尽して風雅の腸をさらす。能因は白川歌をよみて、二たひみちのくにおもむき、不二、都鳥の二句を求て、速に故郷に帰る者は貞室老人なり。東海道の一すしもしらぬ人の風雅におほつかなしといわれし、翁の声、耳の底にとまるとまる。

*1 『本朝文選』「しほる」

*2 県図本「そ□より」

*3 県図本「七百三十余程□吟す」

*4 県図本「一□□分て、『本朝文選』二鉢の飯を分てて」

*5 県図本「芭蕉庵のた□□、『本朝文選』「芭蕉庵をたゝき」

*6 県図本「か□せて」

*7 『本朝文選』「入湯桶かたふけて」

*8 『本朝文選』「小」

*9 『本朝文選』「きはつき」

*10 『本朝文選』「銭売」

*11 『本朝文選』「つら」

*12 『本朝文選』「道づれの上をいほど」

*13 都城本「つわ」

*14 都城本は、隣の発句の「あきたる旅の宿」を続け、「雨のはら」といふ前に「の部分なく、発句に続ける。」

*15 県図本「あきしる」

*16 都城本「処」

*17 県図本「くわね□」

*18 『本朝文選』「かり借」

*19 都城本「天」

*20 『本朝文選』「眠りて」

*21 『本朝文選』「金」

*22 都城本「却而」

倭歌の文

よろつの道をまなひ置ける人の、それにひかれて身もなりいて、ひとよなるよすかなめり。仏の、十悪五逆をも捨給わすみちひき給ふなかにも、和歌の道はいひしらすとかや。あるは山路の花をたつね、あるは清きなかれの水をむすひ、或は野へのおしかの跡を尋ね、あるは雪のあしたの小鷹狩、をりふしの御遊たゆる世なし。定家の朝臣、中将の^{*1}を望み侍りしに、事申とて父の入道の読奉りし歌、

小さゝ原風まつ露の消やらてこのひとふしを思ひ置哉

其頃、老の病をめて、いかならんと聞えしほとなり。つかさめしの比にも侍らさりしかは、とかくの御返事もなかりけるとかや。程へてつかさめしあるへしなときこえしに、むすめ申驚かされたりけるに、御返事かくなむ、

小笹原かはらぬ色の一ふしも風まつ露に多やはつれなき

其たひとけられ侍りにき。其後、兄の中将成家朝臣も三品の位にゆるされて、其子のぬしもうち統、侍徒になされにき。それも皆道をおもくおほしめす故也。定家中将の^{*3}君もまいられたりしに、御前にめし入てよみて給ける御歌、

すみよしの神も哀と家の風なをもふきこせわかぬ浦なみ

今年三位の入道は九十年の齢になむみち侍る。此道にかはかりたくみなる人の今の世に残れる事、こしかたゆくすゑ有かたかめるを、去年の比まては御会のたひにつよ／＼しけにてまいられしか、今年と成てはずこしみしろきも叶はずとて、かきたへまいられず。それにつけても此世のめいほくをきわめはてせんと思しめして、光孝天皇の御時、花山の僧正、仁寿殿にめして賀を給われる例として、倭歌所にして賀給ふへきよしおほせ下さる。霜月の廿日余三日とさためられて、先屏風の歌とてめされける。

春帖

霞

撰政

春かすみしのふ衣をおりはへていくかほすらん天のかく山

若草

御製

したもゆる春日の野への草の上につれなしとても松の淡雪

花

けふまては木すへなからの山桜あすは雪とそ花のふる郷

夏帖

郭公

前大納言忠良

ほとゝきす鳴一声にさよふけてふすかとすれはしのゝめの空

五月雨

雅経

かめのおの滝のしら玉千世の数いはねにあまる五月雨の空

納涼

女房讃岐

ゆきかへりすゝみにきつる^{*5}猶柴やしはしの秋をたもとにそしる

秋帖

秋野

女房宮内卿

月といへはやとる影まで待ものを露ふくくれの野への秋風

月

御製

秋の月しろきをみれば鶺鴒のわたせるはしに霜のさえたる

紅葉

前大僧正慈円

なかめつるこゝろの色をまつ染てこの葉にうつる初時雨かな

冬帖

千鳥

女房丹後

きつゝなけ我すむかたの友千鳥あしやのさとの夜るの緞ねに

氷

俊成卿女

秋をへてやとりし水の氷れるをひかりにみかく冬の夜の月

雪

定家朝臣

花山のあとを尋る雪の色にとしふるみちの光をそみる

此題三首よみてまいらせ、あわれたりしを、人々めし集めて一首つゝ撰出されて、絵所のかしこき限めして、此うたのこゝろをいひきかせてかゝせらる。

* 1 振り仮名、東大本のまま。

* 2 県図本「聞へし」

* 3 振り仮名、東大本のまま。ただし、左傍にあった注記を右傍に移す。

* 4 都城本「かめの尾」

* 5 都城本「猶」か「槽」か不明、県図本は「槽」。

* 6 県図本「木の葉」

辞世詞

東山長嘯

王公といへとも、あさましく人間の煩をはまぬかれず、何のやくなし。すへて、身の生れいてさらんにはしかさらん。まして、いやしくまつしからんはいふにたらず。されは、死はめてたきものなり。二たひかの故郷に立帰て、始もなく終もなきたのしひをうる。此樂をふかくさとらさるともから、かへりていたみななく、おろかならすやとそ。

露の身の消てもきえぬ置ところ草葉の外にまたも有けり

あとまくらもしらすやみふせりて、口にいつるをふとかきつくる。

人、わろふへきことなりかし。

人心の詞

水底の魚、天辺の鷹、高も射るへし、底^{ヒキ}きも釣るへし。只人心は咫尺の間に有といへとも、是をはかりかたし。天をも度るへし、地をも量るへし。人心は防^マへからず。虎を画に皮を画て骨を多かきかたし。人をするに、面を知て心^マを知らず。人面を対して語れとも、心を隔^マるには一千里、誠に知りかたきはひとのこゝろなり。

* 1 都城本「防くからず」

* 2 県図本「しらす」

* 3 都城本「隔には」

* 4 県図本「人」

さなきたにうへてねられぬ夜な／＼に、枕にちかきさゝ波の音とよむ／＼おきて浜辺に出て見れば、舟にたくかゝり火のかけは海的面にかゝやき、島にたく里火のかけは、ほしか川辺の螢かとも見えたり。島よりかよふ千鳥の空音、浜辺に友よふ衛の声、いと面白かりければ、帰らむ事をわすれ、しはらく松のもとに座し、古き歌を吟す。はるゝ夜のほしか川辺のほたるかもわかすむかたの海士のたく火か

寛永十五年七月日前志摩丞

伝意齋

前長老古溪和尚下

一橋存溪居士

平安城の文

桓武天皇の御時より此京はしまり、四神相応の地にして殊更かしこ
き君の御まつりこと、関の戸さゝぬ折節に、洛陽御見物候へく候。
みかとの御宮造は申も中々おろかなり。先音に聞えし東山、吉田
とかやは、あまてらす御神をはしめとして日の本六十余州の御神を
勸請ありし靈地なり。弓手に高き御山は、和国無双の比叡山、伝教
大師の開基にて、唐土の天台山をうつされたり。中堂、講堂¹、戒壇
堂、ふもとに山王、廿一社、ゐらかをならへて立給ふ。馬手は黒谷、
真如堂、若王神社、永観堂、あつまくたりの道こえて、祇園の社、
清水寺、地主権現の花盛、音羽の滝の白糸をくり返しつゝうち詠
め、大仏殿は盧遮那仏、うたの中山、清閑寺、今熊野をもうち過
て、いつも秋にはあらねとも、東福寺にて名も高き通天の紅葉、稲
荷山、咲みたれたる藤の森、うつらなくなる深草山、ふしみの竹
田、淀、鳥羽までも見えて候。扱又、たつみは宇治の里、八幡、山
崎、たから寺、松の尾、かつら、梅の宮、御室に近き小塩山、嵯峨
や高雄、あたこ山、うつまさ、北野、糺の森、加茂川、きふね、く
らま寺、岩倉、せれう、八瀬のさと、いたゞきつれた小原木や、薪
に華を折そゑて、おもふまゝにはいわれぬ、いともやさしき賤かわ
さ、よし野、初瀬の花までも、都そ春のにしきなり。誠や、九重に
は法華經八軸を地にしきて、一たひ王城の地をふめは、極楽世界に

生るゝと承候得は、我等こときのしつの身までもたのもしき事に社
候へ。くわしき御事は御けんにて申すへく候。

*1 都城本「講」(「堂」なし)。

芳野記

飛鳥井大納言雅章

洛陽三月春如錦といへるもろこしの歌はあれと、みよしのゝ芳野の
山のはなのにしきには、なとたちまさり侍りなむ。おもひやる春も
いくはるにかはへりぬらん。さらはことしこそと思ひ立て、大宮人
のいとまあるころなれば、おほやけの御気色をうかゝひ、弥生の十
日あまり七日のそらにか、彼山にたとり入侍りぬ。ふもとののはなは
やゝちり侍るを、山のさくらはまた盛にて、所から、折から、いへ
はさらなり。あなひする人に尋行に、遂そ花みな好されはなん、所
々³の興をおもひつゝけて、はへなき言葉をかたはしいひはるもな
かゝ³はなのあらしとやいふへからぬ。よしの川のわたし船よりあ
かりて、やまのそはを行ほとに、きしの款冬の盛にみへて、水にう
つれるを、

よし野川きしねに咲るやまふきのはなのうへこそ花のしからみ
ちらぬまはかけをうつしてよしの川なみにしからむみねの山ふ
き

六田の淀は今も柳のいと⁴のうちはへなひくを見て、

青柳のみとりにそめて川浪も六田のよとにかゝる春風

一坂といふ所のさくら一木みちのゆく手に盛なれば、

みよしのゝさくらひと木にまつみせて山くちしるくにほふはる

風

四手懸の明神を拝みて、

吉野山はなのゆふしてかけまくもかしこき神のこゝろをそしる
千本桜とて数あまたなり。

ふきませてふかきやいつれ吉野山千本に匂ふはなの春風
隠れ松とおしへけるはまことや花にむもれぬ。

盛なるはなにかくれて名もしるくたてるやいつこみよし野々松
三船をさして見渡待るに、はなはさかりたるやうになむありける。

夕附日はなにこかれてみふねやま雲のなみちに匂ふはる風
四本さくら、蹴鞠の興を思ひいて、

まりのはにうつしうへなむみよしの、四本のさくらおもかけに
して

金御嶽にて、

しはし猶ゆふへをのこせ入相のかねの御嶽のはなのひかりに
佐抛明神の山を御影山となつて、天人の御影のうつりしよりのこと

かたり侍しかは、
さなきたに佐抛の神の御影やまうつろふはなに風もこそふけ

芳野山を、

雲もゆきも及はぬ花にまかふとはよしのよくみぬ人やいふらん
宮こにもき、しはふもとよしの山はなよりほかの雲はまかはす

聞しよりみるはまさりといひけること、も、此たくひにやはへりな
む。

咲初てはなに日数やつもるらん雪をわけいるみよしの、山

袖振山は天武天皇の御琴を弾し給ひしに、天人あまくたり、乙女子
の歌をうたひて袖をひるかへしたるところなれば、

むかしをもかへすやいかに乙女子か花の袖ふるやまかせそふく
布引桜は高峯より咲つゝきて見え侍りぬ。

布引もにしきとみえてよしの山名に越にける花のひとしば
雲井桜は名におひて高根にみへ侍りぬ。

おなし名の雲井のはなも御階さへおもひやられてみよしの、山
鷲の尾山とおしへはへりしに、

かねの音の雲より匂ふみよしの、はなもうへなきわしの尾の山
滝桜は布引といひしやうに、嶺よりさきつゝきたればにや、

いかなれば水なき雲のみよしの、やま滝さくらはなのなみたつ
子守明神にまひりて、

みよし野の山ふところにおひたちてこもりの宮の花そことなる
躑躅岡は名もしるくみえ侍りぬれば、

おりにあへはよしの、花も紅のつゝしの岡は色にとられて
紅ひの色にとられてみよしの、つゝしのおかははなやけたれむ

遥谷はふかき谷にて侍しも、はなにむもれぬるやうに見へはへれば、
高根よりみればはるかの谷の戸もはなにとちたるみよしの、山

西行桜は、此法師の此山に三年の間住居せし所なりと語りしかは、
花ちりなはとよみしことのはもこの所ならんかし。

はなにいりて思ひしられぬよしの山やかて出しといひしこと
は

青根の嶺は、はなもみえず侍れば、
春風やあやなきそへしみよし野の青根かみねにはなのふるさと

夏箕川に、はなの流るゝをみて、
木々の色もその名にちかし夏箕川さくらなかるゝ春のやまかせ

宮滝といふ所にて、

なかれゆくはなのしらゆふかけそへて春にいさめる神の宮滝
桜木の宮は高ねたきのかたわらにみえて、はなのにしきも滝のいと
もておりいたしたると艶におほへ待れば、

滝*11のいとをはなにうちかはへてよしの山にしきおりなすさくら木
の宮

水分山にて、寿証法師の詠に、みよしのゝ水分山の滝つ瀬も末はひ
とつの流なりける、と詠し侍りしを思ひ出して、

滝つせの水分山にちるはなも流のすへにまたやあふらん
妹背山を詠やりて、

浮なかのたか涙よりよしの山妹背の*12

やう／＼日もかたふき侍れば、ふもとのさとにたち帰るとて、蔵王
権現の前にさくらを三十本うへさせ侍りて、

いつかまた十といひにしみよしのゝわかうへ置しはなをきて見
む

- * 1 県図本「比」
- * 2 都城本「花みなふされは」
- * 3 県図本「はなのとやいふへからぬ」
- * 4 都城本「糸」
- * 5 県図本「うちはへて」
- * 6 都城本「及はむ」
- * 7 県図本「桜」
- * 8 県図本「はな」
- * 9 県図本「花」
- * 10 県図本「ことの葉」

- * 11 県図本「たきのいとを」
- * 12 三本とも、以下空白。

芳野賦

文章

芳野をみよしのといふは、皇居の地なれば也。山、川、里、嶺、嶽、
高根、尾上、山の井、花園を詠す。凡て二十一代の歌数三百七十余
首、猶家／＼の集、物語類、詩、連、誹諧のたくひ、佐河田喜六か
朝な／＼、貞室老人の是は／＼まで、かそふるにいとまなからん。
されは、もろこしの吉野とは、おほひまふち君の誹諧の歌よりはし
めて、芳野川花の音するとは、慈鎮和尚の大なる歌の手柄也。川は
巴か洲よりわかれて、紀の和歌山に落、山は大峯よりつゝきて、那
智、高野につらなり、蔵王堂は三所に安置し、一郡は八郷とかや。
上市よりは飯貝にわたり、下市をこえては六田よりのほる。妹背山
を隔て高取の城にむかふ。千もとの桜、日本か花、桜田の谷、さく
らか嶽、せきやのはな、滝桜、雲井桜、布引の桜、矢倉*1、籠の水、
あらし山は亀山の御宇に都にうつされ、袖振山は天武帝より五節の
舞をはしむ。清見原の天皇は国栖人の船にかくし、後醍醐帝は吉水
院を皇居にさたむ。義経も此院に宿り、秀吉も此寺を本陣とす。賀
名生は要害の御所、如意輪寺には御廟を築つく。厨子の扉に南帝勅
作の詩を自あそはし、過去帳の奥には楠正行最期の歌を留む。判官
の鎧、弁慶か太刀、口の山門は彦四か痛腹の所、躑躅か岡は忠信か
空腹の地なり。勝手の宝蔵には静か舞の装束を納め、子守*3の押殿考
歌仙は定家卿真蹟炎上ノ後狩野永清か筆ナリ、桜木の宮、金情明神、力乞*4の不動、廻
り地藏、尊算の御影堂には花供養の餅をまき、五台寺、桜本は当山

の先達^{※5}なり。大滝、宮滝、西河滝、馬滝、蟬か滝、清明か滝、菜摘川、とく／＼の清水、外象の橋、神子の水、鷲の尾の鐘、滝返^{※6}しの岩、亀石、玉石、大杉殿、人丸塚、若葉の鳥井、鏝懸の松、かけるふの小野、猿引坂、琴堂、琵琶山、青根か嶺、釈迦か嶽、七十二なひき、八十の窟、是皆順逆ふたつの通路なるへし。産は頰巾、ほらの貝、火打、塗物、紙、漆、葛、榎、たはこ、釣瓶鮎、柿木の子、籠細工、木鉢、材木、山折敷。桜は芳野に名たかく、よしのは桜にて名を挙たり。麓より奥の院までは、左右の山々、前後の谷々、只雲を攀登り、唯雲をくたるかことし。海道の吹ためには落花の波を揚げ、木間のあらしは寒からぬ雪をふらす。麓ははやくは奥はおそし。開落、山の浅深によれり。春、此山に登り、何れか花の盛ならん所^{※9}はあらし。夫、桜の名目は伊勢桜、江戸桜、火桜、樺桜、うはさくらは葉のなきをいひ、塩竈とははまに咲といふ事にや。熊坂といひ、楊貴妃と云。世に色よさかきつはたは八橋と名付け、よく垂る萩を宮城野と号す。されはむかしよりたゞさくら^{※10}の名に吉野といへる華を聞かす。只よしのとも桜とも、理屈をつけぬ社高みなれ。

* 1 『本朝文選』では「花矢倉、花籠の水」

* 2 都城本「最後」

* 3 『本朝文選』では「子守の拝殿の哥仙は」

* 4 『本朝文選』では「金情の明神」

* 5 都城本「也」

* 6 『本朝文選』では「電返し」

* 7 『本朝文選』では「琵琶堂」

* 8 『本朝文選』「は」なし。

* 9 『本朝文選』「ぬ」

* 10 県図本「桜」

洛陽東山深草元政法師草庵の腰張に

不幸にして世を背ける墨染にもあらず。髪ゆふかむつかしきにかみをそる。茅の軒端に身を軽ふ、こゝにとゞまり居て楽む心から、浮世をみるに、東西にわしり南北に行く人多、わか身をおもふことの業のみに足を空になして、芳野のはなの命をも知らず。深草の鶉の声聞ては焼てしてやりたいとのみ思ひ、後には何になることそや。静ならざる事は人間のみにあらず。山をいつる雲は雨を催さんといそかわしく走り、深草の鹿は妻こふる世話にこゑのかきりなく。是をおもふに、此身ほと隙に楽なことはなし。恵心の作の仏一体もてとも、後世を願ふ為にもあらず。もちつたへたる道具なれば、御宿申までなり。極楽へゆき、たのしみたひとおもふ欲なければ、地こくへおつる思ひもなし。死ぬるまでいきよふとおもへは、としの寄もへちまともおもわず。籬のこほれたねの夕かほ、まかるふか、すしろふか、あんなものとおもひ、小雨ふる小夜あらし、ふるふか、ふるまひか、われひとりくるしみにあらず。ひさをいるゝ二枚敷、土釜ひとつに埒明そふなくわぬ身には聞れまいともいはぬ鶯の初音などを聞、夜着もたぬ家にはさすまいともいわぬ依怙最頂もなひ軒もる月を詠め、寝る筈の眼なれば、ねふたければ昼もとち籠り、あるくはつの足なれば、手のやつこ、足の乗り物、心のまよふところにとゞまり、盗せぬ身なれば人もとかめず。覚たることもなければ、わすれたることもなし。年も数へたることなければ、い

くつやらしらす。

*1 都城本「たひ」

*2 都城本「恵心之作」

*3 都城本「地こくえ落る」

伏見の隠者の文

吳竹の伏見の里に何かしと云し世捨人有しか、あわれ我身ほとひまなるものはあらし。爰に恵心の作の無量仏一体あり。是必念仏の為にあらず。持たる道具なれば御宿申はかりなり。

狭とも御宿申て無量仏後世をたのむと思召なよ

上品蓮台に座して楽みたひとおもふ欲かなければ、地獄に落る苦もなし。死るまで生てあるふとおもへは、春秋のくるゝを一錢ともおもわず。寝る為の目なれば昼も枕し、ありく為の足なれば夜ひとひたゝきあるけども、盜せぬからは人にもとかめられず。筥にこほれし軒のあさかほ、ゆかまふとすちろふとかつてしたひなり。あんなものとおもへは、朝日に凋むを見てもけしからすおとろく事なし。花薄の穂に出てひらしやらするも其通り、小夜時雨は降とふるまいと我一人の苦にもならず。正月雑煮喰ぬ者に聞れまいといふうくひすを鳴きしたひにきゝすてゝ、

飾せず門松立てす餅つかすかゝる家にも春は来にけり

夜着もたぬ家に依怙最負せず、むさしの月に向ひ、膝を容るゝ二畳敷に甚大瓶も櫃もたす、土釜一つに埒明、覚たる事もなければ、わするゝ事もなし。年をかそへたることもなければ、五十やら六十

やら。

*1 都城本「ふるまひと」

*2 県図本「あらず」

多葉粉盆記

春の曙、霞渡りし四方山を詠め、三界唯一ふくと吹出す煙は、思わんかたにたなひきにけりとよめる塩竈にやとうたかひ、秋の夕部、閨に籠りて故郷をおもふきせるは、恋の吳竹かや、拍子とるちやうちん／＼と灰吹にかよふ音は、松虫のねにまかふ。よろつにつけて気をはらさむたね敷。

楠氏石碑之銘

楠河内判官正成は、智勇古今に秀て、機に望み変に応して城を守り、謀を帷幕の内に巡らして勝ことを千里の外に決す。一世の奇策謀略勝ていふへからず。後醍醐帝に一度頼まれ奉て、忠臣の美名を揚ぐ。惜哉、足利尊氏卿、西海の波に数万の兵船を浮へ、摂州兵庫に着岸の日、聖運の開¹るましきを知て、遂に彼地に自殺せらる。今に至て天下の人、樵夫、牧童までも其忠貞を感じ、其神策を美談せり。されは、近世元禄²四辛未の年、貴君、楠氏の徳を感じ思召れ、其旧跡の、末代に至なは廢れん事を嘆かせられ、兵庫民家の逃れ、正成の墳墓を再興遊はされ、碑石を立させ給ふ。土台は当国御影石を以て、高さ五尺、方一丈四面になされ、中段共に御影石にて、高さ二

尺、方五尺四寸なり。其上に洛東白川石を以て、長さ三尺、幅二尺、高さ六寸の龜形あり。其上に居る所の石塔は和泉石を以て、高さ三尺八寸、横一尺五寸なり。土台の下には石棺を埋ませられ、棺中には亘一尺二寸の円鏡を納めさせ給ふ。其鏡の裏の銘に、楠正成靈源光国造立あり。碑石の表には、嗚呼忠臣楠子之墓と刻せられ、裏に碑の銘あり。其文に曰、

忠孝著乎天下、日月麗乎天、天地無日月、則晦蒙否塞、人心廢忠孝、則亂賊相尋乾坤反覆、余聞、楠公諱正成者、忠勇節烈、国士無双、蒐其行事、不可概見、大抵公之用兵、審強弱之勢於幾先、決成敗之機於呼吸、知人善任、体士推誠、是以謀無不中、而戰無不克、誓心天地、金石不渝、不為利回、不為害戕、故能興復王室、還於旧都、諺云、前門拒狼、後門進虎、廟謨不藏、元兇接踵、構殺国儲、傾移鍾簾、功垂成而震主、策雖善而弗庸、自古未有元帥妬前、庸臣專斷、而大将能立功於外者、卒之以身、許国之死靡他、觀其臨終訓子、從容就義、託孤寄命、言不及私、自非精忠貫日、能如是整而暇乎、父子兄弟世篤忠貞、節孝萃於一門、盛矣哉、至今王公大人以及里巷之士、交口而誦說之不衰、其必有大過人者、惜乎、載筆者無所考信、不能發揚其盛美大德耳、

右故河摺泉三州守、贈正三位近衛中將楠公贊、明徽士、舜水朱之瑜、字魯璣之所撰、勒代碑文、以垂不朽、

今既二三百余年ノ歳霜ヲ歴ルトイヘヒ、貴君、南木氏ノ知仁勇ノ三徳ヲ褒シ、其忠戦義死ヲ感シサセ玉ヒ、末代ノ将士ヲシテ忠勇ノ道ヲ勸メサセ玉フ、豈其徳大ナラサランヤ、

*1 県図本「開くましき」

*2 都城本「元禄四年辛未の年」

*3 都城本「其鏡裏の銘に」

一 御手前万事御才覚肝要に候。先書に何事も天道次第との御文にて候。尤其分に而候得共、唯居て天道より、金銀米錢にても、人にあたへられたる事は無之候。たとへば、一石の米を天道次第とて片端から喰ひ終ぬるとおなしものに而候。跡続申ましく候。何事も人間のわさと御心得候へく候。天道は此方次第之物にて候。又天道次第と云事の候へとも、よのつねの人の知る事にて無之候。世上に申天道とは、はな／＼ちかひ申候。古今より蓮の葉は丸く、松の葉はほそく、其ごとく天道の体は我身のちやうきにて候。身の程を能く知り、小身の者は小身の者程に身を引まけて花麗せず、大名は其程に身を持候を、天道に任する心にて候。百石取の、二百石取の人程にして身を持、是を天道に背とは申候。目前のきやうかひにて候。天道に背候を身に似合ぬ振舞をする人、貧苦に責られ、身を失ひ、家を捨る、是天道の罰と申候。鶉のまねを鳥かして水に入は、溺れて死するを、天道の罰と申候。鶉は鶉のまね、鳥は鳥のまねをしたるか、天道に任する心にて候。尽人之身体を失ひ、又迷惑する事は天道に背故にて候。此理を知らずして、唯天道／＼とはかり人ことに云て寝て居て、天道から食物をあてかふと思ふ事、大なる誤なり。世中に居てくるしみをへねはならぬか、有様の天道なるを、楽をせうと思ふ、是天道に背なり。とかく如何なる細工もちやうきなくてはならぬ事にて候。人は人を以てちやうきとしたるか能なり。たとへは我身の分限は何程の身体成とも、我なみの人の分限のさはきを

見て、それほどに身をもつへきと思ふ分別、専に而候。それも又我心のやうなるを定偽にしてはちかひ申候。分限は我と同じくして身を持、分別のすり切らぬ人を見て定偽としたるが好候。しやくしか定偽にしてすくなるは切られぬ物にて候。貴台は分限より御家中手広に見得申候。天道に御背候間、つめ悪候はんと笑止に存し候。我等申たるはちかひ申間敷候。冬は寒きものにて候。暖候得は、明年の草木悪候。夏は暑物にて候。暑く候はねは、来秋悪候。それ／＼の位のちかわぬか天道にて候。大なる物は大なるか能候。小成物は小成か能候。とかく身の分限に相応して、人を五人抱身上にて十人抱ては手前あしく候。十人抱身上にては九人程の心持能候。上へこし候分別悪候。月を御覧可有候。十五夜にて十分やまんまるに成候得は、十六日より一分かけ申候。是、人間のみせしめにて候。何事も如此行ふと御心得候へく候。

思えたゝみつれはやかてかく月のいさよひの空や人の世の中と古歌にて候。いさよひとは十六夜の事にて候。かやうに長々敷書状を書申事、繁むつかしく辛勞に候へとも、御為能候へかすと存、如此候。何とそ一ふり体を御替候て、借分なとめされぬやうに御分別尤に候。したしき親類の中もうすみ、恨無人に恨をいふ。よからぬ事は貧道に而候。此才覚候へは神仏も不入事候。

心たにまことの道に入らはいのらすとても神や守らん
猶期後便候。 恐々謹言

申十一月廿三日

秋葉半右衛門殿

沢庵

- * 2 県図本「引さけて」
- * 3 都城本「悪く候」
- * 4 都城本「に而候」
- * 5 都城本「成候得共」
- * 6 都城本「方」
- * 7 県図本「思へたゝ」
- * 8 県図本「人の世の中と古歌にても」を欠く。

鶴の記

町田俊雄仲右衛門
御記録奉行

歳在戊申享保三年三月廿六日、東武芝の邸御奥修造宮替及び部屋の栖居も有て、其事こと／＼く畢り、今日以吉日の故に、各先移初あり。仍て、護麻所安養院を徴して、屋堅のため講読せしむ。時に御路地長屋の上に靈鶴一隻来り留り、人に恐れたる気色もなく、次第に屋上を下り来る。見る者皆奇之とす。番人、偶／＼小き竹に纒たづに鳥もちをつけ投しかくれば、羽に投しつけ飛立事なりかたく、下りかゝるを則是をとらふ。其高さ四尺許り。別に絵形あり押川元春然も羽毛少しも損せず、早速より餌に付、多年似所馴養。夫鶴行ときは、必依洲渚、止ときは不集林木と、古書にも見えたり。然るを、茲に来り留り、自然ととらへ得る事、可謂希代之事也。まさに今修造宮替御講読有て、部屋の移初も有之最中に、靈鶴禎祥を奉るの賀瑞なるへし。可以祝焉。可以喜焉。この日、鶴五翼舞上天、人々まのあたり所見也。今斯一隻は来於其中者乎。蓋し鶴者羽族之宗、仙人之驥驥也。鐘浮曠之藻質、抱清廻之明心、指蓬壺而翻翰、望崑閩而揚音、匝日域以廻驚、窮天歩而高尋、踐神区其既遠、積靈祀而方

多と、相鶴経又は鮑明遠か鶴の賦にも見えたり。由是考之、今来留干茲^{*3}、且自然と獲之養之³こと、誠に其賀瑞を奉るしるし、疑あるまじもの也。本朝にても、昔延喜の御宇、勅礼部省掌賀瑞之事、瑞に^{*4}有上中下、此鳥を以為之瑞と云々、可以并按也。聊此祥瑞をして永く不朽にたれしめんとす。故志之。

右鶴図并記 御書院の官庫に蔵む。

*1 県図本「戊申」

*2 都城本「次第〱に」

*3 東大本・県図本「干」、都城本「于」

*4 東大本「勅礼部省。賀瑞掌之事」とあり、県図本「勅礼部省。賀瑞掌之事」、都城本「勅礼部省賀。瑞掌之事」とする。

智光院殿墓誌銘

山田君豹

夫人は姓は源、島津氏、むらと称す。父は宗^{*1}臣島津大学久尚、母は浄国公第七の女なり。享保二十年三月十五日、薩州鹿兒島に生る。先に、

慈徳公群臣をすて、今の 公東武に朝し、命を奉して封を襲くに及んで、寛延三年十一月二日、夫人を本国に逆へ立て国夫人とす。夫人、天資静淑温恭にして、つゝしみて婦訓に従ひ、今の公に奉する事實のこことく、夙夜謹飾してみたりに戯笑せず。下を御するに、ひとつに恩を以す。内人といへとも、其喜愠の色を見る事なし。燕居には書を学ひ、和歌を好み、兼て琴を鼓し、香を品してたのしみとす。宝暦四年閏二月二日、疾を以東武芝邸の内寝に卒す。享年二十。

子なし。法号、智光院殿心顔貞鏡大師。同郷の大円寺先塋の次てに葬むる。謹て爰に誌す。

*1 県図本「家臣」

通昭録卷之〔四十四〕^{*1}

- 一 惟新公賜於下公主文
- 一 大高源五呈母文^{*2}
- 一 おのこ草 鉄舟
- 一 咬啗吧文 春女
- 一 釈迦眞実法門 樗山

*1 東大本には卷数なし。景凶本は鉛筆にて「四拾四」と書きこむ。都城本により補う。

*2 都城本「源吾」

惟新公賜於下御方文^{*1}

一 其後ははる／＼御をとつれうけたまはらず、御ゆかしく存候。おりふしむつのかみ殿よりつかひをさしのほせられ候間、一ふてとりむかひ申候。その御かた、なに事おはしまさず候哉。このはうも御はうへをはしめ、いづれも一たんとさかしく御入候まゝ、御心やすかるべく候。しかれば、りうきうの事、きんねんあまりわれまゝのふるまひにて、大こくの儀をもつはらにもちひ、日本をおもひあなとり候て、すてにさしわたし候つかひもうけつけず、めんほくをうしなひ、手をむなしく罷帰体候。しかるあひた、むつのかみ殿より、^{「秀忠公」}ゑと、^{「家康公」}するかへ御意をえられ候て、当はる、りうきうへ人しゆさしわたされ候。もとより彼くにもまちなうけたることに候条、ほこのはをあらそひ、^{「源朝」}なはと申込みなど、日本よりのわたりくちのよし候間、題目にあひかこひまかりあるよし、も

れきこえ候まゝ、このたひとかひのくんしゆに、われら申きかせ候は、彼なはのみなどへはかもはず、あらぬ所へひやうせんををしつけ候て、うしろをとりやふり候は、たとひ一旦はふせきたゝかふといふとも、つゐにはしうりをえ候はんかと申候つる。そのことく別のみなとへ舟をつけ、人しゆをおろし、在々所々のいゑともをほうくわし、せめはたらき候間、あんちうなから、彼^{*7}くにのものとも、うへしたにあはてさわき、なにの手たてもまかりならず、ひたすらにかうさんをこひ、しゆ／＼わひこと申候間、せひをもたすにをよはず。いのちをたすけ、和ほくつかまつりたるよし候。それより彼くのにの事、しゆ／＼にいたるまでのこらさあひしたかへ、あまつさへりうきうのていわうをはしめ、さんすくわんその外、かしらたちし衆を当こくのくんしゆとうせんに、さつしう山河のつへはやちやくせんのよし申きたり候。かくのこどく日本より他こくに人しゆ御わたし候ことは、あまねくうけたまはりつたへす候。そのうへ、いこくのくわうていをわかつてうへわたし候儀は、ためしなきことゝ存候。まことにさうはんりをしき候てくんしゆまかりわたる儀候間、かれといふ、これといひ、こゝろつかいあめやまにも処におもひの外にうちかち候事わたくしならず、たゝ仏神の御かこ、^{*8}第一は大御しよさま、^{*9}当しやうくんさまの御いくわうゆへと存斗候。ことさらみかたはおほくもほろひ申さす候。やうやくさうひやう一二百人ほともせんしつかまつりたるよし申候。かやうにいこくをしたかへ候はんには、百二百のせんしはわつかなることゝ存候。いづれもこゝもとのよろこひ、みしかきふてにつくしかたく候。ついでのおりからは、^{*10}かうちのかみ殿へもこのよしほゝおほせつたへ給ひ候へく候。ま

た申候。このはより御とも申候しゆ、いつれもいつれもみやつかへしんのよしおほせきかせ候て然るへく候。こゝもとまこさへもん、とう七ひやうへ、一しほけなげにほうこうつかまつり候間、こゝろやすかるへく候。ことにせんとは、いと所よりのこゝつてすなをにあひとゝき候。まことにゑんはうの心さし、よろこひにたへかね候。このよし、ほめかし候て然るへく候。次にとうりうの又五郎殿、なか／＼こゝちれいならすまし／＼候間、いろ／＼やうしうをつくされ候へとも、そのしるしもなく、ちかきほとにはてられ候。いまたなんしなともまうけたまわぬさきに世をはやうしたまふこと、申てものこりおほきことまてに候。もしあねこのしうたん、中／＼申もおろかに候。御すもし候へく候。かねてはちんかう一きんおくりまいらせ候。うれしきながら御をとつれのしるへをいさゝかあらはす斗候。よろつめてたく

誰にても

参申給へ

- * 1 東大本、朱書。
- * 2 東大本の傍書は朱書（以下、同じ）
- * 3 都城本「そのその御かた」
- * 4 都城本「那覇」と傍書。
- * 5 都城本「つひには」
- * 6 都城本「人数」
- * 7 都城本「国」
- * 8 県図本「第一は第一は」（衍字）

* 9 東大本「家康公」「秀忠公」（朱書）は左傍にあり。今、右傍に移す。

* 10 都城本「折から」

* 11 都城本「こゝろ」

大高原五呈母文

一 私事、今度江戸へ下り申候そんねん、かねても御物語申候通、一すちに殿様御いきとをり、御家の御ちしよくをすゝき申たき一筋にて御座候。かつは、侍の道をもたて、忠をもつくし、命をすて、せんその名をあらわし申にて御座候。もちろん、大勢の御家来にて御座候へとも、いかほとか／＼御厚おんの侍御座候処、さしての御懇意にもあそはし不被下人なみの私儀にて御座候へとも、此節大体に忠をもそんしなからへ候て、そもしさま御そん命の間は、御やういく仕罷在候ても、世のそしりあるましき我等にて御さ候へとも、なましひに御側近き御奉公相つとめ、御尊顔拝し奉りし朝暮の儀、今以かた時わすれたてまつらす候。誠に大切なる御家をも思召はなされ候て、御身をすてさせたてまつらせ候。わすれかたき御家をも思召はなされ候て、御うつふんとけられ候てと思召つめられ候。相手を御うちそんし、剩浅ましき御生害とけられしたん、御うんのつきられ候とは申ながら、無念至極、恐ながら、其時の御心おしはかり奉り候へは、こつすいに通し候て、一日かた時もやすき心御座なく候。されとも、御たんりよにて、時節と申、所と申、一かたならぬ御無調法ゆへ、天下の御憤ふかく、御しおきに被仰付候事に御座候へは、力及び申さぬ

事、まつたく天下へ御うらみ可申上や、無御座儀にて候ゆへ、御城は子細なく差上たる事にて御座候。是、天下へ対し奉り候て、いきをそんし奉り申ゆへにて御座候。しかしながら、殿様御うんせんとも無御座、上野介殿へ御意趣御座候よしとて、御切付なされたる事にて候へは、其人はまさしくかたきにて候。主人の命をすてられし御憤御座候かたきを安堵にさし置可申やう、むかしより唐土我朝共に武士の道にあらぬ事にて候。夫ゆへ早速かたきのかたへ取かけ申へき所、大かくさま御へひもんにて候へは、御免なされ候時分、もしや殿様御跡少しにても被仰付、上野介殿かたへも何とそ品も付候は、大学さま外聞よく世間もあそはし候やうにも罷成候て、殿様こそ右の通に候とて、御家は残申事にて候。然はわれは出家沙門となり、又は自害仕候ても憤はやすめ候はんと、此節まで口おしき月日をもおくり候所に、そのかひなく安藝国に御座なされ、閉門はゆるしと申名斗にて御座候。尤、年月過候て、何とそ御世に出させられ候事も御座候はん。よしさやうに御座候とて、此節にて殿様御跡はたえ申たる事に御座候へは、此上前後を見合申はおくひやうの仕所、武士の本意ならぬ事にて御座候。此上にも天下へ御せう申上、何とそ相手方へ御手あてもくたり、大学さまにも世間広く御取立被遊下され候やうに一命にかけて御なげき申上、無是非候は、其時相手かたへは取懸可申由、頻に相談の衆も御座候。尤、一理御座候やうには候へとも、なか／＼さやうなるとどうかましき事仕へき道理と存し不申、其上御願申上御取上無御座に付、相手かたへ取懸申段、ひとへに天下へ御うらみ申上候にひとしく御座候。然は、以外の儀、大かくさまをはしめ御一もんのかた／＼さままでも御

為よろしからぬ事にて候ゆへ、たた／＼一すちに殿様御憤を晴し奉るより外の心無御座候。

一 たん／＼右申残し候ことく、武士のみちをたて、御主の仇を報し申までにて、全天下へ対し奉り御恨申上にて無御座候。然はいかなる御思召御さ候て、天下へ御恨申上たるも同前にて、我々共のおや、妻子に御たより御座候とて力不及申、万一左様の事になり候は、かねても仰られ候通、何分にも上よりの御下知の通り、しんちやうの御かくこ可被成候。御はやまり候て御身を我と御あやまり被成候御事など呉／＼あるましき御事にて候ま、必／＼さやうに御心へ可被成候。よのつねの女のことくに、かれこれと御歎きの色も見えさせられ、おろかにおわしまし候て、いかたき^{*15}のとくにて、心もひかされ候はんや。さすかつね／＼の御かくこほと御さなされ候て、思召きりかへりてけなけなる御すめにも預り候御事、扱／＼今生の仕合、未来のよろこひ、何事か是にすぎ申候はんや。あつはれ我々兄弟は、侍の名利にかなひ申たる儀とあさからぬ本望にそんし奉り候。先にての首尾のほど、御心にかけてさせられましく候。私三十一、孝右衛門廿七、九十郎廿三、くつきやうの者共にて、たやすく本望をとけ、亡君の御心をやすめ奉り、未来ゑんまの金札のみやけに備へ可申候ま、御心やすく思召し、た／＼御そくさいにて、何事も時節を御待可被成候。御よわひもいとふ御かたふき、幾ほとあるましき御身、さそ御心ほそく、たよりもあらんかたにとほしく、月日を御しのみき遊し候はんとそんし奉り候へは、いかた心うく候へとも、其段は力およひ不申、時にのそみては、生命を背き父母を肩にかけ、いかなる山のおく、野のすゑにもかくれ、また主君のために父母

の命をも失ひ申事、義と申ものゝやみかたきためしにて、これらの道理くからぬそもしさまにておわしまし候へとも、筆にまかせ申残し候。九十郎、母上、お千世へも能々仰きかされ候て、必々おろかになしみ申さぬやうに、たかひに御力をそへまいらせ候。幸哉、御法体の御身にて御座候へは、此後はいよゝもつて仏の御つとめの身にてうさもつらきも御まされましゝ、未来のこと朝暮に御わすれなく、世もおたやかに御座候はゝ、寺へも節々御まいり遊されたくとそんし奉り候。ひとつた御歩行御養生にもなり可申候。うはこもあきらめ候様によく仰られ候へく候。 かしく

九月五日

大高源五

母御人様

しん上

- * 1 東大本、朱書。都城本なし。
- * 2 都城本「江戸え」
- * 3 都城本「かねても御物語申上候通」
- * 4 都城本「御いきとほり」
- * 5 都城本「あらはし」
- * 6 都城本「私義に而」
- * 7 県図本「我等にて御座候へとも」、都城本「我等に而御さ候へとも」
- * 8 都城本「候而」
- * 9 都城本「殿様」
- * 10 都城本「上野助」

- * 11 都城本「相手方え」
- * 12 県図本「とゝう」
- * 13 都城本「なし」
- * 14 都城本「御座候て」
- * 15 県図本「気のとく」
- * 16 県図本「御座」
- * 17 都城本「御心安く」
- * 18 都城本「仰きかされて」

おのこ草

鉄舟

天下泰平国土安穩とは珍しからすといへとも、当世静謐にして土中の金子を掘出す日本第一の重宝山、此所に究れり。男はころふ手に握るも黄金の玉、女は尻ふりても独口は見事に済む。下手な男持より寡め住居かあた錢取と、店借の後家数を知らず。かもめしきの大振袖には一夜に十匁はしむる手の内と、女心の咽算も道理にて有しよな。今はむかしの色里も、築地は崩れこけむして、露しんゝたる草むらに、骸骨のやう成る親祖ひとりに分しり神の稻荷さんも、曾我殿原の氏神とひとしく破壊して不統の渡世、ついにあたゝかの赤食を喰す。おいとしや、軒端の露にうたれて宣ふらん。本に世の盛衰は力なし。何事もか事も色香に消て、夢の夢か桃栗三年、柿八年、物の名とこかねは朽てくちせんもあり。又よひ事もあろふすと旅宿の草庵に類を以て集り、膝を魚鱗に、額を鶴翼にならへ、我佐藤次信にまけし、露打たまへ、うけ留ぬと、毎日毎夜の楽遊、縁なき衆生は同土かたしと、一味の面々、本に命は蓋に抛て死なは一

所と二世かけてのたわけ言、誠に釈迦二千余年の以前はしらす、今当世にはしかしと、その／＼花のもとにつかひ捨る金銀は皆惜からぬ風俗、あつはれ能登守のりたかるはまなこ、煩惱の軽忽かや、久米の仙さまの通を失ひけんも色にひかるゝ腎水の洩るゝ所にあらねは、左もあらんかし。あれは人として酒色の二に疎からは、何かは物のあわれはなからん。野辺に鳴くきゝす、山に妻恋ふ

小男鹿も、これ又同じ色のいろ、況や人の世の中に恋と情のつかみさし、三味の音染による猫も、様といふ字に涎をたれ、二重まふたの諸蟹は、いきた如来を見る心地、しんそ八幡馬のつら、かなはねはこそ浮世なりと御附さしをかたふけては、一万両もおしからぬ分別、御盃を頂ては日蓮のまんたらよりもありかたく、こほれかゝれる鬢の髪に亀甲のさし櫛、おとしさしのかんさしは、天と八幡梅か香を桜の花に思われ、御望ならば股てもそひてやりたふおもひ、人々こゝろの内の男立、外へ見へねはの事と腹一はいのうたゝねには、閑白に跡さすほとこの了簡、四尺樽を見ては、大唐の虎てもたきとる勢ひ、白骨に成ても流石わすれかたきは凡此道そかし。夫、酒はもろ／＼の徳有。有縁無縁、三界万霊、神祇、釈教、恋、無常、一つとして酒のもるゝ事なし。只呑喰ふて酔喰ふて、寝時、起時定まらず。十二ヶ月を夢にして、雨降に笠なし、日照に木履踏ても一生は済むものなり。夫、月を花に、雪を雨になど詠るあんはいを知らず。いつ死ふも定なき世に、隠居の庭にこねり柿の実植するも余り道欲、其人、今ても地獄から使来ると行ねはならぬ身を持たから、千年も此世に有やうに、ほしき物の咽をしめ、酒とる道もしらねは、銭つかふ色もしらす、一生銭の奉行をして、此銭粉にして一文を百品にもやりたきおもひ、

いかひ大たんの御肝、その人娑婆に生き通しの証文か見たし。われ今生を知らねは、猶又後生もなし。死て仏に成やら便宜なければ、終に夷左右を聞かす。何のへちまの革細帯、身滅すれば七文の乱銭にて旅籠までは見事に済と称念寺の壁書に見えたり。嗚呼、死後に千年の名有り。当前金をして北斗をさすとも、さすか一夜の酒色にはしかし。奇哉、妙哉。

金山初音に柿食ほとゝきす

万醉軒耕耨

まへに申所の花の笑顔と書出すも、旅寝の床の徒然に二合飯の八つ腹、臍の下物淋しく寝られぬまゝに、たはこのつゝけ呑も下地なふては済ぬものと、宿を立出詠むれば、いつくも同じとはいへども、滑川流水杉村の風景はとふもいわれぬ。納戸の四尺樽にこほれかゝれる花の笑顔、うつゝうわ言にもよく目にすかり、茅壁に夕日の光を色のかんさしかと指をさし袖をひれ、一心発起、世の中は、色より出る酒の徳、酒より出る色の道、いつれのかれぬ我朝は、酒を愛して眠を覚し、色にはつんで日をくらし、旅宿の草庵に枕を寄せ、掛引さし合詞言、けふの遊ひの思案するも、とふやら唐に投金、二つとりの分別、当日か違ふと身より出す弥陀の光明と、いかな日も／＼す面といふはなし。是を思へは、世に下戸といふ名はとふしたものと、氣有男に問へは、三敷三間の竈に去る將軍の言く、下戸上戸の差別は四季の内、春秋とわかつかことし。上戸は春に花、花盛千年を延る一夢の心地やせめ、其色まん／＼として青葉にうつる。二日酔も親のはらからならぬ上戸のたのしみなり。下戸は夏過ぎ秋も又梢まはらに霜かれて、空は時雨にかきくらし、けふも一期の命の内、あたし月日を送しも、下戸貧法の生れ付、是を見、彼を聞く時は、友ならずして高位に脰を張り、時ならずして月花に肩をな

らふるも、皆是酒宴の徳とかや。人生七十古来稀に、誰かは胎内より上戸といわるゝ人や有か。ならぬといふはなさんゆへなり。

おしへぬに我からわれとこゝろへて恋をも人にならふものかわ

* 1 都城本「一味之面々」

* 2 都城本「たはけ言」

* 3 都城本「けんじ」

* 4 都城本「こも又」

* 5 都城本「やりてふ」

* 6 都城本「きかす」

* 7 都城本・県図本「革細布」

* 8 都城本「在り」

* 9 都城本「二合半」

* 10 県図本「済とものと」

近世外国^{*1}の人、多く長崎に帰化し子孫有しを、寛永十三年、蛮人の子孫二百八十七人、阿媽港に遠流せらる。血脈、父を本とし母にかまひなし。譬は、母は日本の種子にて父蛮人なれば、勿論也。父、日本にて母蛮人なれば、母を流して子は留む。同十六年、又公の命^{*2}有て、紅毛国も蛮国に類せし水土なれば、其種子、日本の種子に雑すへからずとて、則平戸、長崎に在し紅毛、血脈の輩十一人咬啮^{シヤカタ}吧へ放流せらる。此時より咬啮吧へも紅毛人住居して平戸^{*3}へ年毎に船遣しぬ。故に紅毛の子孫、皆咬啮吧へ遠流せらる。此十一人も皆長崎より帰帆の紅毛船に

乗て遣さる。是は蛮人の種子とは違ひ、紅毛船は日本へ停止にもあらねは、年毎に来れる紅毛船又は唐船も往来あるゆへに、故郷の親しき程、或は友たちへ、文、送物などしたりし中に、長崎の町人女、父は紅毛人にて、母方のよしみあるか本に養われ居たるに、此年十四才なるを咬啮吧へ流されたり。此女、顔かたちいとうるはしく、手習ひ常に草紙とならひて、さかしき心はへ也しか、かゝる所に放たれ、明くれ日本^{*4}へ帰らん事を祈つゝ年月を送しか、よるへなくて外国人の妻となり、唐船の便に文おこせし、見る人涙流さぬはなし。

千早振神無月とよ、うらめしの嵐や。また宵月の空も心もうちくもり、時雨とともにふるさとを、出しその日をかきりとなし、又ふみも見しあし原の、浦路はるかにへたゝれと、かよふ心のおくれぬは、おもひやるやまとの道のはるけきも夢にまちかくこえぬ夜ぞなき

御ゆかしさのまゝ腰おれかき付まいらせ候、前業とは申ながら、かゝるうき世に甲斐なき命、なからへ申さむよりは、只世になき身となり候は、いかにうれしからましを、たまゝ花の世界にむまれきて、此身となれる年月をかそふれば、十とせあまり四とせかほとこそおほへ候に、かくうらめしき夷^{*5}す島に流されつゝ、きのふけふとおもひながら、はや三年の春もすき、けふは卯月朔日、まだ東雲に、あすは出船と人の聞えつるに、せめて筆のあ^{*6}としてもとそんな、なみたなから硯にむかひまいらせ候。いまた夜^{*7}ふかきほとにて、いたふくらければ、ともし火すこゝとかゝつゝ、おもひ出ること共かきつゝくるに、此文のうら山しくも古郷にかへるよと思へは、我文^{*8}なからありしよりけにものかなしくて、

水くきのあとはなみたにかきくれてむかしをいかに人の見まし
や

はつかしなから、筆にまかせまいらせ候。そこもとよりの御文、こ
とに御ぬんしんとゝきまいらせ候。先／＼御つゝかなく御座なされ
候よし、目出度そんしまいらせ候。扱／＼、そこもとの御文くりか
へし見まいらせ候へは、一しほ／＼御なつかしき御すいもしなされ
くたさるへく候。わか身は、今につれなきいのちにて、なからへあ
まいらせ候。いつのとき日にか、日本を出まいらせ候や、今はさた
かにもわきまへかたふ、こなたの年月にはなぞらへかたく、只夜ひ
るとなく、ふるさとのこと、つかのまもわすれやらず、おもひなく
さむひまも御座なく候。たま／＼ふるさとにて見申たるに、おなし
ものとは月日のひかりはかりこそ、そこもとにかわらず候ゆへ、
ひるは日の出るかたをなかめ、夜るは月の出るかたを打なかめ、袖
のかわくまも御座なく候。かゝるうき世にならへて、かへらぬむ
かしをこひしやとのみおもわんより、只此世になき身ともかなとこ
そ、いのりまいらせ候へ。さりながら、又うちかへしおもひかへせ
は、世をも人をもうらむへきにては御座なく候。幾万つの人か此世
にむまれきたる中に、我身いかなれば異国の人の子とむまれ出たる
事も、前の世のむくひありてこそと思ひまいらせ候。しからは、今
さら世をも人をもうらみ申ましき事にて御さ候。もにすむ虫のわれ
からとねを社な¹⁹かめ世をは恨じと、二条の后もつらねさせ給ひしと
承候へは、いさゝか世をも人をも恨み申さす。われからとなくより
外は御座なく候。さりながら、此まゝにてはてなんとは存申さす候。
只一たひ神や仏の御あはれ²⁰みにて、日本へ帰申へしとこそ思ひまい
らせ候。たとへ三日をすくし侍らて消果まいらせ候とも、いさゝか

くるしからす候。とかくすへは日本の土となり候はんと存しまいら
せ候。あはれ／＼神や仏の御はからひにて、今一度御けんに入申し
たく候とくれ／＼念願にて御座候。もしも又此世にて逢ひ申さす候
は、我身かね／＼申たることく、友たちは七世の契と承りまいら
せ候へは、必／＼来世にてはめぐりあひ申へく候。けに／＼御かた
みの短尺、又おし鳥の羽など、かた時も身をはなし申さす持まいら
せ候。必／＼来世にては、是をしるしにてめぐりあひ申へく候。又
そや、我身、花たんのはたと仰られて、御みせなされ候こそ、しつ
心なくきへかへりまいらせ候。此花の盛にはそもしさまとこそなか
めまいらせ候に、かれ／＼になりはてゝ、ひとりなむる山ふきの
とへとこたへぬ色なれば、そさまの花の袖の香に、おくれし夢の面
影を、見ることもたまほろしに、あふはあふかはもろともに、つ
ゐに消なん露の身の、われや先たつ、人やおくるゝ、うらめしや。
ありし世にたに恋しきを、めかれなく契まいらせ候はて、今は何事
もみなあたことゝなり行、むかし語と成まいらせ候事こそ、深きお
もひのたねとあこかれまいらせ候。あらこひしのそさまや。しのは
しの友人や。ひとへ二重の色のみか、八重山吹をおくり給ふ情の色
くちはてすおもへとの、御心のうちとこそおしはかられまいらせ候。
山吹の花の千しほはかはるともいはぬ色をはわれわすれめや
われら心の中、いさゝかかはりなふ、くれ／＼おもひまいらせ候。
もろともにうへてなかめし山吹のちりても春のおもかけを見る
なつかしや、こひしや、古郷を出しはいつの時にやと思へは、袖の
かわくまも御座なく候。いやしき夷の島にすみまいらせ候とても、
御おもひすて下されましく候。我身の露は秋の田の、穂のうへ²⁴てら
す稲妻の、光のまもわすれ申さす候。折から雨風のそよくにつけて

も、御なつかしき思召やられ下さるへく候。あまり日本の恋しくて、やるかたなき折ふしは、あたりの海原を詠め候より外は御座なく候。けにや古き歌に、

大そらは恋しき人のかたみかは物思ふことに詠めこそすれ

と読し人までも、身のうへにおもひあわせまいらせ候。又過にし弥生三日の日、家の内の女房達、みなくあそひに出られ候に、我身もさそわれ候へとも、参申さす候。それにつけても、其もとの御事とも思ひ出まいらせ候。そもしさまへかやうにわかれ申事、兼てよ
り存しまいらせ候は、夜昼となくはなれ申さす、なれむすひ候はん物を、いつまでもとおもふものから、有のすさひにもてなしまいらせ候事、今さらく心にかりまいらせ候。

わするへき時しなければむは玉のよるはずからに夢に見えつくと古ことのはにおしはかりくたさるへく候。細く申入たき事、浜の真砂のかすく候へとも、あまりく心みたれ、あとさきわかちかね候ま申まいらせ候。助右衛門様、九郎様、同じことに申まいらせ候。又そやこうせん町おかたさまへ文まいらせたく候へ共、出船いそき候ま、そへ筆申まいらせ候。おたつさまへ申入候。何とて御文こまくとあそはしくたされす候や。心もとなく存まいらせ候。必く此船のかへさには御文くはしくあそはしくたさるへく候。誠に我身居申時と思し召し、きくを御見捨下されましく候。必く秋の比はこまくと御文、待入まいられ候。何そあんしん申たく候へとも、めつらしき物も御座なく候ま、其義なく候。心さし斗に、帯一すちおくりしんしまいらせ候。もはや日本の花などは、みなくわすれ候て、あらましおほへ候ものはかりぬいまいらせ候。もし人の笑ひ申候は、絵そらこと仰候へく候。又く平吉様へ

申まいらせ候。御無事の由めてたく存候。殊に御文うれしく思ひまいらせ候。然れば、何とて毎年御文下されす候や。そののみふしんに思ひまいらせ候。たとへそれかしかたへ文たまひ候はずとも、御心かわりとは存申さす候。かまひてく此便には御文こまく待入まいらせ候。ケ様に申候も、せめて御筆のあとなりともと、そんなかめまいらせ候はんま、こまくとあそはし下さるへく候。あら、むかし恋しや。かしく

一 おたつさまへ申まいらせ候。こもとあつき国にて候ゆへ、それより少持わたりまいらせ候をみなくつかひきり候ま、ひようふきやう一かい、此便に頼みまいらせ候。細く申度候へとも、筆には尽しかたく候。下のうはへも申まいらせ候。すいふんくそく才におはし候へ。我身もやかて帰朝いたし、御けんもして申まいらせたく候。あら、日本こひしや、ゆかしや、なつかしや、見たや

一 松かさ、このてかしはのたね、杉のたね、はうきくさのたね、御みんしたのみまいらせ候。かへすく涙にくれてかきまいらせ候へは、しとろもとろにてよめかね申へく候ま、はやく夏のむしたのみ入候。我身事、今までは異国の衣しやう、一日もいたし申さす候。いこくに流され候とも、何しにあら多ひすとはなれ申へしや。あら、日本恋しや、ゆかしや、見たや

日本にて
おたつさま
しやかたら
はる方

まいる

此女、年たけて後、唐人に嫁して子をも生したり。たひく

文おこせたり。元禄九年の比までなからへ、七十六七歳にて死せしといふ。其後、子なるか文おこせしかと、公の制ありて後いかゝ成けん、しらす。

- * 1 都城本「外国之人」
- * 2 都城本「在て」
- * 3 都城本「平戸え」
- * 4 都城本「日本え」
- * 5 都城本「夷島」
- * 6 東大本、濁点原本のまま。都城本「また」
- * 7 都城本「跡」
- * 8 都城本「ほとに」(「て」なし)
- * 9 都城本「事共」
- * 10 都城本「ふみ」
- * 11 都城本「みましや」
- * 12 都城本「御つゞなく」
- * 13 都城本「そこ元」
- * 14 都城本「わかまゑ」
- * 15 都城本「かそらへ」
- * 16 都城本「おもひなくさむのまも」
- * 17 都城本「浮世」
- * 18 県図本「御座候」
- * 19 都城本・県図本「こそ」
- * 20 都城本「あわれみ」
- * 21 都城本「日本え」

- * 22 県図本「露身」
- * 23 都城本「御もひすて」
- * 24 都城本「上」
- * 25 都城本「さまえ」
- * 26 都城本「兼而ち」
- * 27 都城本「夜ひる」
- * 28 都城本「古きことのは」
- * 29 都城本「こふせん町」
- * 30 都城本「心元なく」
- * 31 都城本「御無事之由」
- * 32 都城本「然は」
- * 33 都城本「跡」
- * 34 都城本「かひ」

釈迦眞実法門

且過の僧山路に迷ひ、日暮れ辻堂に泊けり。夜半、光明かゝやき厨子の戸ひらけ、釈尊師子の座に在す。閻羅王来て、一通の訴状を捧て曰、我、冥官の司として三千年來、地獄極楽の境を領し、余多の獄卒を支配して罪人の輕重を糺し、それ／＼の地獄へ遣し、政道私なき処に、近年淨土宗と名乗て、僧はかねを頭につけ、俗人は菓盤のやうなる物をたゞきつれ、阿弥陀如来の御本願にて如何なる悪人も名号さへ唱れば、罪障忽消滅し、極楽へ迎へ取給ふ御約速なり。極重悪人無他方便、唯称弥陀得生極楽の御ゆるし、仏に妄語なし。極樂へ罷通とて、毎日幾千人といふ事なく押来る。そのみならず、

一向宗と号し、坊主は鮎の鮓を横くわへにし、俗人は肩衣斗着し、我々は生れ出るとそのまゝ、何かなしに阿弥陀如来へ御やくそく申、かねて御助なさるへきとの御事なれば、別の子細も候まし、極楽へ罷通る、といふ。獄卒とも、是は思ひもよらず、押売押買は娑婆にても御法度也。まして押成仏といふ事は、此国になき作法なりとて、毎日取あひさわかしく候処に、又日蓮宗と名乗て、膏きつたる坊主とも、女中を先に押立て、太鼓をたゞきつれて、我々は法花題目の行者なり、釈尊四十余年の御説法は此法花経を説んための足代にむた事斗仰られしなり、無量議経に四十余年未顕真実とあるにて、御うたかひは有ましく候、其上、文殊菩薩、竜宮にて此経の五の巻提婆品を説給ふに、八歳の竜女即時に成仏して南方無垢世界の教主となる、然らば此御経にて女人成仏疑ひなし、召つれ候女人とも、ことごとく寂光土へ遣さるへし、彼にある念仏申ともは、彼むたこと⁷の二ぜん経を信し、有縁の釈迦を捨て、無縁の弥陀を頼む馬鹿者とも、阿鼻地獄を好む罪人なり、といさかい絶す候。御裁許を仰く処に、達磨宗と名乗て、短き衣に玉たすきして押来り、本来無一物、何れの所に塵埃を惹む、うろたへたる仏あらは、あたまを打わりて火にくへよ、馬鹿を尽す仏をは一棒にたゞき殺して狗にふるまへ、仏といふは干糞なり、又糞かき棒ともいふ、乾屎橛なり。父を殺し、母を殺し、仏を呵し、祖を罵り、諸生を慕す、己靈を重んぜず、如来の一切の諸説は、黄葉を金也といふて小児の啼をすかすなり、安養浄土十万億土の遠き所は路銭費なり、我等は直に如来蔵へ飛込む也、そのき候へ、なといふて、咎むる者を咄喝と云てきめまわし、黄檗徳山などいふ棒つかいとも、やせ鬼をたゞきちらし、あたりへよりつかれぬ勢ひ、狼藉の至に候。ケ様にては、閻魔城も破却すへ

し。三途川に乱株大繩をまふけ、死出の山に鉄の樓門をかまへ、獄卒を倍し、改たく奉存と申す。釈尊、閻王を近く召され、海潮音を發して仰けるは、汝か申所逐一聞届たり、我に正法眼蔵あり。只迦葉のみ我拈花の下に開悟して微笑したる迄にて、物いはすに事済たり。今、汝に言を以て伝ふへし、我、若年の比より衆生の地獄に在てくるしむを見て堪かたくおもひ、十九の歳に王位を捨、妻子をはなれて山に入、十二年か間工夫して、終に我国に仏法の化行はれて、衆生の苦しみは大かた救ひたれとも、滅後に東流して農且国にわたり、彼国のでれん儒者とも、文字に写して様々に増補し、あらぬ事を取つけて、七千余巻に書ひろけ、我法の主意を失ひ、終に偽の入物と成たり。其後、達磨一人此弊を憂ひ、此分にては仏法の破滅なりと晨旦国へ渡り、教外別伝、不立文字の宗旨を立、直指人心、見性成仏の法を示す。然る処に、美女は悪女の敵とて、其比先達て我国より菩提流支三蔵といふもの、農且国へ渡り居たりしか、己か説所の邪魔になるを憎むて、終に達磨を毒殺す。然とも、盲千人の世中なれば、彼三蔵をも仏弟子也とて貴む者あり。実に浅ましき事なり。然とも、晨旦にては段々に余の仏法はすたりはて、今は禅のみ多く、扱は天台少／＼これ有よし。其後、日本へうり付て、日本にて又色／＼の偽を増補し、今は仏法の正味はなくなり、方便の糟粕に種々の物をぬり付、私のみを云ふゆへに、汝か迷惑するも断なり。今にては、我ももてあつかふたれ共、すへきやうもなし。畢竟衆生を不便におもひすきて方便を説し誤りより、迂詐をつくは仏法一流と心得、我か主意を取失ひ、我をうそつきの問屋にこしらへ、己等か渡世の為とするのみ。我方便は愚痴の教を以て、愚痴の迷を解く。油を以て油煙をおとすの術也。今の坊主は油を以て油煙をぬ

り付るものなり。夫、仏法は心法なり。故に華嚴の初に三界唯一心、心外無別法、心仏及衆生、是三無差別と説たり。悟る者も心なり。迷ふものも心なり。此心二つあるにあらず。悟れば仏、迷へば衆生。地獄天堂一切の境界、皆此心の変化に過す。心の外には真もなく、妄もなく、邪正もなし。悟る時は天地を丸呑にしても、些も障なし。迷ふ時は、世界、鼠の穴のごとくに、見る事聞く事愁にあらずといふ事なし。何をか悟といふ。悟とは夢の悟たるなり。凡夫は妄想の夢の中に所帯を立て、彼を是とし、此を非とし、貪欲、瞋恚、愚痴を以、種々の地獄を作り、自此に墮在し、無量劫の間、くるしみをまぬかれざるもの也。此妄想の夢悟むる時は、自性の仏、現前して、森羅万象遺す事なく己をなし、物を成して、心体の光明、六合の外を照し、寂滅無生の本然に復て、是もなく、非もなく、真もなく、妄もなし。地獄天堂一に見て隔なし。馬と成らは荷を負ふへし。牛とならば車を挽へし。犬とならば門を守るへし。鶏と成らば時を告へし。此心無碍自在にして、天地万物我を動かす者なし。故に吾法は礼楽を設す、武備をなさず。五帝三王の政を見る事、嬰兒の戲遊を見るかごとし。言語を以て尽す所にあらず。梵天、帝釈、須弥の四州、皆我臍下を出す。然とも、仏と聖人と大違あるものにもあらず。適もなく、莫もなく、可もなく、不可もなき所は、孔子も我も同し事なり。彼は義之比与といひ、我は平等利益といふ。彼は富貴貧賤、夷狄患難、入として自得せずといふことなきものは、我所謂地獄天堂一に見て隔なき者也。彼は造化を以て大宗師とす。我は造化を幻妄と見る。聖人は仁義を以て天則とす。我は寂滅を以て心体とす。彼と我と異あり、同あり。彼か善か、我か善か、我も知らず。しらぬか即仏也。聖人も無我なり、我も無我なり。孔子と

我と国を隔つ。彼は彼国の風に依て教へを立、我は我國の人情に依りて教を立、我、周公、孔子をやとはねとも、法に於て不足なし。周公、孔子、我法を聞すと、治国平天下の政に事の欠たる事なし。道窮なし。末／＼迄こと／＼く通用もならぬ物也。合たる所は合たるにてよし。違たる所は違たるにて道広し。然るに、後世儒仏の学者、無我無欲の心体をは論せず、互に我執を立、益もなき争を初め、其糟粕を以て相罵る。仏者は聖人を我家来のことくいひなし、女媧氏は日光菩薩なり、伏羲は觀音の化身なり、摩訶迦葉は老子となり、光浄童子は孔子と生れ、月明儒童は顔淵と變して、晨旦国へ仏法を渡さんためのあらしきりに、我先此三聖を遣して、仁義の道を教て、後に仏法を流布せしめんと、我いひたるやうに、清浄法行経に書きたり。如何に我仏なりとても、他の国の人の名を、五百年已前に知るへきやうなし。女媧氏、伏羲は我未生以前の人なり。是等の事は子共か聞ても偽としれる事なり。其上、我眼前の衆生さへ若年よりの思ひ立にて、我一生勞苦してやう／＼仏化に服したり。何の暇有てか、五百年已後、他の国の事まで今より世話にすへきや。さやうに自由に成事ならば、我は仏なり、生れぬ先より工夫して、先我國を手問いらすに化済すへき事也。其外、列子か寓言に、孔子、商の太宰に答て、西方に聖者あり、治すして乱れず、言すして信有と道の窮なき事を語らん為也。然るに、後世の坊主ども、孔子は聖人にて、天竺に釈迦ある事を知て尊と書にもあらわして、我法へ引入むとす。林希逸か口義に、列子ひそかに仏の学を知て、孔子の名を仮て尊ふかと推量説にいひしを、実に孔子の言として無理に儒者を我法へ引入むとする故に、儒者とも出家を盜賊のやうにいふも道理なり。我は孔子にほめられずとも、法はひとり行はるゝなり。愚痴

蒙昧の仏者とも、己か私心を以て仏の心をうかゝひ、我悦ふかと思ふて、しりからはける迂詐をつき、我まで人にわるくいはずは、鼻眞の引たおし、法におゐては大罪人なり。達磨腹を立て、人を惑わす悪知識ともをは、かたはしから打殺しても罪にならぬといひしは尤なり。日本にては、伝教、弘法といふもの、神道をこねかへし、何れの神は何の仏の垂跡也、此神の本地は此菩薩也と、我もいはぬ迂詐を巧み、両部習合の神道と号して、神に菩薩号を付、我法を人に信仰させんとす。夢にも我は知らぬ事也。日本の神／＼は、定て立腹し給ふへし。彼等か心に、我か聞て嬉しからんとおもふらめと、仏の心は左様に私なる物にてはなし。何を馬鹿を尽すやらんと笑ひて居る斗なり。畢竟、仏の心を知らぬ故なり。因慈^{*36}、神道者とも腹を立、我国に居ながら、我国の神を仏の手代のごとくこしらへ、日本を天竺^{*37}の出店のやうにする盗の引入也とて、呵り罵るも道理也。前にもいふごとく、神道、儒道、仏道ともに皆聖人の道なれば、合たる処あるへし。国／＼にて立たる教なれば、違ひたる所もあるへし。合たるは合たるにてよし、違たるは違たるまゝにて、其人々の生質のちかき所の門戸より入て、心を修せは可也。何そや、悉く我手下へ引付むと思ふは、仏の心にも、神の心にも、聖人の心にもなき私の至極也。又、儒者は仏の大慈大悲の苦心をも知らず、我衆生濟度の方便をも察せず、出家をは穢多のごとくいやしみ、仏を信する者をは、愚痴よ、たわけよとてしかり罵り、我経文又禅録などの辞をは、異学の言なりとて仮にも称せず。善あれども、取る事なし。剰へ、儒学をする者の内にも、少しにても心法を語る者をは、聖人の道を学ひながら禅学に混雑するなといふて罵謗^{*40}る。孟子は手あらしき男なれども、大賢也。其言に曰、凡、書を見るには、辞を以意

を害する事なく、意を以志を迎て見よと、懇に教れども、左様の言をは思ひ出さず、仏法を謗るを儒者の役目のやうに覺て、坊主をいしめ、堂塔伽藍をは茶屋同然に思ひ、仏像をははりこ人形のごとく思ひなす。是又末世の偏執、聖賢の心にも差ひたる事也。皆宜しからぬ事かなとは思へども、仏者は法を弘めんとて迂詐にうそを取付て、実は渡世の爲にする者多し。儒者は高慢甚しく、人からも宜からず。外の迂詐はつく者多^{*42}けれども、四書六経に迂詐を取付、堯舜孔子かいはぬ事をいふて聖人を売り、人を惑す事は仕度でもならぬ也。此分は聖人の法度の正しく、我方便の弊なり。然とも、方便は我慰にもあらず。已事を得ぬ事有て也。晨旦^{*43}にては、十一人の聖人段々生して、伏羲の時は文字もなく、只奇偶の画をなして陰陽に象り、造化の理を写し、一より十迄の数をならへて、陽陰に自然の數ある事を示すのみ。民とならひ耕して、いまた君臣の名なし。黄帝の時より宮殿を作り、衣裳を定め、武備を設て、悪人を罰し、君は上に尊く、臣は下に卑く、小人は野に耕し、君子は政事を助け、上下の分定れり。堯舜文武周公の時迄、礼楽刑政を以て国天下を治め、民其風に化して、聖人口つから民に教る事なし。次第に人情世知^{*44}からくなり、欲ふかく惑もおほく成行ゆへ、周公より七百年の後、孔子出て方々周流し、人を教といへども、魯国にて大司寇^{*45}の官までつとめ、浪人しても歴々ゆへ、卑賤の者むさと近付す。此方より往て教る事もなし。束脩以上を行ふものにあらされは、対面もせず。孔子に逢て道を聞く程の者は、皆少しつゝ下地もあり、道理も通するほともの者也。故に、言すくなくて愚痴にむつかしき問答もなし。それも上下取あつめて三千人斗の事なり。天竺は大国なり。開闢より以来、仏といふ者もなく、聖人といふ者も出生せず。夫故、人情欲

ふかく、愚痴にして執着甚し^{*46}。其上に外道とも徘徊して、あられぬ邪法を教るゆへ、たとひ周公孔子同道して来りたりとも、此人情にはもてあつかふへし。唐虞三代の教採にては、耳にも聞入る事有へからず。此分にては人に尾も出来、角も生すへきかと、我幼少苦に成りて、十九の年王宮をかけ出し、山林に入て十二年か間、彼等を治むる工夫をしたり。我三十成道といひしは、故有ての方便なり。実は生れなからの仏なり。我の国に生れたらば、仏法を起さんと思ふ心もなく、堯舜文武のこごとく、懐手^{*49}にて民を治むへし。前世の因果にや有けん、悪しき所へ生れ出、捨て置れず、手かいには及はず、是非なく出家して人のいやかる乞食、頭陀の行をして見せ、三十の時成道したるといひふらし、それより山を出て上下のへたてなく、船頭、馬かた、獵師、穢多のきらひなく取あつめ、いやといふ者をも無理におしへ、きかぬやつをは習ひ置たる神道の術を以て目前におとして見せ、愚痴なるものには愚痴なる事を以ておしへ、機に応し、説法様々の手たてを尽して大骨を折たる事、公平かかな棒にて大勢へわつて入たるかことし。其説法を阿難か書留て置たる故に、論語とは違ひて、我経文には色^{*30}／＼むつかしき問答、愚痴なる方便多し。それを今とりこにせらるゝは、我か不幸なり。三十二相の姿をあらわして見せたるも、時の方便なり^{*51}。一概にはいひかたし。滅後に他の国へ持来り、世間文明なる所にて文盲なる事をいは、愚人は信するとも識者の笑ひを招くへし。我は法の明ならん事を願ふのみ。たとひ一郷一村なりとも、正法を信して無我無欲の心体を養わ、是我悦ひ也。たとひ天地の外まで弘まりたりとも、迂詐の蔓る分にては、我か大成る憂ひなり。仏法破滅にははるかに劣れり。法華には正直捨方便とこそ説たれ、迂詐をつけとは説かぬ

ものを。又、此世にてはうろたへても死し後は仏にならんと思ふものゝ為に、娑婆即寂光土と説たり。達磨かいひしこごとく、今生にて成仏せずして、死して後仏に成といふ事は此^{コトワリ}処ある事なし。惣して末世の比丘ども、我経文の内にて己／＼か勝手に能き事斗をいひて、勝手にあしき事はかくして、人にもいはぬなり。丹霞か木像を打わりて火に焼き、雲門か我を一棒にて打殺し狗に喰せんといひ、一休か釈迦といふ徒者か世に出て多くの人を迷すかといひしは、無礼慮外なる様なれとも、実に我を尊ふ也。世間にはやる妄想の釈迦をたゞき殺されねは、誠の釈迦はあらわれざるか故也。我は彼釈迦を打殺す事を悦ふ也。我任者は禅を学ひて達磨を我任の本尊とす。達磨大に迷惑なり。世間、我を以て迂詐つきの親方にするも、渡世なれはにくからず。近年は足利の学校、南禅寺より支配するゆへ、禅僧袈裟衣を着し簞籩豆をつらね、豆腐こんにやくを生ながら盛て、孔子を祀り、易を披て年筮をとる。出家にして儒者の所作をする事は、両部の儒道といふへきか。孔子定ておかしかるへし。不都合なる装束にて、著策を探るのみならず、おもひもよらぬ精進させ、腹中あいもよろしからずと、是も世事也。仏法の広大、一言の尽す所にあらず。願須此功德平等齋一切同発菩提心往生安樂国と宣ひて、内に入らせ給ひけり。閻王もなくなりて、鳥のさはくに夢さめて、茫然として居たりけるか、彼僧おもふやう、宵よりの御説法、仏に似合ぬ戯談なれとも、狂言ながらも法の道、今は菩提の岸によせくと、自然居士の、居士の謡にも見えたれば、是も悟りの種也と、發明してそ帰りける。

* 1 都城本「極楽え」

- * 2 都城本「着(チャク)し」
- * 3 都城本「生れ出と」
- * 4 都城本「如来え」
- * 5 都城本「取合」
- * 6 都城本「在る」
- * 7 東大本、濁点原本のまま。都城本・県図本「二せん経」
- * 8 都城本「いさかひ」
- * 9 都城本「所」
- * 10 都城本「慕¹ず」、県図本「慕す」
- * 11 都城本「如来藏え」
- * 12 都城本「棒つかひ」
- * 13 都城本「方」
- * 14 都城本「云ゆへに」
- * 15 都城本「とも」
- * 16 都城本「なして」
- * 17 県図本「無量」
- * 18 都城本「ならば荷を負へし」
- * 19 県図本「我法」
- * 20 県図本「いひ」なし。
- * 21 『田舎莊子』は「人」
- * 22 都城本「也」
- * 23 都城本「治国平天下之政」
- * 24 東大本、濁点原本のまま。都城本・県図本「こと〜く」
- * 25 都城本「然に」
- * 26 都城本「農旦国え」
- * 27 県図本「おしきりに」
- * 28 都城本「迄」
- * 29 都城本「言して」
- * 30 都城本「坊主共」
- * 31 都城本「引入んとす」
- * 32 都城本「儒者共」
- * 33 都城本「也」
- * 34 県図本「号として」
- * 35 都城本「知ぬ」
- * 36 県図本「因茲」、『田舎莊子』は「これに依て」。
- * 37 都城本「日本をも」
- * 38 都城本「なり」
- * 39 都城本「違たる所」
- * 40 都城本「詈り謗る」
- * 41 県図本「男なれ共」
- * 42 都城本「多けれど」
- * 43 都城本・県図本「農旦にては」
- * 44 県図本「人情からくなりて」
- * 45 都城本「方」
- * 46 都城本「甚しく」
- * 47 都城本「成て」
- * 48 県図本「懐手」(訓なし)
- * 49 都城本「所え」
- * 50 都城本「六ヶ敷」
- * 51 都城本「也」

- * 52 都城本「国え」
- * 53 都城本「外までも」
- * 54 都城本「大なる」
- * 55 県図本「程」
- * 56 都城本「我住」
- * 57 県図本「自然居士の謡にも」

落
葉
集

通昭録卷之四十五

落葉集

倭歌は我國の風俗とて、空に鳴く蟬、水にすめる蛙まで其音を鳴し
など伝へぬれと、僕は歌よむさまは知らずして、年経にけり。しか
はあれと、髪を結ひし初より書に耽る僻有て、唐の倭の文とも日こ
とに読もてゆくほどに、ふるき歌ともはし／＼おほえたるも有て、
あなかちに好むにもあらねと、折に触れ興に乗しては自らもいひ出
つゝ閑を消する便ともなりし。もとよりまたふみもみぬ道しあれ
は、本すへのわきまへもあらず。まいて其道しれる人に問ふへくも
あらず。そのまゝ書あつめたるを、今年の夏書を曝すの日、反古堆
中より取出し、その俣かひやりすてんも本意なく、しはらく落葉集
と名付け、ひめおくものならし。

戊戌の年水無月

得能通昭

* 1 都城本「倭歌」、県図本「倭歌」

* 2 都城本「おほへ」

* 3 県図本「とも」

* 4 都城本「便り」

* 5 県図本「なあれは」

* 6 県図本「まひて」

* 7 県図本「へしも」

* 8 都城本「まゝ」

落葉集

九歳になりける秋の夜、月のくまなく照りわたりしに、はらか
らはし近くなみ居て物語しける。月のかたふくを見てたらちめ
のうたよめと宣ひしによめる、

月のはや西の山端にかゝりけりましてはしとて名残おしまむ

十三の年川辺にまかりける時よめる、

春霞立ちなかくしそ我宿の軒端にさける華のこすへを

十四の年、平家物語小原御幸の巻を讀みて山居の体をよめる、

世に遠き此山里の艸のいほはふりしうき世の夢もむすはず

* 9 都城本「説て」

* 10 都城本「草」

わすれけり世をうつせみのから衣きつゝなれにしふりしむかしを

* 11 東大本は「ぬる」を見せ消ちとして上に「にし」とする。都

城本・県図本「ぬる」

軒はよりふりさけ見れば峯つゝき柴かりつれて帰る山人

山里はこと問ふ人もあらはこそ柴かる賤のおのこならては

山家

こゝろすむ此山里のしつけさはにこるうき世の夢もむすはず

暁時鳥

待侘る宵にはつらきほとゝきすあけかたちかき声そ妙なる

首夏風

花のためいとひし風も今朝ははや夏来にけりと吹くもすゝしき

新樹

深みとり猶色ふかき夏やまの秋にもまさるなかめ成るらん

早苗

住佗しこの山里の夕くれもにきわひけりな早苗とるころ^{*12}

*12 都城本「比」

たらちめの十三回によめる、

幾年の月日ほとふるいま^{*13}も猶^{*14}わすられずうちななかつゝ

*13 都城本「いましても」

*14 都城本「わすられず」、東大本濁点原のまま。

八月十二日夕かた墓に詣てけるに、月のくまなくさし出ければ、
月見れはいとゝなけきはふかくさの露と消にし跡をしそおもふ

例ならすわつらひける宵の間、月のおもしろくねやにさし入
るか、ほとなくもりければ、

いたつきにいねかてなりしねやのうちに月さへつらくもりはてけ
り

*15 都城本「程なく曇りければ」

*16 県図本「うち」「に」なし

雪のあしたよめる、

霜かれしむくらの庭も白妙にうつみはてたるゆきのあけほの

大明神の宮居をふし拝みて、

祈るなりゆくすへかけてすみよしの道すなをなる神のめくみ^{*17}を

*17 県図本「めくめを」

夏夜いねかてに虫の声を聞て、

秋近くなるをやつくる小夜ふけてまくらに近きむしの鳴くねは

松風暈睡

軒ちかき松のこす^{*18}へをふく風のあわれさひしくゆめもむすはず

*18 都城本「こすゑ」

紅梅の色異なるを植置ける人の身まかりける。翌年の春、常よ

りもうつくしく咲けるを見て、

誰か為のさかりなるらん梅の華ぬ^{*20}しはなき世のむかしかたりに

*19 都城本「植ける」

*20 都城本「花」、県図本「はな」

東都に侍りしに、我國のやんことなき御方より庭前の紅葉^{*21}を
送り給りしによみて奉る、

うすくこくそめし紅葉のそれよりもおくるころのいろそゑならぬ

*21 県図本「紅葉を」

庭月

こからしに梢のみちふきたへてひかりもきよき庭の月かけ

歳旦

小夜あらし雪ふきはれて今朝ははやのとけきそらにかすみ立^{*22}つなり

*22 都城本「立なり」

雲の上やんことなき御方の我^{*23} 国にむかへられ給ひて、よろつ

いみしくかしつかれ給ひし去年の冬、稻荷御神事に詣給ひ、

いやしき民のおさな子を御はらからに似奉りしとて、折節は召

されて御いつくしみふかきなと人のかたるを聞侍しに、或日は

からすもその子の 御殿にあかるを見て、おそれみながら 御

心の内おもひはかり奉りてよめる、

天つ空高きもおなし世の中のうきにはもれぬなみたをしれ

*23 都城本、県図本「我国」(闕字なし)

朝霞

けにそれとあやめもわかぬ神垣や三輪のやまもと今朝はかすみて

東林碩、病に臥しけるを、人して日毎に問ひけるに、幾ほとな

らすむなしくなりければ、

ゆふへをもまたてはかなきあさかほのはなにくひし人のよわひは

* 24 都城本「まして」

川西幸慶のあつまにてむなしくなりしおとつれ有し。初ての忌日に、花をおくるとてよみて幸中につかわしける、

あたし世にあわれはかなくおく露のきえしあと問ふはなのひとゑた

* 25 県図本「つかはしける」

* 26 県図本「あはれ」

* 27 都城本「きへし」

田向氏世に有し時、花を愛し、みつから接木あまたなしおきけるか、身まかりて後、梅花のいつよりも色よく咲出たるを見てよめる、

植置し主はなき世に誰見よと色香多ならぬ庭の梅かへ

* 28 都城本「が」

たらちをのいたつき、日にましおこたらさりしかは、医を尋ね財を抛ち葉にかへて、やうく初に復し東の旅におもむき給ひし。年比つかいなれし一人の僕はしたかいゆくほとに、更に人を雇ひ薪水の労を助けよとなん仰せ侍しかとも、さなきたにとほしき財用給しかたく、みつから勞に服くも孝養のはしともならんかしと、夏の夜月のくまなきに斧を振つて薪を拆きけるに、ほとなく月かけのくらくなりければよめる、

なすわさのつらきにつけて夏の夜のかたふく月のかけおしむなり

* 29 県図本「つかひ」

* 30 県図本「したかひ」

おろかなる身は世のましわりもおのつからうとく、家まつしければ、従つて財用もとほしく、さわかしき年のくれも物しつか

なるは、是や誠に貧樂とやいふへき、

西にはしり東にいそく此月の今宵もしらぬやとのしつけさ

* 31 県図本「従て」

* 32 県図本「とほし」「く」なし

去る御方にいさなわれ、中西家へ能見にまかてけるに、宮内安村の子の舞まふさま、さなから父をうつして堪能なりければ、父のむかしおもひ出られて、

うつせしなすかたのみかはたらちおの扇とるての舞のかさしを

* 33 県図本「たらちを」

雨はれ、こゝかしこ花の咲出たるあしたよめる、

何となく人のこゝろもうきたつやこのもかのものさくらさくころ

* 34 県図本「雨はれて」

久智君の御許、藤の花盛、人あまた召して歌よめと仰こと有ければ各よみて奉りけるあとにてよめる、

もろ人のことにはかゝる藤波は今しほの色やますらん

* 35 県図本「よめて」

* 36 都城本「こと葉」

* 37 都城本、右傍に「本ノマ」と注記。

宿酒になやまされ、春日官務に堪へず、書院にいたりければ、有馬自阿弥なる人のみつから茶をめぐまれば、ちやの字を句の中におきてたわふれによめる、

心ある人のめくみにつくりなす身のいたつきもたちやはなれん

* 38 県図本「たわむれに」

さる御方にいさなわかれて慈現寺に詣てよめる、

岩間よりもりくる滝のしら糸はかけていく世の年や経ぬらし

* 39 県図本「慈眼寺」

* 40 都城本「詣て」

小倉知直、先考の命日にまかてゝ、悲しみのせつなるさまあわれにおほえしに、硯紙出して歌よめといへるによめる、年月のふるきむかしを今も猶しのふにあまる人のあわれさ

* 41 県図本「あはれ」

榎本氏の招き^{*42}に応し、小倉知直、田中盛庸とともにまかて、昼過より語りくらし、夜に入て庭木のしけりあひたる中に、灯火もしたるさま、さながら深山の心地して得もいわれぬ体なりければ、人々歌よまんとてよみける時、

通昭

夏木たちしけれ庭のともし火はかすかにすめる宿とや見える

知直

深山辺のかけをうつしてすむ人のこゝろもしるき庭のともし火

盛庸

世をよそに住なす庭のまつ^{*43}の風あかすの友と馴もきくらし

* 42 県図本「招に」

* 43 都城本「松」

したしき人の打たえて問ひ来る事もなきなと思ひつゝけるあした、杜若を^{*44}一もとおくりけるによみて遣しける、へたてぬる名にはありともかきつはた色にそ人のなさけをはしる

* 44 都城本「一本」

人／＼と文を論して勿欲速といふ心をよみける、いそくとも明ゆく空を待てゆけあかつき過る旅のほそみち小倉知直はわきてしたしき中にそ有ける。孝養の道なん世に

類ひすくなき程にもあらんかし。やかて、めてたき家作して

たらちめをなくさめ奉らんにはかく斗もあるへしとて、墨絵かきてしはしのよろこひをねかへるさま、雛をもてあそふから人の心にもたくひつへしと、感情浅からさりしかは、知直のあらたに家作りせしにまかてゝ、などこと／＼しくはしかきしてよめる、

かく斗めてたきやとのさかつきをなをいく千世とかさねてそ波む

知直かへし、

幾千世や猶万世とたらちねのよわひをのふるやとのさかつき床に松を立たるを見てと、はしかきして、

たらちねのよはひはそれと松枝^{*46}の常盤の色をたくへてそ見る

* 45 県図本「見て」(「と」なし)

* 46 県図本「松か枝」

知直返し、

うこきなき岩根の松^{*47}ともるとにたゝたらちねはいく千世かへん

* 47 都城本「諸共」

たわふれの言の葉も思より出るとなん古賢もいひ置しそかし。

一場の話説も思ひの色なんあらわるゝとおほえし。

中神氏は、予か家熟に文を論する友なり。今年、庭萩錦を敷き、顔を怡はしむるといひつゝ、怡顔を齋のよひ名とせし。一日、来りて花見よと聞へければ、盛章、幸中なといさなひまかてける。中門の扉を開けは、左右の萩花眼をさへきり、物のあやめもわかぬほ^{*48}とさきみたれ、松峯の山になひき、桜岳の嶽につゝく心地して、世に又類ひもあらしと覚^{*49}へける。一句なくては問ひ来ししるもあらし、などあるしのもとめのせちなれは、^{*50}

いなみかたくてよめる、

武蔵のゝ原かとまかふはてしなき野山につゝく庭のあきはき

今日いくかあかすなむる秋はきのあるしや宿のにしきなるらん

* 48 都城本「程」

* 49 県図本「思へける」

* 50 県図本「せちなかれは」

* 51 県図本「武野のゝ」

あるし筆を取て、庭錦はきをしとねに月枕 みやきのゝ萩は小
庭の織にしき 嵐にや萩の波よる庭路かな 萩におく露は夕部
のみやけかな 又あるしの養母のよめる、

おもしろくいひしことはの花になをはきもにしきの色と見へける

閨時雨

時雨する音さひしくも終夜寒こそまされ閨の独ね

* 52 都城本「寒そ」、県図本「寒さそ」

落葉

終夜庭に落葉の音するは問ひ寄る人にあやまたれける

* 53 都城本・県図本「けり」

寛延庚午の夏、水無月上の七日、祐陳、盛祐の命日なりしか
は、墓に詣てよめる、

問ふからに在しむかしの忍はれて帰る袂に露を置そふ

人く山里の花見に行とて誘けれとも、行きりければ、帰るさ
に一ふさおくとて、遠山の気色なとさまいひおくりける
によみて遣しける、

遠山の霞かくれの花よりも猶一ふさの色そ妙なる

夕かた二階堂氏にてよみける、

なかもやる千里をかけて春霞日も入相の沖つ島山

書を読み感する事有て、

軒端もる影をはさのみ頼みそよ出れは空に有明の月

早梅

句わすは雪とや見まし山里に春待あへす咲る梅かへ

* 54 県図本「句はすは」

初雪

冬の来てあらはにふりし山も又なかめにあかぬ雪の初花

伊東祐陳、妹尾盛祐は竹に鞭つむかしより、なにはのうらのよ
しあしとなくうらなくいひかたらしいしに、延享といふ三つの年

水無月七日、日を同ふして、永きわかれと成ぬ。春過、秋ふけ、

四年の月日、夢とのみ過て、跡なきいにしへを思ひ出し折か

ら、今日は

如月彼岸の日、彼命日也けれども、心にさわるふし有て陰の前
の手向たに心に任せさりければ、草庵の床に焼香してかくなん、

おもかけは猶わすれぬに四年ふる月日は夢と過てほとなき

露と消へ煙と立てのほるとも心の誠かよはさらめや

* 55 県図本「かたらひしに」

* 56 県図本「ぬる」

* 57 都城本「程」

除夜

日をおくり夜をかさねつゝいたつらにくるゝ今年の思ひ出もなし

甲戌の秋、たちちをのあつまにてなやみ給ふと聞へければ、胸
のうちのくるしさいはんかたなく、羽なきを恨る心地して、公

けに告し東に趣かんとせしに、世を去り給ふたより有て、胸つ

ふれ魂も飛ふ斗なりしか、其涯歌よむへき心もあらさりし。日
数経て後、終日打ふしてくらし、終夜いねやらてあかしける
まゝ、いつとなくかなしみの心を三十一文字にいひ出したるを
書つゝけて、東都に在ける小倉知直に告げる。

明年の秋の初は帰給はんと待侘しに、思ひもあへぬ便りを聞け
れば、

同じ世の旅さへ人のゆかしきに帰らぬ道を如何にとかせん

*58 県図本「公に」(「け」なし)

まのあたりの別たに悲しきに、海山かけて、とや有けん、かく
やありしなと思ふもいとせんかたなくて、

幾千里海山遠く武蔵あふみ心つくしにかけて悲しむ

朝ことに花香を手向るとて、

知るやいかに朝な／＼になてしこの花や焼香の手向するとは

年比菊を愛し給ふに、今年の春、いろことなるを人に求て植置
つゝ来る秋見せ奉らんと思ひしか、此ころ花のひらきけるを手

折て壺前に奉るとて、

見せはやと思ひ植にし白菊を今日なき人にたむけ悲しむ

*59 県図本「華」

人の問ひ来て其事くた／＼しくいひ出すももとかしく、又問は
ぬもうらみしくおほえて、

とふもうしとわぬもつらし我なから心ひとつをさためかねつる

打つゝき雨ふりて、いと／＼淋しく打ふしてのみ聞もわひしくて、

かきくらしはれまも見せすふる雨は我哀をやさそふなるらし

長き夜、ねさめかちなるに、秋風のたえず音つれければ、

*60 さなならてもひとり物うき闇の戸を音なふ秋の風そ身にしむ

*60 都城本「さなくても」

母におくれ、今年十七年に成りぬるに、またかゝる憂にあひけ
れば、

おもひきや十と七つの年を経て又藤衣かさねきんとは

人の香をおくりけるを手向るとて、

なき玉をかへれとくゆる煙にもその佛の立ぬかなしき

日比ふみ見ぬ和歌の浦、あしまにあさる友つるのなくねをしら

しめまほしきのみにて筆を取ける、あなかしこ、人にしめし給

ふへからすといひこしけるとそ。

尾畔の花見にまかてける時、歌よめと人のいひければ、

遠近の山はさくらにうつもれて時をもわかぬ雪かどそ見る

山嵐に花の散るを見て、

もろ人のなかめもあかぬ花をかくつれなくさそふ山風そうき

加治木より帰りけるに、風心にまかせず、終夜船にふし居つゝ

夜を明しければ、

かくしても夜をは明しつ雲は軒波行く船は闇のさむしろ

丁亥吾妻紀行

*1 明和四年、おほやけの仰を奉はり、後の菊月中の一日、故郷

を出て東の旅におもむきける。首途おくるとて、おさなきもの

とものしたひ来りしを、船はたより帰すとて、

若竹のすくなるよゝをかさねつゝみとりの色のかわらすもかな

*2 暮過ぎ、纜をとき漕ぎ出て、桜島をなかめて、

*3 旅衣今日たち出ていつかまたかへりきて見む桜島やま

* 1 都城本「明和四年の年」

* 2 都城本「したい来りしを」

* 3 県図本「帰せとて」

* 4 都城本「暮過」(「き」なし)。

* 5 県図本「漕出て」

暁、加治木に着ける。此初秋まで此郷の須崎といへる所に旅食しける折つかひなれしものとも、さゝなともて来り待居ける。

かりのやとに馬、人とゝのふるあいた立寄りて、

わかれにし月日ほとなくまたこゝにめぐりあひぬるゑにしわりなき

* 6 県図本「須崎いへる」

* 7 県図本「来て」

* 8 都城本「程」

* 9 県図本「わりなき」

やつかれか帰りし後、常に夢に見しなとかたりければ、

誠有りて通ふ心のしるしとてかりねの夢もそれとのみ見る

* 10 都城本「帰し後」

十二日、晴朝霜 溝辺の内、石原といふ所にて夜明けたり。道

をいそきゆくほとに、小木原にて日くれ、小河内の関を過ぎ、

上場といふ高き岡を越へける。爰より桜島見ゆる所也なとかた

るを聞て、駕籠のすたれ押あけて見るに、折ふし月さへくもり

ければ、

かへり見る甲斐こそなかれてる月のかげさへくらき旅の細道

* 11 都城本「之」

* 12 都城本・県図本「なり」

是より難所也ければ、つれの人を駕籠にのせ、みつからかちに

て行くほとに、肥後国石坂山にて馬倒れ、人つかれ、息も絶な
ん心地しける、

是もまた世のいとなみと終夜石坂山をたとりゆくなり

* 13 都城本「なり」

左右も見えわかぬほとしけりあひたる山路なるに、風のふきあ
けたる木の間より月のくまなく見えければ、ふるさとの事思ひ
出で、

ふる郷の人もふりさけ仰くらん今宵くまなき月の光に

* 14 都城本「見へ」

* 15 都城本「見へ」

十三日晴、夜あけ、水俣より船に乗り漕き出ける。折節、風む

かひはかゆかす、打ふしてのみ有しに、かすかに見へしは獅子

の島也、あれまで薩摩の地也なと船子どもの語るを聞き、起出

見る内に、島かけも見へすなりければ、

名残とてふりかへり見る獅子の島ほとなく波の立かくしける

* 16 都城本「むかい」

* 17 県図本「見えしは」

* 18 都城本・県図本「なり」

* 19 県図本「見えず」

夕餉すゝむるとて立さわくを見れば、年比忌みきらひし鯛の魚

をあつものにしけるか、かけたる茶碗を鍋にさし入て盛て出し

たるさま、一くちもくわるへくもなし。たわむれによめる、

目にも見し口にいわしとおもひしに又あふ事も深きゑにしか

* 20 都城本「たはむれに」

* 21 県図本「おふ事」

日くれ三角か瀬戸に至る。^{*22}是より三里かあい^{*23}た、兩岸近ふして川のやうなるをゆく程に、^{*24}むしの音もかすかに聞えければ、^{*25}も^{*26}のあわれに聞なして、

小夜深て夢おとろかす浪枕聞もわひしき虫の声く

* 22 都城本「是左」

* 23 県図本「あひた」

* 24 県図本「ほとに」

* 25 都城本・県図本「聞へ」

* 26 県図本「あはれ」

十四日 朝曇 昼細雨 夜晴 辰報過るころ、^{*27}長洲に着ぬ。是より陸にあかり、馬など用意しけるに、^{*28}ほとなく雨風しきりにつよくなり、汀の船もことく陸へ引^{*29}あけ騒き匍りける。今少しおそかりせば、如何なるうき目を見んもはかりかたし。誠に天のめくみなり、^{*30}なと人くのいふを聞て、はしめは是より七里を過て筑後国瀬高より陸へあかるへかりしを、何くれといひまきらしつゝ、^{*31}爰へあかり難をのかれければ、^{*32}天つ空めくみもふかき折を得て猶たのみある旅の行末

* 27 県図本「長州」

* 28 県図本「ける、ほと」

* 29 県図本「曳あけ」

十六日 晴 巳の時比、^{*30}豊前国小倉に着き、小船にて長州赤間か関に渡り、大坂渡海船に乗り移りける。汐時あしく船出すも、^{*31}今少しあいたあり。陸へあかり浴せよと船人ともいひけるほとに、^{*32}爰かしこ見めぐりに、遊女あまた有るを見て、あわれにおほえければ、

あわれ也世渡るためとなてし子のなかれに沈む親のこゝろは

* 30 都城本「頃」

* 31 県図本「あひた」

* 32 都城本「おほ多」

* 33 都城本「なり」

十七日 晴 暁、帆を揚げ、上の関まで至りけるに、風よからすとととまりける。晩景よめる、

そなたそと入る日のかけもなつかしや雲は幾へに立隔つとも

十八日 雨風 朝、船を出しけれども、風あしく波高ふして又

もとの湊へ漕きかへりける。

行く船を一夜はとめつ鳥鳴かはゆるして通せ上の関もり

* 34 都城本「漕かへりける」

十九日 晴 しのゝめ比おき出で見るに、空はれ、きのふにかわる気色なり。

雨はれし今日の船路のあけかたや雲にはなるゝ岡の辺の松

* 35 都城本「頃」

* 36 都城本「鳥」

廿日 晴 きのふより風つよく、船出さりけれども、^{*37}さのみはとて漕き出けるに、^{*38}波あらく船うこぎ、枕もたけす打ふしてのみなやみける。

かく斗波のうき目を見る事も故郷遠くいかで知らまし

* 37 県図本「さのみとて」

* 38 都城本「漕出ける」

廿一日 昼時、湊に入りぬ。爰はいつくそと問へは、伊予国津和といふ島也と答へければ、たわむれによめる、

日数経て風ははけしく波も又いよ／＼たつわことわりそかし^{*39}

* 39 県図本「はやしく」

* 40 県図本「とかし」

陸にあかり見るに、木たちしけりたる中に宮居有り。社頭に僕
か家の紋をきさみ、三島大明神の額をかけたなり。此神は大山祇^{*41}
命を崇めて、我家の氏の神也。僕が祖先のそのむかしは此国を
知りたる、などふるき事とおもひ出し、よみて奉りける、^{*42}
風もやみ波も平に成りなましあわれみしまの神のめくみに

* 41 県図本「大山祇神」

* 42 県図本「よみ奉りける」

廿二日 細雨 風少し穏なりければ、安藝国からと^{*43}
まては渡るへしとてこき出けれども、霧深く雨ふりてからと口^{*44}
も見へすとてこきもとりければ、
おしたてゝ入れぬはつらしきりとては安藝はてたりしからとくち哉^{*45}

* 43 都城本「・・ともいふなり」

* 44 都城本「霧」

* 45 都城本「口」

廿五日 晴 おとゝひの暁より風かわり、帆をあげ、心のまゝ
に走り行くほどに、須磨の磯辺を過ぎ、敦盛の墓まのあたりに
見えければ、

百年を幾つかさねし今までも涙そさそふもとの古塚

乗りたる船は兵庫の船なりける。鶺鴒^{*46}之助となんいふ童、船長の
子也とて乗居たり。兵庫の沖を通りける比、家はいつくのほと
りそと問ひしに、湊川のこなた也とゆひさしければ、母の待ら
ん、なといひ出つゝ、

たらちめのさそな心をつくし船今や帰ると待そ佗らん

* 46 県図本「權之助」

* 47 都城本「乗り居たり」

昼過ぎ難波津に着なんとす。此程より何くれとうらなくいひ
なくさみけるほどに、船人とも、つくし人にはやさしき、など
こと／＼しく挨拶しければ、僕も名残おしくおほえて、^{*49}
立わかれ又逢ふ事もしらぬひの筑紫の人も情をはしる

* 48 県図本「難波の津に」

* 49 都城本「おほへて」

既に難波に着ければ、はる／＼思ひつゝけし八重の潮路をつゝ
かなく越へ来りしよるこひにたえず、

折にあへは難波のあしもなきものを何おもひけん心つくしに
廿六日 晴 暁、難波より川船にて淀川を登りけるに、昼時、
八幡の前を通るとて、故郷の御神も同体也などおもひ出で、は
るかに男山を押しつゝ、

* 50 県図本「おもひ出」(二て「なし」)

行す急はさもあらはあれふる郷を守れとふかく祈る旅人

日暮れ、大津を過けるに、名にあふ打出のはま、真野ゝ浜辺、
何の色目も見えずありければ、頼政の歌などおもひ出で、
鳥羽玉の夜はうらみしや名にしおふまのゝ浜へに駒もとゝめす^{*51}
昼ならはさそな詠めも名にしおふ此近江路の真野ゝ浜へは

* 51 県図本「おふ」

* 52 県図本「有りければ」

* 53 都城本「あふ」

* 54 都城本「あふ」

旅つかれ、辻駕籠に乗りてうつら／＼ねむりける。目さめて相坂山を問へは、既に遠く過たりといふ。

うつゝとも夢ともわかぬ旅つかれ名に相坂の関もおほ多す

* 55 都城本「目覚て」

* 56 都城本「おほへす」、県図本「おほえす」

廿七日 晴 鈴鹿山を通る。昔は近江の相坂、伊勢の鈴鹿、美濃の不破とて三関の其一也と聞くにそ、

治まれる世のしるしとて名に高き鈴鹿の山は関守もなし

* 57 都城本「その一つなり」、県図本「其一なり」

筆捨山にて馬より下り、茶店に腰かけて見れば、此向狩野古法眼筆捨山と額をかけたなり。山のさま、木たちしけりたる体いふもさらにして、歌よむへくもなし。

うつし絵に名を得し人も筆捨の山とし聞は言のはもなし

* 58 県図本「腰かけ」(て)なし

* 59 都城本「葉」

廿八日 朝雨 昼曇 昼、桑名より船に乗り宮へ渡ルに、風やみ、はかゆかず。日くれ猶風なければ打臥し居たるに、千鳥の声かすかに聞えければ、

さなきたにねられぬものを小夜衛鳴音もさひし波の間に／＼

* 60 県図本「渡るに」

* 61 県図本「聞へければ」

廿九日 晴 暁、遠州荒井に着く。夜明されは、関所越かたく、しはしの間とてかりのやとりにまどろみけるに、故郷へ帰り、たらちめのまめなるさま、おさなきものゝさか／＼しき体などあり／＼と夢見て起あかりつゝ、しはしは茫然たり。

はかなしや家路に帰るよるこひも袖をかたしくうたゝねの夢

* 62 県図本「関所を越かたく」

* 63 都城本「かへる」

十月朔日 晴 道すから荷物重く馬いたむなと馬子の悲しむにつけて、多くは歩行のみしける。身のくるしむにつけてもあわれみの心は仁のはし也となん聞しかは、おもひなくさめて、めくみある心のはしとおもふにそ夜すからたとる道も苦ならず

* 64 県図本「あはれみ」

* 65 都城本「なり」

* 66 都城本「思ふ」

二日 晴 暮かた、清見瀉を過しに、北風面を吹てはたへもさくる斗也。折節、晚鐘ひゞきけれども、心ならず過ぎ行しか、馬子に清見寺の鐘かと問へは、然りとこたふ。

くれかゝる鐘もかすかにひゞけとも遠方人は聞もとかめす

* 67 県図本「過行しか」

三日 晴 夜明け、浮島か原を過てふりさけ見れば、富士の雪高根よりふもとまで皆白たへにふりうつみたり。時しらぬの歌おもひ出しつゝ、

知れはこそ高根につもる富士の雪も冬来る今日は麓にもふる

* 68 都城本「夜明」

* 69 県図本「おもひ出しつゝ」

今夜、箱根山を越けるに、谷をへたて鹿の音かすかに聞えければ、

箱根山夜すから越る旅人の妻こふ鹿の鳴音侘しき

* 70 都城本「聞へ」

四日 晴 川崎にて日くれ、亥の報、東武芝の寓舎に入りぬ。
故郷の事とおもひつゝくるに、茫／＼として心も及ひかた
く、我ながら遠くも来ぬものかなとおもわれて、
旅心つくしのはてやはる／＼と思へは遠き道の海やま

* 71 県図本「旅衣」

* 72 県図本「山」

戊子四月朔日 晴 久智君任満て国に帰り給ふに従ひ、吾妻を
立て筑紫に帰る。

朝ほらけいと、心もいさむらんけふ立帰る駒のあしなみ

千里の流行も一步に初まるとやらんふる事などおもひつゝけて、
はる／＼の海山かけてはてしなき東の空のけふの旅路は

二日 晴 東都より八王子のあひた、広／＼平にして北は遠く
武蔵野につゝけり。今は民家、田畑多くして、野は少し斗残れ
りといふを聞て、

人すまぬかたこそなければはてしなきむさしの原は名のみ残りて

* 73 都城本・県図本「あいた」

* 74 県図本「午にして」

小仏峠とて長き山坂の難所を越けるに、馬上もかなひかたく、
足なやみければ、しはらく茶店に腰かけ休みけるに、前にしけ
りたる山あり。谷川、其腰をめくりて多^{*76}ならぬ気色なり。

深みとりしける山や谷川の清き流に憂さもわすれつ

* 75 都城本「かない」

* 76 県図本「多ならん」

* 77 県図本「わすれて」

やう／＼たとり行くほどに、今日は空さへ晴れわたり、あたか
も蒸せるかことくなりければ、木かけに立ちよりて、
しはしとして立よるかけや木たちふるこけの岩間の滝の白糸

* 78 都城本「程」

* 79 県図本「空さ多」

* 80 都城本「晴わたり」

関の坂を下りけるに、岩のはさまより流れいつる滝のさま、い
と面白し。

旅人の心とめよと関の坂たきりておつる峯の滝つせ

* 81 県図本「出る」

* 82 県図本「落る」

三日 晴 甲斐国猿橋を過けるに、谷川の漲り流れ、水色藍の
ことくなるか、兩岸高く聳へて屏風のことく、橋の高さ、水面
を離るゝこと十六丈にあまるといふ。橋の上より臨み見るに
眼もくらみ身もふるふ斗なり。

世の中にたくひはあらしあやうさは是や名におふ甲斐の猿橋

* 83 県図本「あやうき」

雲のたえ間富士のいと白く見えければ、

山遠く雲のあなたにあらわれて雪にしるけき富士の俤

* 84 都城本「たへ間」

四日 晴 鶴瀬と勝沼の間、路傍に俳僧芭蕉か塚あり。芭蕉
翁甲斐塚と銘あり。

ふりし世の人は夢路の旅なれとしるしは今も爰に甲斐塚

五日 東を出けるには既に夏のけしきたちけるに、信濃はまだ
さ^{*86}えかへり四方の山／＼いまた雪深く見えければ、

吾妻にておしみし春も信濃路はまださへかへる峯の白雪^{*87}

* 85 県図本・都城本「また」

* 86 都城本「さしかへり」

* 87 県図本「しら雪」

六日 山／＼さくら花盛なるを見て、

おもひきや春過^{*88}き夏のけふまでもかゝる盛の花を見むとは

* 88 都城本「過」(「き」なし)

七日 名におふ木曾の山路、行きなやみて、

峯を越へ谷を渡りて旅人の心をつくす木曾の山川

八日 木曾の棧道、芭蕉塚あり。銘に芭蕉翁塚と題して一句を

刻めり。かけはしや命をからむ薦かつら

いのちをはつなきとめねと薦かつらことにはかゝる名をはとゝめき

九日 ねさめの床に立寄^{*89}しに、寢覺山滝泉寺といふ寺あり。眼

下浦島太郎か旧迹あり。

旅人のねさめの床の浪高く家路に帰る夢もむすはし

* 89 県図本「立寄りしに」

十日 あかつき、美濃国中津川の駅を出てけるに、郭公ほのか

におとつれければ、

時鳥旅たつ空にしひ音をほのかにもらす曙のころ^{*90}

* 90 県図本「空」

十三峠といふ所に小高き岡のうへ、老松のしけりたるもとにふ

るき塚あり。西行法師のしるしなりといひければ、

年を経しむかしの色をおもへとや岡辺に残る松の木高さ^{*91}

* 91 都城本「上」

* 92 都城本「本に」

* 93 県図本「岡部」

* 94 県図本「木高さ」

みたけにとまる。宿の庭にいとおもしろく作りなせる松あり。

枝の長さ三丈六尺ありと宿の女のかたりければ、

幾年のよわひのへてや松枝の長きためしを世／＼に残して

* 95 県図本「松か枝」

十二日 晴 関ヶ原の古戦場を尋しに、案内しける男の爰かし

こまめやかに語りければ、其時のさま目に見る心地しける。

夏艸^{*96}に涙おきそふ心哉はたてなひけしむかし尋て

* 96 都城本・県図本「草」

寝物語は美濃と近江の境なり。相知れる人の吾妻に下るとて此

所に行逢たり。しはらく茶店に入^{*97}て酒のまんとて、

おもふとち爰にあふみやみのほとをともにかりねの物語せん

* 97 都城本「入りて」

磨針峠の茶店に入る。臨湖堂の額をかけたなり。湖水一瞬間に

あり。夕日の影に行きこふ船のかす見えたるさま、竹生島の眺

望などいふもさらなり。

かたるともいかて詞も及ひなん此あふみ路の今日のなかめは^{*98}

* 98 都城本「入り」

* 99 県図本「かふ」

* 100 都城本「見へ」

* 101 都城本「おふみ」

十三日 晴 鏡山を詠めて黒主か歌思ひ出つゝ、

我もまたいさ見てゆかん鏡山千里を越へし旅のやつれを

* 102 都城本「こへし」

十四日 晴 三井寺に詣て、こゝかしこ見めぐりて、

苔むせる三井のふる寺尋来て見ぬいにしへも見る心地する

深草山を越ける時、郭公の鳴くを聞いて、

聞くからに鶉ならねとあわれきは深草山に鳴く時鳥

十八日 雨 撰津国住吉に詣ける。木たちものふり、森／＼た

る様、心もすめる心地しける、

濁れるときよきか中のへたてかや世に住吉の神のいかきは

* 103 都城本「詣てける」

廿一日 細雨 晚晴 浪華の津にて船に乗けれども、風波

心にまかせずとて、日を経て纜を解き得さりける。宵の間、ま

とろみつゝ暁ちかき比、夢打おとろきけるか、月影さし入いと

面白し。こしかた行すゑおもひつゝけしか、去年の今宵、薩の

城北にて、人／＼打寄り夜半過るまで月前にまとゐして酒のみ

ける事とも思ひ出してよめる、

ともに見し人は雲ゐのよそなれや去年の今宵の夜半の月影

* 104 県図本「とて」なし。

* 105 県図本「けり」

* 106 都城本「頃」

* 107 都城本「打寄」(「り」なし)

* 108 都城本「過まで」

* 109 都城本「まこと」

* 110 都城本「おもひ出して」

廿三日 晴 昼過ぎ、須磨の浦に船をかけたなり。陸にあかり、

敦盛の墓を拝み、こゝかしこさまよひし折節、夕陽照りかゝや

きたるありさま、名にあふ須磨、明石、淡路島の風景、筆をも

捨つへし。

夕日かけ須磨の浦わの磯馴松さらにみとりの色そまされる

* 111 県図本「昼過」(「き」なし)

* 112 都城本「折ふし」

* 113 都城本「有様」

* 114 都城本「おふ」

廿八日 晴 昼雨 朝、安藝国御手洗の津を出けるに、泊船

いくらともなく漕き出し、渚には遊女とも出て船にむかひまね

きなどしけるを、船にもいとわひしけに櫓に登り、名残おしむ

体見えければ、

あたし世にあたし契りをたわれめに深く結ひし人のおろかさ

* 115 都城本「むかい」

* 116 都城本「見へければ」

* 117 県図本「むすひし」

廿九日 雨 昨日より雨ふり、しかも風さへよからずして、船

路はかゆかさりければ、はる／＼の波路おもひつゝけて、

帰るへき家路はいつこしらぬひの心つくしのはてしな的身や

五月朔日 曇 夜雨 晩景、周防国室積の湊に入る。豊後の

姫島見えたり。あれこそつくしを見るのはしめ也と人／＼いひ

ければ、

東路や千／＼に心をつくしかた今日そ見むるとよの姫島

* 118 県図本「夜雨」なし。

* 119 都城本「見へたり」

二日 曇 夕へより雨降り霧深かりけるか、あけかた雨やみ、

霧はれ船こき出ける比、鐘の音まちかく聞えければ、

鐘の音にかゝるみなとの霧はれて船漕き出る曙の空

* 120 東大本は「も」を見せ消ちにする。都城本・県図本「霧も」

* 121 都城本「聞へ」

* 122 都城本「霧」

七日 晴 此程より日ごとに風むかひ、海路心にまかせさりけるか、おとゝひより風かわり、心のまゝに走り行けれど、あまりにつよく吹きもてゆくほとに、波高く起居さへなりかたきほとなり。

待多にし風には波のあらくして身のおきふしもまゝならぬ世や

* 123 県図本・都城本「吹き」

長門国赤間関にて真帆引あけたるまゝにて、豊前、筑前の海をもたゆみなく走行くほとに、あけかた、肥前国名護屋の磯辺を通りける。過し年、此所にて我國の船破れ、人あまた亡し中に、船長なりけるものは僕か年比相知れる者なりければ、よみて手向ける、

浪の底にかゝるもくつと消し身をとむらふ今朝の袖そ露けき

* 124 県図本「赤間ヶ関」

* 125 県図本「曳あけ」

* 126 県図本「舟」

* 127 都城本「頃」

* 128 県図本「とむろふ」

千々わ灘にて波高く難儀しければ、

旅人の千々に心をちゝわなた雲かと見ゆる沖つしら波

* 129 県図本「たかく」

日くれ風もおさまり、波平かなるに月さへ隈なくてらしければ、

月しろく此風きよきよもすからとわたる船のおとのしつけき

* 130 県図本「しつけき」

九日 晴 市来を通りしに、路の左に滝のいと面白く流れしを、何といふ滝そと里人に問ふに、知らずとこたへければ、

かく斗あかぬ詠の滝つ瀬を名をたに知らぬ鄙人そうき

* 131 都城本「流しを」

十日 晴 伊集院に泊りけるあした、やとをいつるとて、旅衣けふたちかへる袖はけににしきの色と人や見るらん

庚寅紀行

明和七つのとし庚寅の春、我

君に陪従したてまつり、あつまにおもむきし道すから、珍しと見る山の色、聞馴れさりし浪の音、折にふれ興に乗し、いひ出せることの葉、筆にまかせ書つらね、平安を報する文に添へつゝふるさとへおくりぬ。あなかしこ、人に示し笑を求むへからすと、そのはしめに書しるすものならし。

*1 都城本・県図本「あなかしこ」

旅立ける前の夜、雨いたく降りければ、みな人こゝろをいためるけるに、夜あけ、雨はれければ、

みな人のいのる誠のしるしとて君かかとして雨も晴ゆく

おもへは遠きあつま路のはてしなき旅路おもひつゝけてよめる、なかき日をいくつかさねん旅衣けふたちそむる道のはるけさ

*2 都城本・県図本「立そむる」

*3 県図本「はるけき」

伊集院にて雨ふり出ける。誠に我 君はむかしより雨を目出たきためしになん申し侍りしかは、

我君のめてたき例し遠き世に今もたえせぬけふの春雨

*4 都城本「出けるに」

*5 都城本・県図本「目出度」

*6 都城本「たへせぬ」、県図本「たえせん」

苗代川に泊り給ひける夜、此所の佳例とて朝鮮人の男女あまた出て、舞ひうたひつゝ、君をなくさめ奉りける。そのかみ、国の守の彼国に渡り、従かへ来り給ひし人々の子孫、かく繁栄し深きめくみにしたかひ、なつき奉りしかは、

たくひなきそのいさおしのしるしとて異なる国のかなてをも見る

*7 県図本「舞ひうたひて」

市来にて桜島をかへりみて、故郷のそら、なつかしく詠めやるに、霞わたりあやめもわかすなりければ、
春霞たちなかくしそ故郷の空はいつくとかへりみるまに
大きとゝいへるひろき縄手を行きけるに、

君の御駕もまのあたり見えさせ給ひ、やつかれかたくひまでも

おそれみながらここに乗りて、道のなやみもわすれける。
身のほとを思へはいとゝありかたやあまねくひろき君か恵みに

*8 都城本「たくい」

*9 県図本「わすれけり」

路のちまた、老となく若きとなく男女よりつとひ、道を清め塵を払らひ、所せきまでむれあるを見て、

かくはかり三国の民のかしつきに君か恵みのかしこさそしる

*10 都城本「迄」

*11 都城本「恵」(「み」なし)

湊にてあいしれる人のもとに立よりしに、さゝ杯用意してもて
なしけるか、また来る夏の比にはまいり侍りなんといひつゝ、
やとを出ける。道にてよめる、

またこんと契る詞のはかなしや明日をも知らぬあたし浮世に

*12 都城本「など」

水引泰平寺に詣てけるに、そのかみ豊臣太閤の征西の時、我邦君の垢を含み出て謁見し給ひしあとゝて、大なる石を立てゝ今に降参石といふ、など寺僧の語るを聞て、こゝろにふかく感ずる事ありて、

ものゝふのやたけ心や此庭のむかしおもへは涙とめゑす

* 13 都城本「豊臣太閤」、県図本「豊太閤」

* 14 県図本・都城本「あとして」

* 15 県図本「なといふなど」

* 16 県図本「寺僧の語る聞て」

麦の浦といふ嶮しき坂をこゆるとて、ふるさとのかたを詠めやるに、いつこの空とさためかたかりければ、

雲霞へたてゝ遠きふるさとはいつくの程とさしも知られず

* 17 都城本・県図本「ふる郷」

* 18 都城本「しられず」

阿久根の浜辺、色ある梅の咲きこほれたるを見て、

行く道のうかりしなかになくさむは花に心をうつし見る比

* 19 県図本「行道」

* 20 都城本「頃」

阿久根に泊りける夜、磯うつ波の音高く、終夜夢たにむすひかたかりければ、

さなきたにねさめものうき旅のやとに磯うつ波の音のはけしさ

* 21 県図本「音はけしき」

野間原の関所を出けるに、我国の名残とおもへは、何くれとおもひつゝけ、いと心ほそくて、

帰るへき道とはいへと何となくものすこくのみおもわれそする

* 22 県図本「いとく」

* 23 都城本「おもはれ」

境をへたてゝ肥後薩摩の男女つとひ居けるか、髪^{*24}のさま、衣服^{*25}の体、詞のはしまて似るへくもなきを見てよめる、

かきりあるそのさかひとてむかしよりかはかりかわる国のならはし

* 24 都城本「髪之さま」

* 25 都城本「衣服之体」

* 26 県図本「かわかりかはる」

佐敷多羅尾といへるは名にあふ難所にて、馬、駕籠^{*28}に乗るへきにあらねは、かちにて登りしか、まださえかへる如月の空に汗流れ、息も絶る斗くるしかりける。

行きなやむこの山坂のくるしさも何の為とていとわれもせず

* 27 都城本「おふ」

* 28 都城本「乗へきに」

* 29 東大本、濁点ママ。都城本「またさへかへる」、県図本「まださへかへる」

* 30 都城本「此やま坂」

日ごとに暁より起出^{*31}てぬれば、駕籠^{*32}のうちにうつらくとねむりかちなりしか、こゝろあしさいわんかたなし。

おきもせずまた寝もやらぬ旅つかれうつゝに過る道の海山

* 31 都城本「起出ぬれば」

* 32 都城本「内」

* 33 県図本「あしきいはんかたなし」

* 34 県図本「かきもせず」

肥後国比奈久に泊りける夜、あるしのうたてかりければ、たわむれによめる、

うき旅にうかりしやとのあるしこそ世のうき物と思ひしらるれ

* 35 都城本「るゝ」

小川にて宿^{*36}のあるし、さゝなど出し、いとねん比^{*37}にもてなしけ

るほとに、いとこゝろよくやすみけるか、春の夜のならひ、ほとなく暁になりて起き出つゝ、

此やとのあるしの情ふかき夜に夢おとるかす鳥の声く

* 36 都城本「やと」

* 37 都城本「頃」

* 38 県図本「か」なし。

* 39 県図本「起て出て」

やとのあるし也ける人の顔かたち、我国にて相知れる人にそのまゝなりければ、

海山をへたてゝ遠き爰にまた似し佛はそれかとそみる

山鹿に泊りける夜、おもふとち打寄り酒給へけるに、あるしの

妻とてさかしけなるか酒汲ける。名を問へは、岩とこたふ。人

く酔に乗して、山鹿岩の三字を句の中に置いて恋の歌よまんと

いひけるほとに、たわむれによめる、

山ふかみつまこふ鹿と我恋は人しれすこそ鳴きあかすなり

* 40 都城本「打寄」(「り」なし)

* 41 都城本「かふ」

終日山坂を越へ、日数を経てつかれたる暁ことに、したくせよとおこされぬるくるしき、いわんかたなし。

旅のやと夕へくのかり枕おきわかれうきあかつきのころ

* 42 都城本「頃」

筑前国太宰府にて天神宮へ詣てけるに、木たち物ふり、森く

たるさま、延喜のむかし思ひ出てつゝ感慨いと深かりし。西行

か宇佐へ詣てし昔なとおもひつゝて、

我もまた涙こほるゝ心哉此あまみてる神にまふてゝ

* 43 県図本「大宰相」

* 44 都城本「様」

* 45 都城本「思ひ出つゝ」

宮殿、国の守少将継高卿自画自讃の絵馬奉納し給へるを見て、かしこしなかくる詞の花やさく道ある君か神のたむけは

米の山越といふ往来まれる嶮しき山を越けるに、幽なる谷の

底に梅花の今を盛と咲匂ひたるを見て、

誰見よとかく匂ふらん住む人もなき山里の梅のさかりは

* 46 県図本「梅華」

小たけにて茶店に腰かけ休みける。あるしの女、餉などこゝろ

よくして出しける。名をゆらといふよし、つれの男のいひけれ

は、小たけゆらの五文字を句の上におきてたわむれによみて興

しける、

このはるはたひの空とてけさまでもゆめとくらしてらくとのみ見る

* 47 都城本「みへけり」

日ごとに故郷遠くなゆくまゝに、

旅の空うき年月をふるさとに帰るをいつと定なき世や

豊前国田の尻にて春雨ふりこめつゝ、船のうち物さひしかりけるに、久智君の近侍の人、歌よみけるとて畳紙に書つけたるを

示されけるをよみて見るに、海上霞を題にして、船人の梶をた

えてもそことなくかすみこめたる春の海つら、まかひなき主の

御歌也ければ、読て其人して奉りける、

春霞立ちかくしたる海つらにまかふ色なき君かことの葉

* 48 県図本「まかふに」

周防の国室積といふ湊に泊りける暁、故郷の事ともまさしく夢

に見て、

見しや夢さめしやうつゝけにそれとさためかたきは人の世の中

* 49 都城本「定め」

かむろの津にて雨風いとほけしく波高く船うこき、暁かけてね
られさりければ、

浪枕ねさめかちなるあかつきは千／＼に心をくたく比かも

伊予国津和の湊に船かゝりしける。過し年吾妻におもむきし時、

此湊にて陸にあかりけるに、磯辺に三島明神の社有り。我氏の

神なれば歌よみて手向ける。そのあけの年、国に帰るに、こゝ

に泊りて神に詣てぬ。此度はおふやけのおきて有て心にまかせ

さりければ、船より遙拝してかくなん申侍りける。

千早振神のちかひの浅からてまた船よせて手向する也

* 50 都城本・県図本「あり」

* 51 都城本「たむける」

* 52 県図本「あふやけ」

* 53 都城本「ちかい」

備後国矢崎といふ所に泊りける夜、雨降いと物さひしかりけ
る。筈おしあけて見るに、目さすもわかぬほど也。

日はくれぬ雨はしきりにふる郷のそらしらぬひの心つくしや

備前国牛窓の津を出ける朝、過し月の今朝、我やとを出ける事

ともおもひ出て、

朝露のおきわかれつる春艸のすへいつの日かむすひあふへき

* 54 都城本「備前の国」

明石の浦を過けるに、空はれ風静にて行きこふ船の数見えしき

ま、筆にも及ひかたかるへし。

名にしおふ明石の浦をこく船のなかにたえぬ春の海つら

* 55 都城本「之」

* 56 都城本「風」なし。

舞子の浜にてよめる、

白妙の真砂に生る松の葉はさらにみとりの色や増らん

大蔵谷にて忠度の墓に詣てゝ、

弓筆のたくひなき身のあと問へは松ふく風も哀とそきく

* 57 県図本「聞」

須磨浦にて、

名にしおふ須磨の浜辺の松の葉に残る夕日の影そ淋しき

仲哀天皇の御陵、路の傍に在けるを拝み奉りて、

すへらきのかしこき御代も年経てや残る塚さへ苔のむすらん

* 58 県図本「在りけるを」

* 59 県図本「年経てて」

須磨寺に詣けるに、案内の童かしこけなるか、寿永のむかしま

めやかに語りければ、目に見し心地して、

聞したに袖に玉ちるふりし世の跡尋来しけふのあわれさ

* 60 県図本「あはれさ」

敦盛の墓、路傍なれば、吾妻へ行き還る度ことに詣てける。石

かたふき、半土中に埋もれ、苔むしたるさまいとあわれなり。

なき跡を問ふ折ことにあわれさは猶いやまさる物とかはしる

楠公の墓を拝して、

おもひやる苔の下にはなきからのくちてくちせぬ人のいさおし

兵庫を出けるあした、摩耶山に詣て布引の滝をも見るへきなど

申侍りしに、山を下りて滝を問へは、はるか跡也といふ。嶮し

き山を上り下り、つかれはてければ、立帰るへき心地も
なくて、

布引の滝はいつくとしらいとのくりかへしては問ふにつられ

* 61 県図本「しら糸」

淀川を登りけるに、近くは八幡、山崎、宝寺、遠くは愛宕、比
叡山など見えたりたるさま得ならぬに、折しも追風吹き出
て船のゆくこと、矢を射ることくなり。

名ところのかす／＼なかめ行く船に追手の風も心して吹け

* 62 都城本「いるかこことくなり」

宇治の平等院に詣て、源三位頼政の画像、同じき鎧、頭巾、扇
の芝、悪左府の釣殿など見めぐりつゝ、名にあふ朝日山、小島
ヶ崎、恵心院、興聖寺など目前に見えたり。

世のうさもわすれやしなん此里の山のなかめや水の流に

大津打出の浜にてよめる、

塩ならぬ海とは見えども、船の真帆引つるゝかけも幽に

* 63 県図本「打立の浜」

* 64 東大本、濁点原のまま

相坂山を越て、

おさまれる世に相坂の関越て猶道ひろき東路のそら

伊勢へ詣つる子どもの背にむしろやうのもの杯負つれたるは、

雨をふせく為也とかや。其さま、さなから乞人のことくつかれ

はてたり。

見るもうしのりの為とおきな子のあしいたけにも行なやむさま

* 65 都城本「子共の背に」、県図本「子とも背に」

* 66 都城本「様」

* 67 県図本「つかはたたり」

鈴鹿山にて梅の咲乱たるを見て、

めつらしな弥生なかはに鈴ヶ山ちりもはしめす咲匂ふ梅

* 68 都城本「鈴鹿山」

山を越過てよめる、

春風や日数程ふる鈴鹿山あつまの空や近く成らん

* 69 県図本「鈴ヶ山」

* 70 都城本「なるらん」

筆捨山にて雨の降ければ、

春雨にみどりの色もいやまさる筆捨山のけふのなかめは

光陰矢のことく、家を出て昨日今日のことくなれとも、既に五

旬に及ひなんとす。

乗る駒のあしなみはやく行く道はけふも昨日となるそほとなき

* 71 都城本「程」

道のほとり、十一二なる童の見るかけもなき様なるか、親なし
にてくるしみ侍る。銭取らせよといふに、我身のむかしおもひ
出られ、いとせつなくてよめる、

聞からに袖しほるなり我もまたおなしなけきのむかし忍ひて

* 72 県図本「なる」

大井川の水にせかれ、遠州掛川の駅に泊り居ける。あるし夫妻
かたのことくもてなしつゝ、今宵はわきて雨降り物さひしけれ
は、浄留理語りなどして憂さを慰めける。夜半、俄に金谷の駅

まで通るへきに成りければ、宿に心残りてよみける、

かはかりに人の情のふかき夜にゆくことかたき雨の音かも

* 73 都城本「なり」

* 74 都城本「のこり」

* 75 県図本「はも」

暁過る比、小夜中山を越るとて、
夜を深み小夜の中山越へゆけは松吹く風の音そ身にしむ

* 76 県図本「越行は」

原と吉原の間にて駕立させ詠むれば、降りつゝきたる春雨に雲
立おほひ、富士のおもかけも見へす、いとほいなくて、
雨霧に立ちかくしたる富士の山雲のいつこか高根なるらん

* 77 都城本・県図本「見えす」

箱根山にて富士の高根、湖水の上にあらわれたるさま、中く
詞も及ひかたし。

かくるともいかで及はんこと葉のつたなきまゝをふしの高根に

箱根にとまりけるあした、戸おしあけて見るるに、一へんの白

雲四方をかこみ、咫尺も見えわかぬ体なり。

白雲のかゝる山路にすむ人は世のうきことをわすれやはする

* 78 県図本「箱根山に」

* 79 県図本・都城本「見るに」

* 80 県図本「一篇の白雲」、都城本「一へんの白雲」

久智公、箱根にて富士を見給ひ、春深き霞のうちに見し富士の
かけすさましくつもるしらゆき、とつらね給ひしを承りて、
僕もかたのことく一首つかふまつりける、

春霞いくへへたてし山のうへに猶さえかへる雪のふしの根

* 81 県図本「名智公」

* 82 都城本・県図本「さへかへる」

江都に着きけるあしたよめる、

へたてきておほくの月日ふるさとにゆひを折てや語り出つらん

* 83 県図本「へたてきく」

* 84 都城本「ふる郷」

* 85 都城本「出らん」

江府に着てあけの日、大円寺先考の墓に詣てよめる、
まさは世にあひ見るけふのうれしさをおもふにまさる袖の露けさ

* 86 県図本「露けき」

宮内安村は年比相知りてわきて心を同ふせし人也。東都に身ま
かりぬと聞て年経けるに、其墓さへ知らず、ほいなかりし。今
年、泉谷山にのほり、はからす其墓を見て立寄り拝みつゝ、か
くそよみて手向ける、

うれしさも又かなしさもいやまさるなれこし人のしるし尋ねて

* 87 県図本「しらす」

* 88 県図本「拝み」(「つゝ」なし)

* 89 県図本「尋て」

貝原翁の女大学をもとめて娘のもとへ遣わすとて、其巻末にか
きつけゝる、

子をおもふ親の心は谷川のそこひをふかく尋ても見よ

故郷の相知れる人のやめると夢に見て、

旅そうきつねなき夢もさめて今朝かけてそおもふ心つくしに

あた夢と思へとうしやおもかけのやつれはてたる人のいたつき

故郷の姉のもとへ文こまくとかきやるとて、我なからよみて

悲しかりければ、

かくふみに涙の露をまきこめておくる心を哀とや見る

西の久保といふ所を通りしに、あやしけなる家にきよらなる声

して歌うたひつゝ琴ひくを聞て、

ひきならすぬしは誰ともしら^{*90}いとの音色ゆかしき宿のつまこと

*90 県図本「しら糸」

文月初の八日、人／＼にいさなわれ、船にて隅田川を逍遙しける夕かた、深川の八幡宮に詣て茶店に入つゝ、さゝ^{*91}汲かはし興しける。庭に、竹の一むら生ひ茂りたるに風のそよそよさいふもさら也。あるしはかくとなんいふよし、人のいひければ、若竹かくといふ文字をこめてたわむれによみける、此庭のみとりもふかき若竹にかくまでそよ風⁹¹の涼しさ

*91 都城本・県図本「汲かわし」

田舎にて相知れる人のわかれて年久しく成しを、まさしく夢に見ければ、

逢ふ事を思ひ絶ても久しきにあひみる夢の契は^{*92}かなさ

*92 都城本「はかなき」

秋更て槿の残りすくなに垣根にさけるさま、人々と興しければ、

朝顔のかすさく花の盛よりおくれ⁹²て咲ける二つ三つ四つ

仲秋十二日、たちちめの三十三回にあたりける。国を出ける時のりの事なとかたのことく沙汰しける。世を去り給ふ折、僕いまたいとけなかりしかは、さそな何くれとおもひつゝけ給ひけんなどおもひやりつゝ、かなしさいとやるかたなくて、かくなん、

なてしこにおきわかれにし朝露の消し跡とふけふの悲しさ

八月十五夜

ふるさともおもひ出らん名にしおふ今宵の月のあかぬ詠に

雨降出てゝ曇りかちなりければ、

ふるさとの空いかならん東路はくもりかちなる望月のかけ^{*93}

*93 県図本「影」

九月十三夜、暮かた旅の宿、独月待つたくれ、菊、すゝき、色／＼^{*94}取はへて人のおくりけるに、よみてつかわしける、旅のやとひとり月待つたくれにこと問ふ人の心ゆかしき

*94 県図本「つかはしける」

*95 都城本「宿」

十三夜、終夜月のくまなくてりければ、もろ人のおもひもはれぬ望月のひかりをみかく後の今宵に

月のさやけき夜、心に感ずる事有てよめる、

照る月の影はてしなき武蔵野は心にかゝる山のはもなし

前の 国夫人の一周回^{*96}に法のいとなみ侍りし時、僕も御寺に伺候しける。年比御側近くつかふまつりし人々、老ひ若き、^{*97}詣つゝ

焼香拝礼しけるさま、心の内おもひやられ、悲しく^{*98}覚へければ、

及ひなき我たにかゝる袖の露おきそふ人のあわれ如何なる

*96 都城本「年頃」

*97 都城本「詣てつゝ」

*98 都城本「おほゑければ」

紅葉見にまかてゝ、一葉をひろひ故郷へ送る。

紅葉はの色はそれともかわらねと染し心をめつらしと見よ^{*100}

*99 都城本「ひろい」

*100 県図本「かわれとも」

人にいさなわれ、神詣して帰るさ、あひし^{*101}れる人のもとに立寄りしに、かたのことくもてなし、ふたりの子ともに琴ひかせ、

なくさめける。折から月さし出、座中ひるのことく也。^{*102} 市中な
からもいとさひしきほとなりければ、

照る月に琴の音色もいとさえてこゝろもすめる宿のしつけさ

* 101 都城本「あいしれる」

* 102 都城本「なり」

* 103 都城本「さへて」

姉女よしとかやいへるか筆を採て、窓の月今手に入りし琴の
音と書しを、人々手に取て賞美しけるほとよめる、
よしやよの心こと葉のそれのみか清けにうつす水くきの跡

* 104 県図本「清けきうつす」

十一月中の九日、昼ころより雪降りければ、暮まへ人くと雪
見に出つゝ、海辺の茶店に入り見渡したる海原の景、いふもさ
らなり。

くれかゝる吹雪にくらき海つらは漕行く船も櫓声のみして

* 105 都城本「暮前」

初雪のあした

初ゆきの今朝ふるさとの空も又かはかりつもるなかめ成るらん

土岐氏、痘を病てむなく成りける。^{*106} 故郷の便り、例式定まれ
る日数あまた過て東都を出てければ、

おもひあへぬなけきと知らて故郷にたよりをいつと待や佗らん

* 106 都城本「なりける」

相知れる者の俄に身まかりける。妻の名を袖といふよし、人の

いひければ、よみて其友におくりける

思ひやるよひ／＼ことにひとりねの衣かたしく袖の涙を

* 107 都城本「よひ」

節分に雪ふりければ、

暮てゆく年の名残にふる雪はつもるよわひの色かとそ見る

除夜

なすわさのそれとも見えすいたつらにあわれ今年も夢とくらしつ

江戸を出ける前の日、たらちねの御墓に詣て、おもふ事有てよ
める、

如何にせん又問ふへきも悲しきにかきりとおもふ今日の手向は

* 108 県図本「悲しきも」

辛卯五月廿八日、江戸を出けるあした

憂かりける旅のやとりも今朝ことに出るとなれば名残社あれ

程谷、戸塚の間、野岡の体、我国に似たる所あり。^{*109}

いや速きつくしのはても今爰にうつす野山やそれかとそ見る

* 109 県図本「程ヶ谷」

* 110 県図本「処」

* 111 都城本「いや遠く」

夜をこめ宿を出て行く程に、松風森々としていと物すこし。

たとりゆく旅路にいとゝわひしきは明かた近き野路の松風

宇津の山にて駕の内ねむりを催しけるに、風のすゝしきに目覚
ければ、

旅つかれうつゝにこゆる宇津山夢おとろかす風のすゝしさ

* 112 都城本「宇津の山」

女どものむれ居て早苗とるを見て、

賤の女かさそな心やいそくらん早苗とる日のくれかゝるころ

岡辺にて、

夕立の一むら過る岡の辺にあらわれ出る松の木高さ^{*113}

* 113 都城本・県図本「木高さ」

掛川に泊るへきに、俄に大井川の水増り、島田にとまりしかは、
故郷にかくとは知らて今宵しもいつく泊りと語り出らん

* 114 都城本「まさり」

* 115 県図本「島田にとまりければ」

小夜中山にて

命ありとまた越ましと思ふにそあわれいや増す小夜の中山

* 116 県図本「ます」

江戸を出ける夕かた、伊勢詣する童の、宿に泊らせよといふを
きくに、もとは武州川越とやらの者にて、去年の春父におく
れ、せんかたなく江戸に出て京橋に住ける工匠の家に仕へし
か、今日主人の餉おくとて品川まで出しそのまゝ、伊勢へ参
る也。年は十一、名は伊佐松、同行もなきなど語るを聞て、い
とあわれ也ければ、伊勢の追分までは列れゆくへしとて、朝夕
の事なと念比に沙汰して、追分にてわかるゝ時よめる、
今よりは誰をたよりにおさな子のはるけき道をたとり行かまし

* 117 都城本「夕方」

* 118 県図本「聞に」

* 119 県図本「伊勢の追分まで列行くへし」

しきりに哀もよほし涙おさへかたかりければ、
かばかりのあわれにもまたとゝめぬぬ涙や老のしるし成らん
また行すゑを祝して、

一すちに神のめくみをあおけたゝひとりはるけき旅路行くとも

* 120 県図本「一とすちに」

筆捨山にて是まての旅路と思へは、いと名残有りて、

此山のなかも今をかきりそとかくるゝまてもかへり見て行く

* 121 都城本「迄」

* 122 都城本「ありて」

日高く坂の下に着ける。雨ふり物すこく、暮るゝまでするわき
もなく軒近き山を詠め居たり。

この宿に山のなかめのなかりせは何に旅寝のうさをわすれん

* 123 県図本「忘れん」

関に泊りける夜、しきりにいさ松か事おもひ出て、

おさな子の誰にたよりもなきやとに衣かたしき独りねぬらん

* 124 都城本「宿」

鏡山にてよめる、

行き還る人のおもてをむくるとて鏡の山と名付初けん

深艸山にて日くらしの声を聞て、

夏艸の深草山の山かけに聞もすゝしき日くらしの声

* 125 都城本・県図本「深草山」

* 126 都城本・県図本「夏草」

* 127 都城本「やまかけ」

禁裏を拝しける日、御築地のかげに暑をしのきて、

すへらきのかしこき時に大宮の御かけを仰く遠の旅人

* 128 県図本は闕字なし。

唐崎の松を見て、

幾千世か同しみとりにあふみ路や志賀の浦わの松の栄は

矢はせの渡にて、風むかひ、船を返すへきなど人くゝいひけれ

は、

武士の矢はせの浦を行く船をひひてはいかてかへす物かわ

* 129 都城本「むかい」

* 130 都城本・県図本「物かは」

楠公の御墓に詣けるか、十八年の間に五たひ参りし感慨いと深く、かくそ手向ける。

なき跡を問ふ折ことに哀れさのまさるや人の心なるらん

* 131 県図本「参りしか」

* 132 県図本「哀さ」

* 133 都城本「成らん」

須磨の浦にて、雨降り物さひしかりければ、

降雨に須磨の浦いとまあれややくやもしほの煙たに見す

一の谷にて、

いにしへを忍ふけふしも降る雨はたもとをほさぬこゝろ成らし

* 134 都城本「心なるらし」

敦盛の墓に手向ける、

朝かほにたとへし人のよわひにもしるしはくちぬ野辺の古塚

鹿室の湊に船かゝりしける。去年の春、伊集院氏、此湊にて自

害しはかなくなりし。おさなきよりあい知れるゆへ有ていと悲

しけりければ、

かきりそとこの海山を詠てや消にし跡を問ふも悲しき

* 135 県図本「あひ知れる故」

同所にて晝めさめける折から、鐘の音近く聞えければ、

さならてもひとりわひしき泊舟の枕に近き晝のかね

* 136 都城本「きこへければ」、県図本「聞へければ」

赤間か関にて、寿永のむかし、二位の尼、

幼帝を抱き海に沈みし事なとおもひ出つゝ、からやまとのふみにもたくひなき悪逆、今思ふたにいとくちおし。

つみとかのたくひはあらしすへらきのかしこき君を波に沈めて

肥前国大村に泊ける夜、あるしの女いとかしこけなるか、むか

し今の事なとまめやかに物語しける。あけのあした、僕は早く

宿を出てゝさきの駅まで通りければ、跡に残れるつれの人にこ

とつてゝ、破れやに残る匂ひや月の影、といひやりける返し、

書おくることは心のみか見るに妙なる水くきの跡

* 137 県図本「泊しける」

* 138 都城本「ことつてし」

七月十五日、矢掛といふ所に泊りける。故郷なき玉祭の事とも

おもひ出て、

なき人の数にはあらてふるさとの手向にもれぬ我身成らん

* 139 東大本、「なき人の…」の歌の頭に「前」、「立寄りて…」の歌

の頭に「後」とあるため順序を入れ替える。

* 140 県図本「なるらん」

長崎に逗留しけるに、七月十八日くれかた、人にいさなわれ、

清水に至り、すゝみかてら茶店に腰かけ休み居たり。後は山、

前は港、唐土、紅毛の船杯数見えつゝ、神社仏寺市中のさまざま

な目下にある。貴賤老若、観世音に参り屯ふ体、又おひたゝ

し。過し月の今宵は都東山に遊び、くれ過清水に詣てし事とも

思ひ出てゝ、

立寄りて人の心も清水やこゝは音羽の滝ならねとも

* 141 都城本「見へつゝ」

* 142 都城本「共」

長崎にて宿の女の能書なるよし聞て、歌一首書て見せよ、など
望みしかとも、かゝさりければ、

見まくほし人の心のゆかしさをかきつらねてよ水くきのあと

長崎に廿日あまり泊りて、今日は船に乗りて国に帰る、などい
ひければ、あるし夫婦泣きしほれつゝ、物たにいひ得さりしか
は、ともに哀にて、

おもひきや人の心のかく斗情もふかき色を見んとは

やとのはしらに書てはりつけゝる、

うき旅のうきをわするゝやとりこそ出るにかたき名残成らし

肥後国天草の内、富岡の湊に数日風雨にさへられ、人／＼なや
みける。夢中、下の句を得たり。夢さめて、上の句を添てかく
そ詠しける。

千々わなな千々に心をつくし船いつまで浪の浮ね成らん

* 143 都城本「うきね」

深夜衛の声を聞て、

小夜千鳥鳴音もさひし秋ふかみくまなき月の波の間に／＼

八月十五日、阿久根につき終夜月を詠めて、

我国とおもへは月のかけたにもなつかしとのみなかめあかしつ

* 144 都城本「詠め」

暁、向田を出て、

秋ふかみかけすましくてる月にたえずもすたくむしの声／＼

* 145 都城本「たへす」

故郷にかへり、皆人平安を賀して、

東路や心つくしの旅なからなにはのあしの一ふしもなき

* 146 都城本「なにわ」、県図本「なかは」

通昭録卷之四十六

落葉集

辛卯の冬、九歳に成ける愛子をさきたてゝ、悲みの涙袖にみち、
*₂ 別れの情腸をさく。歌よむへき心も無かりし。*₃ 日数過て、靈前
にむかひ香を焼き、一首たむけなんとあんしけれど、ことは
つゝくへくもなく、涙のみさきたちければ、

手向することはよりまつさきたつはおもひにあまる涙なりけり
手向にとおもふことはのかすよりも尽ぬは袖の涙とはしる

* 1 県図本「満ち」

* 2 県図本「別の情」

* 3 県図本「なかりし」

* 4 都城本「むかい」

* 5 県図本「まさる」

夜に入り、はしめて墓に詣て、ともし火てらして見るに、悲し
さ中／＼いわんかたなし。

尋ね見るあとのしるしをともし火のかけとともにや消もうせなん

* 6 県図本「いはんかたなし」

夜ことに墓に詣けるか、同じやまふにてむなしくなりし人、い
くらともなくその墓にまふつる多き中に、或は若き女の乳を
しほりて墓に手向け、或はおさなき人の衣を墳にまとひ、帯引
*₇ まはしなとしてふししつむさま見るも、むねつふるゝわきなり。

聞もうし見るに涙も遠近の道ゆく人のかなしみのいろ

*7 都城本「まわし」

ある夜、夫妻打つれ墓に詣て、知る事あらはよるこひなんな
とおもひつゝけて、

あらは世に見るへきものをたらちねの問ひ来しは今日の喜のいろ

*8 都城本・県図本「今の喜のいろ」

あさな／＼花香手向るとて、

あきことに袖こそしほれなきかけを問わるゝ身にて問ふにつけても

月の隈なく照りわたりける夜、悲しき事とおもひ出でてよめる、
てる月にむかへはいとゝなつかしやなきおもかけのそふ心地して

*9 都城本「陰」

日にそひ、くりこと思ひ出られ、身もあらぬ斗悲し。

わすれんとおもへはいとゝわすられぬまのあたりなる人のわかれを

*10 県図本「あらぬ」

除夜に墓に詣けるか、いつよりも悲しく、帰るさもわする斗な
り。

あわれきは問ふたひことのつねなれと折にしあへは忍ひかねつる

元日のあしたよめる、

あらは世にうれしかるへき今朝は猶しほりもあゑぬ袖の露けさ

七／＼日の祭りするとて、

おもひきやとふへき人はさきたてゝ問わるゝ身にて跡とわんとは

去者日疎といふも左ならず。

さるものは日／＼とからてゆかしさの猶いやまさるあわれ悲しさ

世に在し時、先祖の祭りやうなといとさかく尋ねけるに、そ
の好み給ふをさゝけてまつるへきなといらへし時、世を去り給
ひつゝまつり奉らんには、日比好み給ふあさらけき魚肉まつり

侍るへしなといひし事とおもひ出つゝ、好める品／＼手向す
るとて、

我にかくちかひしことは身の為をたのめおきける詞とそしる

*11 都城本「頃」

*12 県図本「まつりへしなど」

*13 県図本「手向るとて」

去年の秋、東より帰り植置し桜、過し春花咲けるやと問ひつる

に、ゑならず咲みたれし、なとまめやかにかたりしか、此春咲

みたれたるを見て独花に對して悲にたえず、

去年の春是を桜のなこりそと知らてや人の詠おきけん

*14 県図本「座に對して悲しさにたえず」

公にまかてつるあした、墓に詣てけるか、帰るさにまた立寄
つゝよめる。西行かふる事思ひ出で、

道のへの清水ならねとなき跡のなつかしければ立とまりつれ

日にそひなけき沈みけるに、人のいさめければ、

かきりあるそのことはりのかくそとは思ひながらも打なかれけり

次の子に元服加へけるあした、よめる、

うれしさのあまると人や思ふらん忍ひかねつる今朝の涙を

丁酉大島紀行

今年安永丁酉の冬、おふやけの仰うけ給り、やまとの外の大
島に下りぬ。十二月十六日家を出て、前の浜なる石灯炉より船
に乗りける。親しき人／＼是まで送來り、二人の子共したひ来
りけるを帰すとて、日比学ひし文の道怠る事なかれ、なといと

こま／＼いひのこしける。

おこたらすおしへの道の一すしにふみもまよはてたとりてしかな

* 1 都城本「子とも」

* 2 県図本「帰へす」

* 3 都城本「日頃」

纜を解つゝ風にまかせ真帆引かけたれば、見るかうちに人／＼

の影も見分けぬほとなりもてゆけは、心ほそさいふ斗なし。

けふことにさそな名残のおしからむ君につかふる道しあらすは

* 4 県図本「曳かけたれば」

* 5 県図本「心ほそき」

須崎の松原遠く詠やるに、南林の晚鐘幽に聞へければ、

聞からにいとゝ身にしむ故郷の空くれかゝる晚鐘のかね

* 6 県図本「詠めやるに」

小夜更て山川に着ぬ。寒風肌に通りて、船中夜を明すへくもお

ほえず、陸に上り寒を凌ぐへきなと人のいふにまかせ、肥後

氏なる人の戸を叩けるに、呼入、焼火していと念比にもてな

しける。寒えし潮風烈しき波の音も聞へすなりゆきければ、

尋来て情もふかき此やとは寒えし嵐の音たにもなし

* 7 都城本「おほへす」

* 8 都城本「念頃」

十二月廿三日

今ほと船出すへきもおもほへすとて、人／＼と共に音にきくう

なきの池見んとて尋ねゆく。道すから、鳴川の滝を見てよめる、

立寄て心も清くなる川のおとすみわたる滝の白いと

* 9 県図本「しら糸」

池に至りて見るに、開聞の御嶽もほど近く見へければ、近衛家

の筑紫の富士の御歌などおもひ出て、

音にきくうなきの池は池ならて是やつくしの鳩の水海

* 10 県図本「見えければ」

* 11 都城本「おもひ出て」

* 12 県図本「聞く」

池のほとり、温泉ほとはしり湧上る事、二尺にもあまり三尺に

も及ぶ。里人、是を地獄といふなるを聞て、たわふれによめる、

地獄とははるけきほとゝ聞つるにまのあたりにも見るそおそろし

* 13 県図本「湧き上る事」

* 14 都城本「たわむれ」

又、地獄遠に非すといふ事を思ひ出し、

遠きをも近きにさとる教こそうなきの池の汀にそしる

十二月廿八日

山川の湊にては船出する便あしゝとて、揖宿の渡りといふ所ま

て漕渡り、爰にて順風を待ける。船子とも、一灘渡し首途よし、

などいふを聞て、

山川をことなく爰に渡り来て名にあふ島を見るも程なき

* 15 都城本「湊に而は」

二月十日

今日は風よろしとて走出ける。あたりにつなきおきける船とも

碇をあげ、帆を引ききおひ匍りければ、

真帆かけて千里の波を一時と船子も共にきおふ追風

十七八里も出ぬらんとおもふ比、俄に風替り、さきへは行くへ

きやうなく、終夜風に任せ走行けるか、夜明て泊津に着ぬ。

是より坊津は程近ければ、明日の日陸へ上り如意珠山に登る。抑、此寺は、古へ日羅上人の開基として真言秘密の道場、辱くも後奈良帝の勅願所として西海金剛峯寺の篇額をかゝけ、松吹風は真如の月をみかき、磯打波は実相の夢をさます。唐人の書きたる文にも、日本の三津の一といへるもむへならんかし。山の姿、巖の形、筆にも及ひかたかるへし。まして、いやしきことのは、いひ出すへきおもひもなくして過ぎぬ。泊の津は廿とせむかし官遊しける事ありて、あひしれる者有ければ、立寄て見るに、老くれて見もわする斗也。

* 16 都城本「頃」

* 17 都城本「まかせ」

* 18 県図本「泊の津」

* 19 県図本「陸丞」

* 20 都城本「辱も」

* 21 都城本「過ぬ」

* 22 都城本「相しれる者ありければ」

* 23 県図本「見るもわする斗也」

* 24 県図本「かはりつる」

正月十六日

暁過る比、今日は順風なりとて走出けるか、日のかたふくに任せて風かはり、やうく黄昏に及ける比、口恵良部島に着ぬ。夜明て陸に上り見るに、浜辺を過て坂あり。焼耐坂といふよし聞て笑に堪ず、

ふむあしのさたかならざるけわしさに焼耐坂とむへも名つけし

* 25 都城本「頃」

* 26 県図本「及ひける」

* 27 都城本「頃」

* 28 県図本「着き」

坂の上に番所あり。家居つゝきに寺あり。本行寺といふ。日蓮宗なり。

東路の遠き教やはるくくと八島の外に流来にけり

* 29 県図本「流れ来にけり」

正月廿一日

日も亭午に過る比、風よろしとて船出さんとす。同じく南海に下る船、あまた此所へ集居けれども、沖に曇りあり、風の象也とて一艘も出さず。船長を呼て如何んと問へは、是は春の霞なり、風にてはあるまし、とてやかて出す。雲かとまかふ白波に帆を挙げれば、船の飛ふ事矢を射るかごとく、俄に千丈の峯に登り、忽に千尋の谷に陥るかとし。人心地もあらてくるしさいふもさらなり。終夜ねもやられず、なやみもてゆくほとに、はるのみしか夜も千歳をふる斗なり。

終夜まどろむひまも波枕あくるもひさし春の短夜

* 30 都城本「辛午」

* 31 都城本「頃」

* 32 県図本「ある」

* 33 都城本「葉也」

* 34 都城本「あければ」

* 35 都城本「登」(「り」なし)

* 36 都城本「忽ちに」

夜の明るにつけて、名にあふあまみすか渡、山のこどくなる波より外は目にさへきるものもなし。

こしかたも又ゆくさきも白波のたちいもわかぬ曙の空

あくる廿二日のひるすき、やう／＼大島に着ぬ。今朝まで島影も見えさりければ、今程着くへきとはおもわさりし、など人

／＼いひ旬りければ、

おもひきや八重の潮路をはる／＼と今日此島に尋来んとは

* 37 都城本「見へさりければ」

* 38 都城本「着へき」

* 39 県図本「おもはさりし」

正月廿八日

人／＼にいさなわれ、爰かしこさまよひけるに、圃には松植廻し、木たち物ふり、故ありけなる草の庵に琴の音幽に聞へけり。さし入て見れば、七十に余る老僧の琴引さして迎へ入れ、都よりさすらへ来り、三十余りの春秋を此島にむかへぬといふも哀におほえて、明の日書て送りける、
逢坂の関路にあらぬ草の庵に琴の音色を哀とそきく
返し

松風のさひしきやとにおもひきやかゝる詞の花を見んとは

* 40 県図本「二月廿八日」

* 41 都城本「さまよい」

* 42 都城本「有けなる」

* 43 都城本「おほへて」

* 44 都城本「送りけり」

* 45 都城本「哀とはきく」、県図本「哀にそきく」

二月十二日

旅のやとりは海近くして、波の音聞ゆるほとなり。暁、ねさめによめる、

旅枕ねさめさひしき波の音に月はくまなく鳥もなくなる

* 46 都城本「なくなり」

白尾氏にまねかれ、終日かたのことくもてなされ、壁に富士の

自画あるを見て、酔に乘し筆を取り書付けける、

おもひやる倭の富士を今爰にうつす心のほとそはるけき

* 47 県図本「まぬかれ」

二月十五日

おほやけの仰うけ給はり島めぐりしけるあした、赤木名のやとを出るとて、

しはしそとすむも我屋の心地して出行今日は名残社あれ

* 48 都城本「名残り」

竜郷といふ所に泊りける夜、くまなき月にこく船の櫓声しきりに聞へければ、

すみわたる今宵の月に漕く船の櫓声もさひし春の海つら

此島の民は砂糖こしらへ貢しつゝ、米は

公の御蔵より給ふなる掟なりける。いつの比よりか、かたまし

きわさおこりて此事やみ、民のなやみと成けるを、公より仰

事ありて、今年よりふるぎ政にかへりければ、此所の民ともは

竜郷の御蔵にて米給り、飲ひいさむありさま、筆にも尽しかた

きほとなり。

にきわひはかまとの煙それよりも民のおもてにあらわれそする

* 49 都城本「今年ふるぎ政に」

あけの日、爰を出、嶮しき山を越へ、名瀬におもむきける。道すから、谷川を渡りて、

駒とめていさ水かわん深山路の細谷川の清き流に

* 50 都城本「趣き」

* 51 県図本「かはん」

* 52 都城本「なかれに」

名瀬に泊りける夜、湊江もひき渡る斗に声して船を漕来りける。何事そと問ふに、明る日、此所の御蔵にて米給ふなる、民共の、今夜船よりして来るなり、常にかわりて勢猛に匍るなり、といふを聞て、

常よりもきおふ船子の声くくりに君かめくみの深さしるけき

* 53 県図本「名瀬戸」

* 54 都城本「明日」

大和浜にて御蔵ひらきけるに、老たるも若きも、又女もあまた寄りつとひ米賜ひつゝ、俵負ひつれいさみ帰るを見て、

かしこしなおもきめくみを負ひつれてあしかろけにも帰るもろ人

宇検に着ける。昼のほとより、胸のいたみありてたえかたく、

あけの日猶やまさりけれども、くるしみを忍び御蔵に出て、民をにきはしける、

民草のなひきよろこぶ色見えて身のいたつきも忘れそする

* 55 県図本「にきわしける」

* 56 都城本「見へて」

赤木名よりは是までは地つゞきにて、谷峯あまた越来りける。是より船に乗り、加計留磨島といふに渡る。

我なからおもふも遠き日のもとの外の外まで尋来し身は

東間切の仮の宿は、海近く、殊に風さへつよく吹ければ、波の音すさましくねられさりける。

磯の波音すさましくふる郷にかよふ夢路の道や絶なん

* 57 都城本「けり」

嶮しき山を越、川に下り、川舟に棹さし、入江に出て住用に至りけるに、其長さ六尺には少しあまるへく見へたる丸木の中をうつろにして船となし、十斗なる童二人、髪の長さ尺にあまりたるをふりみたし、あたかも絵に書ける狸々に似たりしか、柴を積て湊江を漕ぎ渡るさまを見て、

如何斗あやしみぬへし是もまた人の子也といふを聞すは

* 58 県図本「越へ」

* 59 県図本「見えたる」

* 60 都城本「長サ」

三月五日

曙、瀬名を出、船に乗りて赤木名に帰る。

吹風はいつこもわかぬ朝なきに漕行船の櫓声しつげき

* 61 県図本「しつげき」

愿敬老僧、錦手陶器を送とて、

何かなと思ふ斗の心さし名のにしき手をいわぬさくくるといひこしけるかへし、

類ひなきにしきの色のそれよりもおくる心の花そ多ならぬ

* 62 県図本「いはひ」

同し人、病中述懐、

八重の島に身は捨なからやゝもすれは只九重の土と成りたき

とよめる返し、

一すしにのりの力をたのみなはこゝも九品のうてな成るへし

* 63 県図本「なるへし」

公の仰奉り島に渡けるに、五つのたなつもの実の事なく、竈の煙絶くなり。公の御蔵を開て民を賑しけるも、猶嫌らぬやうにおほえしかは、似けもなき事ながら、ふるき事もおもひ出し、五月中の五日、草の鞋の紐しめて、村巡りしける。家々への勞れいふもさらなり。腰打かけて足を休むる家なく、渴さへ忍ひ兼るほとなり。方屋村とかやいふ所に至りて、木たち茂りたる庭の面に塵かきすてたる跡あり。心にくゝ、さしのそき見るに、甘斗と見えし女のいやしからぬか布織居たり。一僕をして湯を乞はせければ、内にといふをたよりにさし入て見るに、垣生の小屋のいふせき、ほのかなる煙たに見えず。女出て隣の家に火を乞ひ、井戸の水汲などして、かたへの芥もやして湯を煮て出しけり。朝三暮四のなやめるさまなど、まめやかに問ふに、公のめくみ蒙し後は、朝夕の煙たに立たる事なく、磯の藻屑に飢を凌くなると語るを聞も胸塞る斗也。破籠のなかはとらせけるに、器に移してさしおきぬ。如何にと問へは、母なん一人もちたるか、今飢を凌ぐのいとなみに磯に出たり、帰し後にたまものゝ辱を拜ませてよるこはしめん、など打涙くみて語る。其詞ふつゝかなれと、はし／＼聞もいとあわれにて、破籠喰さしてとらせつゝよめる、

心なきさひすの島にかはかりも心ありける人のやさしき

* 64 県図本「承り」

* 65 県図本「賑はしけるも」

* 66 都城本「おほへしかは」

* 67 東大本「埴生」か。都城本・県図本「垣生」

* 68 県図本「さまなどまめやかに問ふに公のめくみ蒙りし後」を

欠く。

* 69 都城本「たちたる」

* 70 都城本「なり」

* 71 県図本「よろこはせしめん」

是より喜瀬村といふ所まで行へかりけれとも、粮尽て力なく、平村といふ所より帰りぬ。

けふことに人のなやみそ知られけりゆく事かたきおのかつかれに

* 72 都城本「所に」

* 73 都城本「しられけり」

六月六日

公の事とも沙汰し終りて赤木名を出、名瀬の湊にて船に乗ける。登世勝といへるかよみて遣しける、

いにしへの賢き御代に立かへり島もゆたかに末か末まで

波のうへさわりもなく出船をやすくや守れ住吉の神

とよみしかへし、

日のもとへ何かかきらん敷島の道は尽せぬやまと言のは

* 74 県図本「よみてかへし」

* 75 県図本「尽せんやまことの葉」

六月十五日

名瀬の湊に纜を解けるあした、名残おしむとて、日比したしみける島人ともあまた出て盃取出しけるか、目出度き都に登り給ひてはかゝる端島は思ひも出給はしといふを聞て、

立別れ雲みはるかに飛ぶ雁のあさりし芦間いかて忘ん

* 76 都城本「日頃」

* 77 県図本「替はし」

* 78 日比つかひ置し童、周次郎なりけるものゝ、大和までしたひ行
んとせしを、赤木名へとゝめ置けるか、船出すへき前の日、は
るけき山坂をひとり越来り、船出しけるあした、いとま乞して
帰さんとしけるに、しきりに打なき、したひゆかんといふもせ
んかたなく、公の掟もあれば、俄に官所のゆるし申なとして
ともないける、

* 81 したひ来るおさな心のすてかたくいさともなはん八重の潮路を

* 78 都城本「日頃」

* 79 都城本「迄」

* 80 県図本「ともなひける」

* 81 都城本「したいくる」

薪水を役せし者も、二人ながら爰までしたひ来り、あわれげに
わかれを告るもいと名残ありて、

わすれめや雲みのよそにわかるともかくまで深き人の情を

* 82 県図本「したり来り」

* 83 東大本、濁点ママ。県図本「あわれけに」

船出るに及ひては、何となく名残おしくて、

我なからおもふもはかな誰か為の名残とわかぬ今朝の涙は

* 84 県図本「名残り」

此所の長官喜温なりける人は、年比久しき病ふをうけ、助かる
へき身にあらすとおほへければ、船より下りてわかれけるを見
るも悲しくおもわれ、

哀なり是をかきりの別れとは知らてや人の立帰るらん

* 85 県図本「下て」

* 86 県図本「見悲しくおもはれ」

* 87 県図本「別」(「れ」なし)

六月廿日

亥報斗に前の浜に着ぬ。したしき人々、今日は船着なんとて爰
まで出て待居ける。打つれ家に帰り、たらちめのまめなるあり
さま、したしき人／＼のつゝかなきさま、よろこひあへるふし
／＼いふもさらなるへし。

幾千里千々に心を沖つ波立帰来る今日のうれしき

大島後紀行

己亥の春、ふたゝひ仰奉り大島へ下りける。七十に余るたらち
めの舐犢の愛いたくせちなるに、かたのことく身のいたつきも
おほへ侍れば、骨に肉する膏沢を嘆訴しけれども、王事靡盬か
さねて仰事有ければ、おそれみに堪す、畏りを申て、睦月末の
七日家を出るとて祠堂を拝しつゝ、

遠つ親のめくみならずは幾千里はるけき波路いかてわけまし

巳の刻過る比、船を出し、やかて帆をあけて走行ほとに、未の

刻には山川に着ぬ。

追風の心に叶ふ船出して八重の潮路もかくそあらまし

二月朔日

陸にあかりて開闢の社に詣ける。路すから鏡か池の辺に桜の一
樹枝もたわゝに咲乱れ、池に移けるを見て、

曇なき鏡か池に影移す花の色香そ世に類ひなき

山川にて、痘瘡をやめる平安の祈りとて、磯辺に飯の草ふきし、
女童六七十人寄りつとひ、衣服美を^{*2} 尽し舞かなてけるを、人
々^{*3} にいさなわれ見にまかてしか、余多の舞人の中には、やか
て疫神の奴とならんもあらんかし、かれはかくなんうたひかな
てしなといふも涙の種ならんと、過し身の上の悲しみにたくら
へ、楽みの興も尽て、見るもあわれのはしと成ければ、
哀^{*4} てふかへすたものたえなるも誰か家々^{*} や涙なるへき

*1 県図本「移たる」

*2 県図本「夜服美を尽し」

*3 県図本「いさなはれ」

*4 県図本「哀れてふ」

僕か乗ける船のあるしは此所の人なり。風待する船の内、佗し
かるへきとて其家にまねき、ねんころにもてなし、夜に入て母
と妻なん舞謡ひ、興を添ければ、しはしは旅の憂さをもわすれ
ける。

此宿の名残のみかは日の本の外の国までたとり行身は

母のふるき歌うたひけるを、感に堪^{*5} へすなみたまよほすほと
なり。

旅衣たもとにかゝる露けさはむかしをしたふ心ならまし

*5 県図本「堪えず」

*6 都城本「いたふ」

船中雨

霞^{*7} むとも降るともわかぬ春雨は筈よりくたる雫にそしる

*7 県図本「霞とも」

*8 都城本「くゝる」

二月十五日、順風を待得て南海に下る。人々の船、数あまた
艤して山川の津を走出けるか、心に叶ふ追手也と船子ともいさ
み旬りければ、

朝嵐真帆引つれてとも船のやすく千里の波路渡らん

島に着ける明の日、松林庵愿敬法師の、

別れても君か詞の花かたみ又咲春に逢そうれしき

といひこしけるかへし、

尋来てまた聞くへきとおもひきや松の林に鳴る鐘の音

松林庵の鐘の音、頃日聞得さりければ、童して問ひけるに、

思都花、

わすられぬ雲ゐの花を春の夜の夢になりとも見る夜しもかな
といひ越されけるかへし

思ふらんおき別にし故郷のはゝその森やなてしこのはな
年月をほと故郷やなてし子の花に露おくよその袖たに

三月三日

おもひやる千里の外や故郷の巴の字にめくる春の盃

暮春

夕附日^{*9} かたふく西の空はけに春の名残と見るも恨^{*10} し

*9 都城本「月」

*10 県図本「恨みし」

三月辰

所から猶おしまるゝ春のくれ又めぐり来る所ならねは

五月五日

かけて思ふ比しもさひし五月雨の今日ふる郷にあやめふくらん

五月雨降つゝきし夜、螢の飛かふを見て、此島にては何といふ
むしそと問へは、ひかり虫といふよし童のこたへければ、
五月雨のくらきやみ路をてらしつゝむへも名つけし光虫とは

* 11 都城本「飛ふを」

去年よりめくみある政に、民隙を得、農業を心のまゝにする辱
を報るとて、有屋中勝朝戸とかやいふ所の民とも宍狩してゑも
のをおくりけるに、

民草の深き恵みの世也*12そとよろこぶ色を見るぞ嬉しき

* 12 県図本「なりそ」

佐仁といふ所の民とも、貢物耕作し、猶隙を得、植置しとて、
西瓜をおくりけるによめる、

みつきするあまりのひまに植置しものとして送るわさのかし*13こき

* 13 県図本・都城本「かしこき」

秋の夕ぐれかゝる庵の淋しきに、田面に歌うたふを聞て、
聞からにあわれそまさる賤の男か秋の田面の夕ぐれ*14の歌*16

* 14 県図本「夕へくれかゝる」

* 15 都城本「哀」

* 16 都城本「うた」

九月四日、旅館を出て島めぐりしける。赤木名より船に乗*17て名
瀬に至る。船の中に実久村といふ所の仲順といふ者かたりける
は、我邑の民とも、上の政を歌に作りて、今年初春のあした家
ことに謡ひけるとかたるを聞て、

君か代のめてたきためし家ことにことふく民のわさそかし*18こき

* 17 都城本「乗りて」、県図本「乗て到る」

* 18 都城本「語る」

僕か名字をも作り入れて、徳のある人や、世の中の宝、幾世い
つまでもさたに残る、とうたふと語るを聞て、

おろかなる名も恥*19かしや家ことにことふく歌と聞につけても

* 19 都城本「作り入て」

* 20 県図本「恥しや」

名瀬に泊りける時、甘藷の大きなる、我国にては聞も及はぬほ
となるを、村々の民とももてきたり、此年比公役繁くして農業
に力*23を尽す事なく、年ことに貢を欠き、飢を告て救をもとめけ
るを、去年より政あらたまり、隙を得て、心の俛に業を事とす
るしるし見よ、と語りける。

今よりはみつきもかゝし年ことに民に飢たる色しなけれは

* 21 県図本「来り」

* 22 都城本「年頃」

* 23 県図本「に」なし。

めぐりゆく道すから、高き岡より深き谷に至るまで、甘藷植
つゝけたるさま、見るもめさまましきほと也。民の力を愛し、隙
を得る*25の政に心の俛に耕して二年の食を得たりとかたりけれは、
かしこしな君かめくみのすゑ遠く野山につゝく民のいさおし

* 24 県図本「いまるまで」

* 25 都城本「得たる」

年毎の饑饉に民食に飽事なく、野山にうへ置し物は夜毎に盗み
もてゆきしに、今年より五穀豊饒にして、菜の一もともぬすむ
者なしと聞て、

戸さしせぬかしこき御代のためしをも今目の前に見るそうれしき

十日越の夜雨、木草おろわしゆる島中おろわしゆるさへしかな

し、とうたふと語りければ、

なき名をもうたふと聞そかなしけれ人潤する道し知らねは

去年の夏、僕か帰し後は、高き岡に一字の堂作て、得能権現と

祭たきと島人の書たる文見し事有り。今年又聞く事有ければ、

及ひなき身に及ひなきことのはを聞もおそろし人のことくさ

* 26 県図本「帰りし」

* 27 都城本「ことの葉」

御目かねやつよさ鹿兒島の 屋形おみちよろのいちより民のう

るいと諷ふと聞は、上のあやまれるを諷するやとおそれみに

たえず、

あきらけき月の光も浮雲のかゝるに似たる身こそ悲しき

去年よりふるき政あらたまりけるを、歌作りて、上や道くを下

やもの知らず、今年世かはりに真米たちよると謡ふを聞て、

よこしまのおおきにかわる世の中を君の恵と仰くもろひと

* 28 都城本「なをき」

* 29 県図本「恵みと仰くもろ人」

住用を出て、船にて古見にわたる。高き岡より細き滝の海に落

る詠めに堪へず、

うつし絵もいかで及はん峯高きうへより落る滝の白糸

* 30 県図本「堪えず」

* 31 県図本「しら糸」

竜郷に泊りける日、此郷の民とも、僕か為に山に狩して徳政を

謝するといふよし、官長の語りければ、

めくみある世におふ島の民のみか我まてかゝる人のあわれみ

* 32 県図本「徳政に」

* 33 県図本「大島」

菊の花を手折て愿敬法師に送ければ、

見せはやと情にたおるきくの花身にも袖にも匂ふ一もと

よみこしけるかへし、

冬かれし葎の庭に咲菊も君か詞の色に匂はん

* 34 都城本「匂わん」

同し人の先立し娘、四十五年にあたると聞き、よみておくりけ

る、

おもひやるふりしを今にくりかへしけさは露けき人のたもとを

僕か書集たる落葉集を愿敬法師の見て、

埋木の落葉もすてすかきよせてあわれみ深き水くきのあと

いひこしけるかへし、

おもわずよかれきの落葉かきよせて紅葉の色と人の見んとは

法師又かへしとて、

枯木にも花の咲とは聞斗錦の色を初てそ見し

といひしかへし、

にしきとは何か見るへき霜かれて芥そつもる庭の紅葉は

擣衣

小夜更てうつや砧の音さひしね覚の床にひとり聞にそ

十二月廿四日、先立し子の忌日なりければ、何くれとおもひ

つゝけ、語りなくさむ友さへなければ、いとこゝちあしく、

歌よまんも涙のみ先立ければ、

思ひ余りいはんとすればかきくれて涙の外はことのはもなし

* 35 都城本「いわん」

此歌、等類あるうたかいあれと思ひあたらす。寒村、書に乏

しく尋索の便もなければ、その仮書付て後日を俟つものならし。

* 36 県図本「あたわす」

今年の冬、わきて寒強く、住用には雪降りける。雪は豊年の瑞にて、是や世替のしるし也などいひのゝしりければ、

今年よりめてたき御代におふしまの例も聞かぬ雪の降らし

* 37 都城本「聞ぬ」

庚子正月十四日の夜、後菌の茄子、色黄にして円なるか、幾らともなくなりつきを夢見し。茄子を夢見るは瑞夢とかや、俗にいひならはしければ、たらちめのよろこひ給ふへきものをとよめる、

たぐひなきめてたき夢ときくからに其たらちめに知らせてし哉

* 38 都城本「幾らもなく」

* 39 都城本「みる」

* 40 東大本、県図本は濁点原本のまま。都城本「たくひ」。

* 41 都城本「聞からに」

* 42 都城本「その」

* 43 県図本・都城本「しらせて」

* 44 都城本・県図本「かな」

二月十五日、松林庵を問ふ。老の身のならい、涙斗にて、と詞書して、

君に逢ふ今幾度とおしまれて名残に何と言のはもなし

といひけるかへし、

かきりあるわかれの袖におく露は深き情の誠しるけし

* 45 県図本「ならひ」

* 46 県図本「言の葉」

愿敬法師へ品々遣しけるに、

いつの時君か情をむくひんと思へは身をもくたかれにけり
とよみこしける返し、

むくひとは何かおもわんわかれても又逢までのかたみとも見よ

* 47 都城本「むくい」

同し人、

何かなとおもへと長の旅衣せめてゑにしをひもむすへかし

とよみて、胸紐を送られる返し、

むすひおふゑにしひの心ある人の情を見るそ嬉しき

* 48 都城本「かへし」

* 49 都城本「あふ」

三月廿日、島を出けるあした、多の男女、竹葉もて来り、涙流しつゝ別を送けるさま、いと名残有て見えし。

したふその心の奥も底深く汲や別れにめくるさかつき

* 50 都城本「見へし」

日比つかひなれし童ども十余人、船までしたひ来り、別れを告

て悲しめるさま、見るも中々あわれ也ければ、

したひ来る心そうれし別ても馴来し今日の契忘るな

* 51 都城本「したい」

* 52 県図本「馴れ来し」

旅衣けふ立わかれ逢事は定なき世のならひ悲しき

午の刻斗に船出、追風に任せて走もてゆく程に、宝島の西を過

て日くれぬ。二更にも及ひなん比より、雨降出て、風はけしく、

雲かとまかふ白波に帆さへことく吹損し、終夜なやみもて

ゆくほとに、あけの日^{*55}昼過ぎより風さたかならず、行へき方も
わきまへす、只風^{*56}に任て走るといふ。心ほそさいわんかたなし。
雨風のさわくのみかは行かたの別ぬなやみを如何にとかせん

* 53 県図本「ほとに」

* 54 都城本「頃より」

* 55 県図本「昼過より」

* 56 県図本「風に任せ走といふ」

* 57 県図本「心ほそき」

晚景、やうく雨はれ風やみ、船少しおたやかなりければ、今
は難なしなど船人のいふを聞て、島に在ける日、僕か帰る日に
は海路無難ならんかし、なんといひし事とも思ひ出て、
島人のいひし詞^{*58}よかわらすもやかてしつけき八重の潮風

* 58 県図本「詞に」

口永良部島に着て陸に上り、しはしかりのやとしける。いまた
明やらぬ比^{*59}、雉の声しければ、

月かけのまたほのかなる春の野にあさるきゝすの声そ聞ゆる

* 59 都城本「頃」

やとのあるし、空之助なりけるものゝ、いとねんころにもてな
し、いつまでもとまれかし、なといふも誠有りけに見えて、船
出しけるあした、夫婦打つれ、海辺まで出、涙くみける、いと
名残^{*60}有ければ、

ふる郷もいとなつかしき旅の空にかゝる名残も如何にとかせん

* 60 都城本「ありければ」

四月十六日午報斗に、江月川の下流に船着ける。子どもの迎來
り、たらちめも松原まで出給ふと聞て、うれしさいわんかたな

し。

沖つ波今日立帰るうれしさを何にたとへんたくひたになし

大隅紀行上

安永九年庚子秋、仰こと奉り、九月四日宿を出て桜島に渡り、
小池村といふ所に泊りける。軒端より嶺につゝきたる広野な
り。暁^{*2}、目さめてよめる、

旅のやとねさめかちなるよもすからまくらに近くすたくむしの音

* 1 県図本「九日」

* 2 県図本「目覚て」

あけの日、武の原にて鹿の音聞へければ、

暮またて鳴や小鹿の声さひし木かけもくらき山あなたに

名におふ桜島の絶頂、目の前に見えてさかしきありさま、高然

暉か写し絵にさも似たり、など人々のいひけるを聞て、

うつしゑもいかて及はん峯高く巖さかしきけふの詠めに

白浜より国分^{*3}の小浜へ渡る。海上去年より湧出せる島くあま

た見え渡り、中にも今年五月十日より出たる島、日く高く

広くなるなど人く語りければ、天平宝字のむかし、桜島湧出

せるなど書伝しはあれと、かゝるふしきを見ることよと思ひ

つゝけてよめる、

遠き世のむかし語りにきくのみと思ひもあへぬ島の詠は

* 3 県図本「国府」

* 4 都城本「見へ渡り」

* 5 都城本「つゝけよめる」

* 6 県図本「のみか」

小浜に泊りける夜、

旅枕夜ことなるゝくたかけの声にさきたつ老のねさめは

小田村の内にてつかれやすめかし、なんと人／＼のいひけるは
とに、とある家に腰打かけ庭のさま見めぐるに、東海道の駅な
とこゝかしこまなひうつし、ふつゝかなる歌を書付たる短冊あ
り。何ものゝわさそとあるしに問へは、老たる親の若きむかし
東にくたれるを思ひ出し、かゝるわさに月日を送る、と語りけ
れば、

年を経し旅路をうつす此庭によわひのは多ん老の行末

* 7 都城本「成」

* 8 県図本「よはひのへゑん」

獅子尾山正福院、真言宗の寺也。馬頭観音堂あり。堂の左に空
順入定の石室あり。空順は隅州或云羽月或云の人也。^{*10}坂本氏。天和年中、
大玄廟、二階堂氏の女關室院殿を最愛し給ひ、^{*11}孕めるに及んで、二
階堂氏、華林寺法印に因て、男子の生れ給わん事を祈る。産す
るに及て男兒也即吉貴公也。空順は法印の法孫也。正徳中、年六十
余、入定して国家安泰を祈んと請ふ。免されて入定の地を桜島
に給ふ。又獅子尾山に免さる。

吉貴公の側室於須磨の方、石室を作らしめて空順に賜ふ。順、
是に入て死す。其事の是非は論するに暇あらず。死も亦人亦の難
き所、国家の為に死するといふ其志は憐むに堪たり。故によめ
る、

おしむへき命も君か為そとてかろくすてにし人のあわれさ^{*13}

* 9 都城本「有」

* 10 都城本「坂元氏」

* 11 県図本「孕めに」

* 12 県図本「又」

* 13 県図本「あはれさ」

九月十日、八幡宮に参る。^{*13} 応仁天皇を祭て八幡宮と名付奉る
は、此社を以、最初とす。左右は神功皇宮と竹内大臣を祭り、
一宮は彦火々出見尊、豊玉姫を祭るとなんいへり。
かしこしな思ふも遠きむかしより今にたえせぬ神の宮居は

* 13 都城本、闕字なし。

* 14 都城本「たへせぬ」

内村辻の堂の傍に泊ける夜、

都出てゝまだ日数経ぬ旅ねにも秋の夜寒の風そ身にしむ

* 15 県図本「泊りける夜」

* 16 都城本「出」

* 17 東大本、濁点ママ。都城本「また」

国分郷は見所多き所なり。道すから所々見侍りて、
名所のかす／＼多き此里はわしの尾山や獅子の尾の寺

年久しく相知れる人の此里に有りけるか、僕か此所に来れると
聞て、雪の晴晴といふ酒を送りければ、

心ある人のめくみにうき旅のうきをわするゝ雪の晴^{*19}

* 18 都城本「曙」

* 19 都城本「曙」

内村のなげきの森は、代々の集にもせられたる名所なれば、
かくそよめる、

名にしおふなげきの森に吹風は心なき身も哀とそきく

同じ村の気色の森も名に高き名所なり。立ち寄見るに、森の中にしき社有り。天神宮と額有り。是、菅家にはあらず。天神七代の神を祭れるとなり。

秋風のけしきの森そたゝならぬ哀知るへき身にしあらねと

* 20 県図本「立寄り見るに」、都城本「立寄見るに」

* 21 都城本「有」「り」なし、県図本「なり」

* 22 都城本「也」

* 23 県図本「たゝならん」、都城本「たゝならね」

向花村の内に腰かけ、しはしやすみける。宿にて、人々歌よめといひければ、たわふれによめる、

色香にもめつる心のありもせは出てうかるへきやとりならまし

野口村の田間に伊集院下野守久春入道抱節齋の墓あり。抱節は

貫明廟、松齡廟に仕へて武名高き人なり。

なき跡のしるしのみかは武き名を残すや世／＼のかたみならまし

上井村にとまりける夜、月のくまなくてらすを見て、

ふる郷の空もかくやとてる月にあわれもふかくふくる秋の夜

敷根脇元村といふ所に泊りける。淋しき宿なり。

ほのくらき木かけの庵の夕けふり立もさひしき旅の詠は

* 24 県図本「あはれ」

* 25 都城本「云ふ」

* 26 都城本「けむり」

九月十三夜、福山大廻といふ所にて月を詠て、福山といふもしをこめてよめる、

名にしあふ後の今宵に嵐ふく山より出る月のさやけさ

* 27 都城本「詠めて」

* 28 県図本「文字」

* 29 都城本・県図本「おふ」

* 30 県図本「吹く」

九月十五日、恒吉長江村に泊る。支干三めくりのむかし、庚子の今日は濃州関ヶ原の役あり。思つゝけてよめる、

くりかへしむかしを忍ぶ百年に八十をそふる今日の月日は

* 31 都城本「泊り」

下高隈に泊りける時、老女を見て、

八十八また逢事はかた糸のよるへさためぬ身社悲しき

八十八老そかなしき立わかれまた逢事の定めなければ

九月廿二日、鹿屋郷の原といふ所にて、雨ふり、心ならず三日

此所に止り、旅の勞れ休めける。

秋もはやなかなはずきぬる山里にくるゝ夕への雨そさひしき

* 32 都城本「過ぬる」

明日は日和なるへし。今宵斗の名残なるへしとて、やとのあるし、さゝまふけて、十二三斗の女わらへ三人出て舞諷ひける

も哀におほえて、

見るからにあわれそまさる老の身はたのしみぬへき袖のかさしも

* 33 県図本「舞ひ諷ひける」

* 34 都城本「おほへて」

* 35 都城本「哀そ」

大始良浜田村にしはらく休みける。庭に梅の立木の常に異なる有けるを見て、

おもわすよ賤か柴家の庭もせにかゝる立枝の梅を見んとは

* 36 都城本「おもはずよ」

同じ所、横山村にとまりける夜、暁より雨ふり、板戸さしこめて夜の明るを知らず。鳥の声を聞いて、

鳥鐘もなき山里はあけかたをねくらからすの鳴音にそしる

* 37 都城本「しらす」

* 38 都城本「明かた」

同所麓にてよめる、

村しくれ小山の峯にあらわるゝ一木の紅葉染て色こき

* 39 県図本「あらはるゝ」

大根占鳥浜に泊る。終夜波の音はけしかりければ、波の音はけしきやとはふる郷に通ふ夢路の中や絶なん

* 40 都城本「宿は」

鳥浜より城元村まで通る海辺、開聞嶽、桜島見ゆる。桜島の形、富士に似たりければ、

名に高きうつほより猶桜島是そつくしの富士といふへき

小根占に泊りける夜、朽木検使奥山氏、酒を恵まれば、あるしの女の酌に出けるに、小歌一ふしと客の請われける。言下

謡ひ出したる、感慨深く覚えて、

何となく見聞につけてあわれさのまさるや老のしるし成らん

* 41 都城本「めくまれければ」

* 42 県図本「なるらん」

小根占より佐多に通りにける。海辺は辺田村といふとなん。開聞の嶽、海こしに見えて富士にさなから也と人々のいひければ、

今ぞ知るむかしの人の心有てむへも名付しつくし富士とは

* 43 都城本「よ」

* 44 都城本「見へて」

僕は頓阿法師か草庵集を愛し、羈旅にはいつもたつきへて、ねさめの友としける。今夜も亦、小夜更、目さめければ、灯かゝ

けてよめとも、文字さたかならず。集をさしおきてよめる、

老はうし世の交や水くきのあとさへうとく見るめかすみて

* 45 県図本「目かすみて」

佐多の岬へ詣てゝ、

我国のかきりのみかは日のもとの西のはてとはこゝをいふらん

小根占より佐多へ越ゆる山坂、大難所也。馬、駕籠用ひかたし。

佐多は猶嶮岨にて歩行なやみつよし。殊に波高ふして舟行も亦難し。小根占より岬までは東風にのみ舟をやる。岬より竹浦へ

至るには西風にのみ舟をやる也。辺田に泊りける夜は、西北

の風つよく、白波巖を打てすさまじし。夜明て見るに、東風吹出て水面床に座するかことし。三日舟行して岬に至る。今夜、大

泊にとまりける。明なほことなる嶮岨を越ゆへきと人のいひけ

るを、心くるしく思ひしに、夜明て見れば、夕へまで雲かたまかふ白波も西吹風にかわりて、海甚平なり。又船にのりて竹の

浦に渡る。

天地のめくみもふかき旅の空は東風吹風も西にかはりて

* 46 県図本「山越」

* 47 県図本「片浦」

* 48 都城本「と也」なし。

* 49 都城本「至り」

* 50 都城本「迄」

* 51 県図本「かわりて」

佐多間泊より竹浦へ越ゆる陸路、高き山坂を越て難所也。磯辺

一帯の径路有り。石の上を飛び渡りゆく。^{*52}其間巖聳へ足踏所なきを十歩斗行く。上八十丈に余る絶壁、下は深さを知らぬ青海なり。船より見るか内に二人爰を通る。戦々兢兢の古詩^{*35}おもひ出て、

おもひしれかしこき人のおしへそと今の心をわすれすもかな

* 52 県図本「あり」

* 53 県図本「行く」

* 54 県図本は「其間巖聳へ足踏所なきを十歩斗行く」を欠く。

* 55 都城本「思ひ出て」

竹の浦にて

四つの海八島の外もおさまりてすくなるよの竹の浦なみ^{*56}

* 56 都城本「よしの」

竹の浦より郡へ越ゆる道すから、少し斗の人居あり^{*57}。何といふ所そと問へは、ふるさとと答ふ。

日数経し旅路を悲しふるさとの名もなつかしく立とまりつれ

* 57 都城本「有り」

* 58 都城本「ふる郷」

田代川原村花瀬あり。無双の景なり。川の流十町、横一町に少し足らぬほど也。一面に見えて高低なきかことし。水の深さ二寸に過す。兩岸樹木茂り、さゝ波立たるさま筆も及ひかたし。川下、流急にして白波雪の積るかことし。

うつし絵もいかて及はん世の中のたくひはあらし瀬々の川波

* 59 都城本「見へて」

* 60 県図本「如し」

花瀬川雪かたまかふ白波に紅うつすきの紅葉は

染尽す千しほのもみち色そひて見るめあやなす瀬の白なみ^{*62}

* 61 都城本「そいて」

* 62 都城本「白波」

大根より始良上名へ越ゆる。谷川有り。左右巖嶮しく、景最よし。

谷川の清き流に景うつす紅葉や秋の錦ならまし

始良鵜戸権現へ参る。鵜戸は山岡の谷合なり。窟は葺不合尊の

靈廟也。神代卷吾平山上陵に葬るといふ、是也。窟の広さ百二十坪といへとも、十年前崩れ落て、今は五十坪もあらんかし。

中央に井のことき穴あり。三十尋におよふといふ。其上に石を渡し、高さ五六尺の社を立つ。明和中、

公命有て、社を窟の前、川を隔て立られたり。社の傍、絶壁深

渚奇々怪々なり。西行かむかし思ひ出て、

何となく袖そしほるゝけふこゝに遠き神代のあとを尋て

* 63 県図本「尊廟」

* 64 都城本「上陸」

* 65 県図本「昔」

始良の田間にて、雁の一行鳴渡りければ、

秋深み田面の雁の声聞はあわれさ増る旅のほそ道

* 66 県図本「田間に」(「て」なし)

夜ことに暁かたより目さめ、越かた行すへ思ひつゝけるか、先たちし子のあはれ思ひ出て、

年を経し老のねさめの悲しさは其折にしもかはらさりけり

* 67 都城本「暁方」

* 68 都城本「行す多」

通昭録卷之四十七

落葉集 三

* 69 県図本「先立し」

* 70 都城本「あわれ」

* 71 都城本「へし」

* 72 都城本、県図本「かわらざりけり」

高山後田にてよめる、

旅枕ねさめの床に小夜ふけてたえぬかけひの音のさひしさ

一むらしけりたる青山の中に紅葉のこゝかしこ見えける。^{*73}

うすくこくそめし紅葉の色／＼を常盤の山に見るそゑならぬ

* 73 都城本「見へける」

後田村中原を出るあした

しはしとて立寄る飯の宿もけさ出るにおしき名残なりけり^{*75}

* 74 県図本「中原出る」(「を」なし)

* 75 県図本「也けり」

【頭書、朱書】以□十一□

大隅紀行下

高山新留村に泊ける夜、折々時雨して徒然也ければ早く休みけるに、あるし夫婦、僕か夜ことに宿移りして昼のつかれなど語りあひ、あわれ明日は終日小やみなく降つゝけかし、明日の夜まで此やとにとゝめて数日のつかれやすめ奉らん、などいふを聞て、

かりの宿にとめしとおもふ心にもとむる情の深さをはしる

いまた暁ならざるに、目さめいねられさりければ、

旅枕夜ことなるゝ暁の鳥の八声を待そ久しき

野崎村の道の辺に古き塚あり。何人のしるしそと問ふに、知る人なしとこたへければ、

草深き道のほとりのふる塚は誰かなき跡のしるし成らん

波見浦に知る人あり。僕かかりの宿に來り、己か家は、汀に臨み、折から秋の月の波間より出るを見せなんと、わりなく聞えけるもいなみかたく、人／＼と打つれ其家に至れば、高隈山、串良の松原、志布志、福島、一瞬の間に見へつゝき、名におふ

高知穂の嶽、雲間に遠く見へたり。あひきする海人、磯打波は近く、眼の前にさへきる。暫く有て月、福島の上より出、海上

一面昼のことし。あるしの親しき者也とて、二りの女出て琴引けるもいと興有て見えし。

てる月のなかめもよしや此宿に琴の音色を聞そ妙なれ

高山より内の浦へ通るに、辺田といふ所より能登の太守内藤君

てる月のなかめもよしや此宿に琴の音色を聞そ妙なれ

高山より内の浦へ通るに、辺田といふ所より能登の太守内藤君

てる月のなかめもよしや此宿に琴の音色を聞そ妙なれ

高山より内の浦へ通るに、辺田といふ所より能登の太守内藤君

てる月のなかめもよしや此宿に琴の音色を聞そ妙なれ

高山より内の浦へ通るに、辺田といふ所より能登の太守内藤君

てる月のなかめもよしや此宿に琴の音色を聞そ妙なれ

高山より内の浦へ通るに、辺田といふ所より能登の太守内藤君

てる月のなかめもよしや此宿に琴の音色を聞そ妙なれ

高山より内の浦へ通るに、辺田といふ所より能登の太守内藤君

てる月のなかめもよしや此宿に琴の音色を聞そ妙なれ

高山より内の浦へ通るに、辺田といふ所より能登の太守内藤君

の知り給ふ福島近く見えければ、

我なからはる／＼来ぬる旅路かな人の国をもまのあたりにて

内浦高屋大明神は彦火々出見尊の靈廟也。陵は山上国見嶽に在

り。社の傍、景行天皇行在所の跡あり。社に詣てよめる、

忽にしあへはふるき神代の跡とめてかたしけなさそ身にあまりけり

串良下小原村にて紅葉のすくれて色こきを見て、

千入とは何かかきらん紅のもへたつ斗そめし紅葉は

*1 都城本「紅葉」

笠野原にてよめる、

はてしなく見る目もかすむ笠野は是や筑紫の武蔵の原

串良の内有里村に泊ける夜、あるしの父母也とて年老たるか、

宵より出て何くれと物語し、旅のうさをなくさめけるほどに、

小夜ふくるほどになりぬ。

年月をふるともいかておするへき今宵かりねのやとの情を

*2 都城本「程」

*3 都城本「程」

庭に菊の残れるを見て、

庭もせのまかきにさける白きくも薄紫に色つきにけり

大崎の内野方といふ所にて、人／＼の足休めん^{*4}とて腰打かけし

やとのあるし也ける女、いとさか／＼しけなるか、何くれとい

ひもてなしつゝ茶もていてたるさま、興有て見へし。是は奇応

丸といへる女也といふ人有ければ、女ほゝ笑て瀬戸の松風とい

ひけるによめる、

松風は須磨のうらはにきくのみか今は野方の里も名高き

*4 都城本「休ん」

野方の内中の村といふ所にとまりけるに、あるしの女は何方よ

り来れると問ふ人有ければ、志布志野上よりといふ。班女の縁

語にてはんと名つけりし^{*7}なんと、人／＼たわむれけるによめる、

東路のそれならねともふる郷は野上の里ときくそゆかしき

*5 都城本「処」

*6 都城本「泊り」

*7 「か」と詠むべきか。都城本「かし」

松山にて山あいの細道を通りけるに、賤の女の馬を引て通るを

見て、人／＼天人か^{*8}とたわふるを聞てよめる、

しつ^{*9}の女と見るもあやしき松原に衣ぬきおく天つ乙女か

松山新橋村水田地といふ所にとまりけるあした、霜白して雪に

似たり。ふる郷にて見たる事もなし。あるしの女、埋火してさ

むさふせかせけるに、はや出立んとて人／＼さそひ来ければ、

霜白き水田地の里の今朝は実立さりかたき埋火のもと

日向国宮崎といふ所に悪七兵衛景清の墓あり。法名を水鑑景清

居士といふ。目の病ひを祈ればしるし有といひ伝へ侍る。末吉

中野内村に同じ墓有て、同じ事をいひつたゆると聞き、墓に詣

てよめる、

なきからおさめしかたはいつくそと二つのしるし誰に問まし

かりのやとりに帰り、思ひつゝけま^{*10}とろみける夢に、こゝそま

ことのしるしとは見よといひけると見て、夢さめぬ。奇異の事

になんおほえければ、かくそ上句をつきける、

かけきよき水の鑑はすへよしのこゝそまことのしるしとは見よ

同じ郷、南郷村の内、神代の古跡桜谷あり。野岡の谷合なり。

苔むしたる巖石数を知らず。むかしは巖をくゞりて通る。近年

崩れ落て巖の間に木を渡して通り、石の間鉄の鉾を立たり。夏は水流るゝとなん。今ハ水なし。それより村を過ぎ、諏訪^{*9}方村に至る間、憶原有り。寛保中、新に社を造営有けると也。小戸の池ハ社傍に在り。橘嶽はま近く見ゆる。上つ瀬、中つ瀬、下つ瀬など遠からぬ^{*10}ほと也。

かしこくも神代のむかしとめくれは濁れる胸もすむ心地すれ

* 8 都城本「也」

* 9 都城本「諏訪方村」

* 10 都城本「程」

是より住吉大明神に詣る。是、日本最初の住吉明神也。喬木森々として神さひたり。神主小野某、社内より一匣を出し封を開けは、

貫明廟、慈眼廟しはく住吉に詣て、奉納の和歌、島津忠長、

喜入久正、阿蘇玄与、伊十院抱節等の歌など記せる懐紙、短

冊、伊勢貞昌、理心等の唐うたもあり。

いや高き神を仰きてもろ人の心をみかく大和ことの葉

* 11 都城本「た」

* 12 都城本は闕字にする。

財部に至れば、霧島嶽近く見ゆる。

都出てはるかに遠き高千穂のすそ野も近くめぐり来にけり

福山小廻の原は、右馬頭忠将 国家の為に命を捨て給ひし所也

ければ、

過し世にはたてなひけし此野へはけふふく風もわきて身にしむ

小廻の坂を下るに、御蔵^{*13}に貢する民のおふさぎるさ、道もわつ

らふほとなりければ、

道ひろき世にあふ坂のせはきまてみつきするなるわさそかしこき

* 13 都城本はこの上を闕字にする。

勸農紀行

安永庚子冬、勸農使の 命を奉り、村巡りして仰こといひ伝へ侍る。辛丑の睦月末つかた、又巡りて小野に至る。賤の男か田面に立ならひ、力を尽せるさま目さましきほとなり。村の長に尋れば、有かたき仰こと承り、老となく若きとなくなすわさのおこたりな^{*1}さ、是よりさきなき事也など語るを聞て、

かしこしな君かめくみに民草のなひきしたかふ御代の田面は

* 1 都城本「なき」

犬迫にとまりし暁比より目さめたりしに、松原山の鐘かすかに

聞へければ、

山いくへへたてし里に聞ゆるなるあけかた近き鐘の淋^{*2}しさ

* 2 都城本「麻しさ」

東の岡にきゝすの隙なく鳴ければ、

朝霞立こめにける岡の辺に妻こひ侘てきゝす鳴なり

うくひすの声を聞て、

吹風はまたさへかへる朝の間に長閑き声や谷の鶯

宿の後なる藪陰に梅の咲乱たるを見て、深山幽谷花自紅也と打

吟しつゝ、かくそよみ侍る。

白妙に咲く梅かへは深き山かすかの谷も色はかわらす

小山田の滝は高さ三丈五尺斗、岩の間より流落て絶景いふもさ
らなり。

音にのみ聞て久しき此里にけふたつねくる滝の白糸

安養寺といふ寺の辺に年経たる赤松あり。枝葉繁茂して類まれ
なるへし。詠めにたえずしてよめる、

かく斗ひなの山里つれなきに一木の松の色そことなる

比志島に桜島古里といふ所より移り住む家居數十あり。立寄て
世渡りのいとなみを問へは、もとの住家よりはよきかたなりと
いふを聞て、

移来ていかてわすれんふる郷を渡るに安き浮世也^{*3}とも

*3 都城本「なり」

華野村に泊りける夜、暁告る鐘の音を聞て、

山遠くほのかにひく鐘の音は我故郷と聞そ床しき

*4 都城本「古郷」

吉野に泊りけるやとのみきり左り、山しけり淋しき所なりけれ
は、

山里はかりのやとりのしはしにも世をのかれぬる心也けり^{*6}

*5 都城本「麻しき」

*6 都城本「ける」

宿のあるしは四十斗のおのこ也。六十に余る母あり。二人の男
子あり。父は家まつしく早く身まかりし。子なかりければ、今
のあるしか六つになりける時、養ていつくしみ、今に和らき、
むつましく、人にすぐれて家業おこたりなかりしかは、富栄へ
て、今は吉野に二人といへる富家也と人の申ける。あたらしく
家作りして潤^{*7}ありて見えしかはよめる、

おもわすよ今宵かりねのやとにまたかく道しあるわさを見んとは
あまさかるひなのおくなる賤か家に道ある人をみよしのゝ里

*7 都城本「潤有りて」

坂元村の内、河添といふ所に垂水候の別業あり。下田、吉野に
境ひ、周廻三里、吉田、華棚の境、川の流れ、別業の中を通り
て実方に至り、末ハ戸柱に出て海に入る。川に添て仮屋あり。

狭からずして奇麗なり。内に入て見るに、塵受に鶴の作り物を
掛られたり。其後に大盃の一尺斗なるを挿めり。画ける日鶴の
形なり。床の脇に朽木に薦を敷かき、匂もかけり。又、朽木の
額に須磨浦を敷かき、金の苦船、銀の月も有り。壁に銅鑼をか
け、手水鉢の上に大木魚の二つに割たるを掛けられたり。水
辺稻荷社、山神祠あり。庭に楓、桜多し。川の後は深山のこと
し。坂本村田地も見ゆる。絶景筆も及ひかたかるへし。かくな
ん申侍る。

心有りて住なすわさそかしこけれこゝは深山の奥とみるまで

*8 都城本「之」

*9 都城本「割れたる」

*10 都城本「坂元村」

*11 都城本「ありて」

下田村にとまり帰るあした、よめる、^{*12}

日数をも経ぬ旅ながら旅なれば家路に帰る今日はうれしき

*12 都城本「泊り」

*13 都城本「語る」

郡元村一之宮大明神は一条宮と申とかや。開闢宮を勧請し奉る
となん。華表の額は登竜先生の筆なり。古より宮居しめて樹々

の梢も高く枝葉茂り合て、農業のさわり多かりけれども、神のとかめを恐れて枝伐る事もなかりしかとも、民の政あらたまり、農事を勧め給ふなる旨を神に告て民に令しけるにそ、おろかなる民も初て安堵して、斧を振り枝伐る事になりぬ。

かけくらくしける山も今年よりあきらけき世を神や知るらん^{*14}

*14 都城本「覽」

吹風になひきしたかふ民草のかしこき世社神も守らん

一之宮の北に鶺鴒權現社あり。隅州始良の鶺鴒權現を祭れるにや。鶺鴒は鶺鴒草葺不合尊を祭て神代三陵の一なり。爰の社は草の庵、幽なる宮居なれとも、祭て年経たりと見えて、めぐりの樹木鬱然とし田畠の間にはひこり、許多の農畝の障となれとも、神のとかめ甚しとて枯たる枝たに伐る事なし。下民のおろかさ諭すに道なく、僕、宮殿に登り拝礼して神に申す。勸農氏越智通昭 公の命を奉し、村里を巡て農政を授く。今、神の所在山林繁茂して田畠の害をなす。下民、神威を恐れ、枝伐る事なし。夫、神は直にして曲らず。正して邪なく、国土を護り^{*15}民人を恵む。樹木を吝み民に禍するの理あらんや。故に、昭、今農政の為に樹を伐て害を除く。神以て照鑒せよ。祭終て里民に告く。於是、樹を伐る。

かけくらくし山へも今はあきらかに神と人とのへたてあらしな

*15 都城本「守り」

中村金光院に至れば、住侶もなく、門は柱のみ立て扉もなし。

庭に葎しけり、軒の梟鐘は撞く人もなし。

いらか落ち扉破れし古寺は折たく柴の煙たになし

寺の前を過ぎ、北に廻れば雀か宮有り。いかなる神を祭るを知

らす。社の傍に古池の跡有り。池中、唐船の帆柱といふ朽木あり。近年、竹藪茂りて見えす。此所は古の湊にて、唐船を纜きたりとして、唐湊と書てとうしよと呼となんいふ人有り。此所、富民あり。周某といふ。若きより農官に充られ、今年七十、初て免ざるといふ。宅辺、桜の大樹多し。世に稀なる大木なり。花開けて見るにたえたり。

おもわすよ幽にすめるか山里にかゝる色ある花を見んとは

*16 都城本「あり」

*17 都城本「あり」

荒田八幡宮は兩部習合の神道より男山八幡と同しく、大茸の仏号を称しけるは、浮図氏の妄談なりかしを、近世唯一の昔にかへり、本田出羽守親盈、都に登り伝へ歸りて後、八幡三所皇大神と称すとなん。昔は鹿兒島の宗社にて、宮居も広く大にして鐘樓も有しを、中古肝付氏か乱に鐘も盜さられて、ふたゝひかへる事なし。華表の前には松の并木有り^{*18}。祭礼に鎗流馬有り。并木の跡も近世まで残りしと、井上宮内某か語りし事あるよし^{*19}。かしこくも昔にかへる神の名にあふく御影の松の木高さ

*18 都城本「なりしを」

*19 都城本「あり」

*20 都城本「ありし」

あら田の田面より四方を望めは、北に 国城あり。東に桜岳あり。南に根占の高山、西に摩利支天の岡間近く見え、華尾山、比志島の三重嶽、名にあふよしの山、遠くは高千穂の嶽、高隈の山／＼につゞき、詠めにたえす。

春霞^{*21}たな引空に遠近の山はかくとも筆も及はし

* 21 都城本「棚引」

* 22 あら田川にて、一つ橋を渡るとて、

世を渡るとへはかくといにしへのかしこき人の教にそ聞

* 22 都城本「荒田川」

四方のさくら花、咲も残らずちりもはしめすといふ斗見えければ、

山／＼も里にもさける花はけに昨日にけふや盛ならまし

* 23 都城本「事」

武村にて雨降ければ、晴を待ちし、なんと人／＼のいふを聞て、
ふる雨にぬれていとわす行道は晴るゝ其間を待もやられす

* 24 都城本「濡て」

青木の森にて、

春雨に青木の森を吹風はつらぬきとめぬ玉やちるらん

* 25 都城本「散らん」

寿国寺は享保年中近江の僧玄黙か建る所なり。黄檗派の禅宗にて、一超直入の教を本として、遠きにゆくか近きよりし、高に登るか卑きよりする道を尚はさりしかは、戯によめる、

迷ふへきつゝら折なる山路をはたとらて峯に登るかしこさ

* 26 都城本「也」

* 27 都城本「高きに」

西田村山王社は江州坂元の山王を祭れるにや。坂元は二十一社、
国常立尊を始め、上古の神／＼二十一座を祭るといふ。宮居間
近き民家にしはしやすらいけるに、男女あまた千度参詣しける
を見て、

何事の願ひ有てやかきりなき遠き昔の影したふらん

* 28 都城本「やすらひ」

* 29 都城本「跡」

原良村の奥に、田中氏なる人の故有て閑居しけるを尋まかてける事ありしに、草の庵に世を侘たる住居して木石を友としけるか、世を去て廿年を経つらん、跡を問へは、今は民家と成りて木石も跡かたなくなりしかは、

春雨の雫のみかはなき人をとふに涙の露そ置そふ

* 30 都城本「まかりける事有しに」

小野村鬼か谷といふ所に観音堂あり。如何なる者の立たるを知らず、初は微にして詣て来る人もなかりしに、近年故なく参詣多し、此堂、東に向ひければ、三月つゝひて大なれば願ひ叶るいふ事あり、今日其終りの日也とて男女引もきらす、いかに仏の神通耳にても、もろ人の願聞もわけ給はし、など人のいひければ、たはふれによめる、

めくみある法の為とて詣て来る人の願をむなくもすな

* 31 都城本「有り」

* 32 都城本「読る」

心たに誠の道に叶ひなはいのらすとても神や守らんと社いふなるに、おのか心の誠は問わすして、なくさみかてらさまよひ来り、欲にまかせて折るとも何のしるしかあるへき。いのれたゝしるしはありとまよひぬる心ひとつを知らぬおろかさ
仏神おのか心にあるものを外にもとむる人そかなしき

* 33 都城本「悲しき」

皆房村にとまりける。宿は巖島大明神の立給ふ山のもとにて淋しき所なり。五月雨降くらしたる夕かたよめる、

問ふ人もなき山里の夕くれにはれまも見せぬ五月雨の空

* 34 都城本「読む」

あけのあした、申西の方に当りて滝の音聞ゆ。やとの女のいへるは、川田の滝の音聞ゆれば雨晴といひ伝へしとなん。雨は西風*35に晴るゝゆへなるへし。

けふ幾日ふりつゝきたる雨なれば雲吹はらへ西の朝風

* 35 都城本「故なるへし」

巖島明神に詣てゝ見るに、二社相ならふ。左は鎮守大明神、右は巖島明神也。安藝の巖島を勧請せるにや、里人も知らず。

おもわずよ遠き海山へたてぬる宮居をこゝに拜むへきとは

* 36 都城本「思はず」

岡の原に越るとて坂を登り、一木の松のもとにしはらくやすみて、

つれもなき野中の松を吹風は夏こそなけれ音聞てたに

華野にて郭公を聞て、

夏ふかみしけき端山の木の間にほのかにもらす山時鳥*37

* 37 都城本「郭公」

小山田に着けるに、いまた日も高く、くるゝを待わひけるに、絶す蟬の申しければ、

鳴く蟬の声なかりせは友もなき此山里をいかてくらさん

萩の別府といふ所にて、木かけもくらき谷かけに草の庵むす

ひ、ゆへ有けなるを見て、

夏ながら夏はよそなる谷かけにかすかにすめる宿そ床しき

よしのにとまりける夜、よめる、*38

草枕むすべはいとゞ秋の夜のおくるもおそし老のね覚は

* 38 都城本「よし野」

* 39 都城本「読む」

川上村川添院の辺、樹木茂りたるもとの巖の間より、いつみわき出て多くの田地を潤しける。立寄、いつみのもとにしはしやすみて、

かけくらき老木のもとの岩間より清水もりくる音の涼しさ

* 40 都城本「湧出て」

久しく雨降らさりければ、五つのたなつもの日かれすると、賤の男かいたく悲しむを、巡りゆく村ことに見聞につけて、能因法師か伊予国にて、国の守雨祈れと申ける時、

天の川苗代水にせきくたせあまくたります神ならば神

とよみて、一の宮に参らせければ、大雨三日やますといふ事を思ひ出して、

せきくたすためしもあれば今も猶民をめぐみの雨を待見む

* 41 都城本「伊予の国」

とよみてやすみける。暁の比より、雨*42ふり出て、あけの日もしきりにふりつゝき、川水漲り流れて、五月雨の比に似たりと人々よるこひ旬りける。けふは上伊敷より犬迫に越ゆへかりしを、水増り、風さへつよく吹もてゆくほとに、むなしく上伊敷に止りぬ。雨は造化の然らしむる所にて、人のよくするものにあらず。こと／＼しくいひ伝ふる雨乞のふること、間には感応の理もあるへけれど、多くは僕か歌*43よみしことく偶然なるへし。只に名聞を求るの徒、偽妄の説を作為して世を欺く事なん多かるへし。

今そしる世に伝ぬることくさまかならずとしもたのむましきを

通昭録卷之四十八

落葉集 四

安永十年辛丑の春、

国の守の東より下り給ふ。御迎として、多くの馬、人を具して肥後国水俣といふ所にいたる。路すから折にふれていひ出したる、ふつゝかなるいやしきことを書つらね侍る。明目の人の見給は、笑ひ草の種なるへけれど、しはし旅の興に乗するのみなり。

苗代川を通けるに、十年のむかし

国の守の東より下り給ふに従ひ奉り、此所に泊りけるを思ひ出しけれども、そのやともわすれはてければ、

一夜ねしかりのやとりも年へては尋問ふへき跡かたもなし

*1 都城本「経て」

市来にて海道かわり、あたらしきは近きかたなり、など人のいふを聞て、

何事もふるきかたこそしたはしきあたらしきにはたよりありとも

高城の内、道の傍に数百年を経たるといふ松の古木あり。高からずして枝茂り、あたかも作り松に似たり。

幾千世の年や経ぬらん岡のへに老て久しき松のみとりは

よもすからかわつの声聞えければ、

旅のやとかりねの床のよもすから鳴やかかわつの声ぞ淋敷

*2 都城本「かはつ」

高城の田面に早苗とるを見て、

遠近の夏の田面のにきわひはしつの乙女か早苗とる比

出水の郷、平松村に加志久利大明神鎮座し給ふ。本社は応仁天

*42 都城本「降出て」

*43 都城本「読し」

*44 都城本「伝えぬる」

小山田谷の頭といふ所に泊りてよめる、

しつかなる田面の庵の夕ぐれに松の梢を渡るあきかせ

あけかた吉野を出て華棚に通るとて、

おとたてゝふく秋風にあけわたるあしたの原における白露

皇、神功皇后にて、延喜式に載られたる薩摩国二社の其内なり。後に伊勢太神宮、宇佐明神、住吉大明神を合せ祭るとなん。人々を具して詣てつゝ、かくそ申侍りける。

水俣の川原に小屋うち幕構して二夜泊りけるか、雨風はけしくねられさりければ、

国の守肥後国佐敷の浦より御船にて米の津に着かせ給ひ、昼過ぎ出水の御旅館に入り給ふ。御供の人々は陸より米の津に至り、是より御供しける。僕も御跡より御館に登り、恐悦申奉り、ほきの上といふ所にとまりぬ。

はてしなきあつまの空やはる／＼と何おもひけん心つくしに

*3 都城本「思ひ」

五月十二日辰刻、出水御立有ければ、僕か沙汰しける事_{ト業}、_サ昼時前終て、出水を出、帰路に赴_キ。暮前、阿久根の内、飛松といふ所にとまる。宿は海辺にて景気おもしろき所なり。

*4 都城本「趣く」

*5 都城本「泊る」

あけの日は向田に御泊りありければ、僕は水引の多少路といふ所に泊りぬ。新田宮は遠からぬほどなりければ、やとのわらはに案内させて詣ける。地神三代瓊々杵尊の靈廟にて、今は天照太神、萬栲幡千々姫尊_{瓊々杵尊ノ母}を合祭ると也。暮前、山を下り、川内川を望むに、月影うつり澄わたりたるを見て、
かしこくも神代のむかしとめくれは心の月もすむ心地すれ

濁り江の水もすめるや遠き世の影を移せる月そさやけき

利根川、隅田川、川内川は日本の三川とて、利根川を坂東太郎といひ、角田川を武蔵次郎、川内川を薩摩三郎となんいひ伝へけるとそ。川の大小にて太郎、次郎、三郎とは名つけけるにや。

日のもとの三つの川そと聞はけに真帆引つるゝ船も行かふ

*6 都城本「伝え」

*7 都城本「聞て」

福山紀行

辛丑の秋、公の仰こと奉りて隅州福山へ趣きけり。仲秋中の九日、あたり近き堀江より船出して漕行ほとに、大磯の浜辺近き高き峯より落る滝つ瀬にゆきゝの船もしはしとめなん

山青き峯より落る滝つ瀬にゆきゝの船もしはしとめなん

*1 都城本「赴きけり」

御館の前を通けるに、先の君の住せ給ひしふるき事とも思ひつゝけて、

ませし世のむかしを忍ふ今日ことに跡はそのまゝ秋風そ吹はるかに心岳寺を望みて、

*2 都城本「遙に」

おのつから浮世のちりもはらはまし人里遠き山の松風
加治木の里をななめやり、十年の昔、一たひ旅食せし事思ひつゝけて、

年経てもわすれやはする二年にあまりてすめる草の庵を

*3 都城本「詠め」

夕かた福山南の藪といふ所につきぬ。やとへ入て見れば、去年の冬一夜あかしたる所なり^{*4}。あるし立出、かたのことくもてなしけるにそ心もやすらかにつかれをやすめける。
立寄てしはしはこゝにかりの宿うきをわするゝ夢やむすはん

*4 都城本「也」

宿は海近き所にて、よもすから波の音聞へければ、
聞そうし音もさひしき浦風をあかしかねたる旅の枕に

宮ノ浦大明神は上古より福山に鎮座ましゝて、延喜式に載られたる大隅五社の一也。かしこくも先の帝の御時、寛延年中、神階正一位に任し給ひけり。是より先の神階は崇源宣旨とて吉田家の許容なりけるか、此時より始て勅任の宣旨にて、いとたうとき事となん。

むかしよりあふくに高き神山のしけるみかけを頼むもろ人

けふは福山野の駒狩なりとて、あけかたより、あふさきるささわきのゝしりければ、僕も人ゝにいさなはれ見にまうてける。
馬立坂のなかはに、右馬頭忠将の墓あり。忠将は大中尊公^{*5}の御弟にて、永禄中、国家の為に此所^{*6}に身を捨給ひしかは、立寄押し奉りて、

涙こそ先さきたちぬ立寄てこけむす塚を問ふにつけても

*5 都城本は「大中尊公」の前を闕字にする。

*6 都城本「処」

牧の原に登り見れば、遠近の男女つとひ集りけるさま、あまさかるひな人の風俗おかしけなから、賤の女の身にも応せぬ美服せさるはなし。ふるき代の質朴は田舎にこそ残しを、むかしに^{*8}はことかわりて見えし。荷を負ひ車に乗したとへに似て、見る

も興さむる心地しける。

降りゆく世のならばしはかなしけれかさりなき社めてたかりしを

*7 都城本「残りしを」

*8 都城本「かはりて」

八月廿二日

福山原にて、秋の野花、今を盛なりければ、

紫の色こき野へに来て見れば野花や秋の錦ならまし

惣陣の岡は福山第一の高き所なり^{*9}。岡の腰にしはしやすみて四方を詠けるに、坤にあたり桜島藤野岬^{*10}を見越て国の都目の下に見えたり、など人ゝのいひけれとも、おほろけ也ければ、
遠からぬなめなからも老はうし見るめもかすむ故郷^{*11}の空

*9 都城本「也」

*10 都城本「藤野崎」

*11 都城本「古郷の空」

又さくらしまをなかめて、

海こしのなかめは近きほとなれと老にはうすき沖つ島山^{*12}

*12 都城本「うとき」

八月廿六日

嘉例川村の内、小河内といふ草深き所にとまりける夜、相ともなひし樋口氏なる人、福山^{*13}よりもたらし来れりとて、さゝなとめくまれければ、志の浅からさりしに感じ、皆人寄つとひ、いと興しける。

かはかりの人の情に草深きいほりの床もうさをわするゝ

*13 都城本「方」

*14 都城本「志し」

旅ねの目さめかちなるに、秋の夜の長きをおほへける。あけかた、鳥の声しきりなるを聞て、

あかき夜もあけかた近く成ぬらんしはなく鳥の声の遠近

野花の色ことなるを手折て、しはしはもて興しけれとも、広き

野辺行なやみ、花を捨るとて、

すてしとて我なとかめそ秋萩の色香もふかくめてし心を

萩、尾花、秋風にもまるゝを見て、

秋の野の尾花かもとに咲萩は波にたゆたふ錦とそ見る

* 15 都城本「たゆとふ」

日〳〵に高き岡を越ければ、

きのふ越し山は麓と成にけり日ことわくる峯の白くも

末吉の原にあかり南を望めは、串良の大塚山見えたり。去年の

秋、山のあなた有里村にとまりける。宿の籬に菊の咲たるを見

て歌よみし事思ひ出て、

見るからにおもひそ出る去年の秋山のあなたの菊のませかき

思ひ出る色香も深く有里に去年の秋見し白菊の花

末吉梶か野は山里のさひしき所なり。日高く爰にとまりて、く

るゝを待たてよめる、

世の中を何かいとわんへたて来て山辺の秋のくらしかたき

* 16 都城本「也」

* 17 都城本「泊りて」

さひしきは秋の夕への常なれと旅の山へそいとゝ身にしむ

恒吉浦河内に高き所に家作して、前には小川の流清く、向ふの

岡は高からず卑からず、面白き詠なりける所にとまり、あるし

さへさか〳〵しく、情ふかくもてなしければ、

草枕かりねの庵のおきふしもかゝるやとりそうさをわするゝ

音三四といふ事をよめと人のいひければ、

村時雨過にしあとの板ひさしおつるしつくよ音の三四

板屋鹿倉といふ深山の嶮を渡り、深き谷川に下り、紅葉色つき

たるを見て、

深山木のしけれるかけを行水に紅にほふ谷のみち葉

谷川を伝ひ下り行くほとに、人跡絶て道なきかたにまよひけれ

は、道不可離とかしこき教へ、感ずる事ありてよめる、

山深み苔の通ひ路あとたえて道なきかたにふみそわつらふ

過し月の後の五日、福山の旅宿を出てこゝかしこを巡り、もと

の宿に帰りけるに、けふは帰るへき日也とて、やとのあるし、

夕餉とゝのへて待居ければ、

立帰るやとりも同じ旅なれとけふふる郷の心地する也

相ともなふ人〳〵のもとに寄つとひ旅のうさわすれんなど、い

さなわれけれども、老ぬれは世のましはりもうとまるゝならひ

なれは、何くれといひまきらしてゆかす。晝ねさめよめる、

老ぬれはうとまれぬるもことわりと思へは世をも人もうらみす

九月九日

宮浦大明神の祭とて、昼過る比、神楽の音聞へければ、

聞からに人の心もすみわたるすくなる神をすゝしめの声

西風はけしく波の音すさましかりければ、

旅のやと磯うつ波のおとならて友こそなけれ秋の夜すから

あけの日まで夜にいたりて波風やます、

くるとあくとなえずはけしき波風に老の睡の暇たになし

夜ふけ、風やみ月も入かたなる比、海の面、櫓声かすかに聞へ

ければ、

月は山鳥も鳴くなる海つらに渡わたる船の櫓声しつけき

九月十三夜、去年の今夜、此郷の大廻にて月を見、歌よみし事

おもひ出しよめる、

去年の今宵見しにかわらぬ此里のくまなき月のかけそきやけき

秋の夜、田家うすつく杵の音を聞て、

賤女のいとなむわさそかなしけれうすつく音も小夜更るまで

庭の籬に菊の咲けるか、夕日の照すを見て、

立寄て見るも色こき紅の夕日^{*18}うつろふ菊のませかき

*18 都城本「うつらふ」

九月廿三夜おもふ事ありてよめる、

何くれと思ふも悲し長き夜をのこすねさめの老の枕に

年¹⁹／＼老の増るを思ふて、

長き夜のねさめにそしる去年よりは今年は猶も衰ふる身を

*19 都城本「おもふて」

秋の田面の事しけき比、かりのやとりのおきふしもかきりしら

れす、いと心うくおほえければ、隣の里にうつりなんとせしに、

あるし打おとろき、せちにとゞめけるほとに、おもひとゞまり

てよめる、

しはしそとかりのやとりに日数へてなるゝに深き心をそしる

旅ながら旅にもあらぬ心かなかくまでふかき人の情に

永泰山大安寺は禅の洞家にて、上野国長源寺の末寺なり。福山

市町より石階を登る事数十余歩、海上一瞬の間に在りて人煙を

見す。絶景いふもさらなり。

市町をへたつるほどは遠からず浮世の外と見ゆる古寺

此郷^{*20}に來り数十日を経て初て鏡をてらし見て、宿昔青雲の詩思
ひ出し、感慨いとふかくしてよめる、

老來ても心斗はかわらぬにうつる鏡のかけそつらけれ

*20 都城本「里」

暮秋の日よめる、

くれてゆく秋のなこりも年経ぬる身にこそいとゞおしまれにけり

あかすしてくれぬる秋のけふは又た^{*21}ひのやとりにあふそわひしき

*21 都城本「旅」

初冬のあした

行雲も嵐の音もかはる哉冬來るけさに時雨するより

此日比、此さとの家ことなやみもてゆくほとに、僕もおきふし

心にまかせすなやみければ、旅寝^{*22}心ほそさかきりなくおほえて、

ふるさどにかくとは知らし^{*23}おきもふしもひとり苦しむ老のいたつき

*22 都城本「こゝろほそさ」

*23 都城本「しらし」

小夜ふけ時雨を聞て、

物おもふ草の庵のさひしきに聞もさためぬむら時雨かも

嵐はけしく木のはの散るを見て、

日かすへてそめてし木々の紅葉々を時の間にちるこからしの風

秋^{*24}のなかは故郷を出て、ほとなく帰りなると思ひけるに、公事

もろき事なく、秋もくれ夜さむ身にしみわたるまで、帰るへき

折もわかす、草の庵の侘しきに心ならぬ日数をおくる^{*25}もいと心

うきわさ也。

月の比都を出て霜かれし草のかりねの旅そ久しき

おもひやる月に出にしふるさとの庭の草^{*26}はは色も残らし

*24 都城本「なかわ」

*25 都城本「送る」

*26 都城本「草葉」

旅ねのさひしきに、霜風身にしみて月さへくまなくさし入ければ、

風さむき霜のよすからねもやらて草の軒端に月そ更行

此ころ、ふる郷の便なく夢たに見さりければ、

立出て日かすも遠くふるさとかよふ夢路の便たになし

暁、時雨の音を聞て、

小夜ふけて旅のやとりの淋しきにならのかれはに村雨そする

終夜松風おとつれければ、

旅のやとなるゝにつけてさひしさもおもひしまゝの軒の松風

するわさもなくて日を送りければ、たわむれによみて橋口氏に

おくりける、

波の音松吹風にさひしさをわするゝ人そ浦山れぬる

*27 都城本「たはむれに」

暮過ぎ船に乗て、故郷に帰る。風はと問へは、追手なりといひ

ければ、

くらき夜に波のうきねはつらければと真帆吹送る風そうれしき

財部紀行

天明元年冬十二月中の八日、公の為に隅州財部へ赴きける。

吉野にて雪の降ければ、

名にしおふ吉野ゝ里にふる雪は時をもわかぬ花かとそみる

暮前、加治木に着て、向江といふ所に泊りぬ。むかし此郷に一年余り官遊せし時、使ひ置し者あり。あたり近きほとなりければ尋来りける。思ひしよりは老ひやつれ、むかしには似るへくもなし。今は家まつしく、朝な夕なの煙たに立かたきになやみつかれ待るなど語るを聞て、

十年ふる月日は夢の内なれとかわるにやすき人の有さま

あけの日、浜の市を過ければ、八幡宮に詣てたく思ひしかと

も、多くの人々を具しければ心に任せず、かくなん、

まゝならぬ世のならはしそ悲しければこふあゆみも心まかせず

夏過ぎ福山南の菌に着ぬ。秋の比、此所に二月斗泊りける。や

とのあるしのなやみけるを思ひ出して、いかにと問ふに、過し

月の末の二日身まかりぬといふ。老たる母の有しか、なげきさ

こそと問へは、心くるはしき人に似たりと語るを聞て、

聞からに袖こそしほれ老の身の子をさきたつる跡の嘆を

今宵の宿は海涯なりければ、

さえし夜に浦ふく風のよもすから磯打波の音そはけしき

十二月廿日、財部に着ぬ。あけの日よりおほやけの事とも沙汰

し侍りて、こゝかしこめくりける。南俣村の東の岡に小少将の

松といふ古木有り。木のもとにほそき石あり。墓とは見えす。

傍に宝永年間寄進の石灯炉もあり。松には花を手向たり。里人

の語りけるは、むかし都城の家臣桑山刑部といふ人、主人の侍

女をつれ都城を逃出て此里にかくれ居けるを、其家のあるし、

ひそかに都城に告げれば、大勢来りて二人を殺し、此松のもと

に埋む。今に此所を桑山塚といふ。間々都城より詣る者あり。

告たる者の家には怪異多く、此村今に栄えず、とかたる。

残してもかひなき名たに年へては老たる松も哀とそ見る

十二月廿四日はさき立し我子の忌日なり。前の夜よりねさめかちにて思ひつゝけ、いと悲しかりければよめる、

わすれねと多くの月日へたて来てそのおりほとは思はれはせず

此歌、等類のうたかひあれと、思ひあたらず。追て考ふへし。北俣村に移けるに、去年の秋一夜とまりたる所なり。其時七十に余る斗の翁、曾我物語をよみ居けるを、賤の男か身にも応せぬわさしぬると心にくゝおほえしを思ひ出して問へは、此家の親にて常に物よみて日を過しけるか、過し月身まかりぬといひしをあわれにおほえて、

世のうさをのかれて住る老人を問ふになき身と聞そ悲しき

*1 都城本「泊り」

*2 都城本「聞も」

古井の原といふ所に年へたる松あり。樹下に平田三五郎墓あり。慶長年中、庄内の乱れに十五歳にして戦死しけるを、新納拙斎入道の歌よみて悲しめるは世の周く知る所なり。近世、国分の士平田某あらたに墓を立たるといふ。

残る名はいつの世までとかきらしな千年の松は枝くつる共

吉田大蔵といふ人、平田氏と交を深くし、同し時に打死したるといふ。近き比、鹿府に住る吉田某、其家のゆかりとて此地に官遊の序に、大蔵某か墓を尋れとも、さたかならず、平田氏か墓の辺に在ける文字もわかぬ古墓を其しるしか、といひけるとなん聞て、

なき跡を問ふも久しき今の世はそのしるしたになきそ悲敷

*3 都城本「悲しき」

北俣の内外村にて除夜、

しつけしな世のいとなみもわすれきて時をもわかぬ旅のやとりは

歳旦

朝日かけのとかにてらすあしたより千里の外も春や立らん

日ことかなたこなたさまよひありきしか、今日は北俣、下財部の両村をかけ出入ける。北俣は隅州、下財部は日州の地也ければ、

我君のひろきめくみにあふすみや日向をかけて今日は行かふ

下財部の原にてひはりの高くさへつるを聞て、

山／＼はまた雪ながら時知りて雲はるかに雲雀鳴也

溝の口といふ所にとまり、寒むさ身にしみ夜長くおほえければ、

夢さめてしはなく鳥の声聞は夜の明かたや近く成らん

大河原より大峯へこゆる山路の谷に、巖のはさま水の流、いと

おもしろき所有り。

ほのくらくしける深山の谷かけに岩間もりくる水そさひしき

松尾といふ所にて、若木の梅の立枝多ならぬに、十に三つ四つ

花の咲けるを見るにたえてよみ侍る。

山里の垣ねの梅はほころひて猶うくひすの声を待る、

冬こもる山辺に春を松の尾のけふさく梅に時や知らん

ところ／＼梅の華盛にて、梅か香薫しければ、

深山へや里もあまねく咲つゝき梅か香四方におくる春風

財部の西、多くの山坂を登り下り、辛苦して大峯といふ高き山の中、とある家に尋ね至る。あるしは白髪*4の翁なるか、立出ておとゝしの秋、火災にあひ、垣生の小屋、請し入るへくもなしとて、庭に藪敷て座せよといふ。妻は三十に足らぬ斗なるか、

茶汲出、かたのことくもてなしける。立居のさま、詞のはし、
鄙人とは見へす^{*}。何くれと物かたる、いふかしきほとなり。僕
かさむそらにこゝかしこ経めくるなやみなど、まめやかに問ふ
もいと哀に聞かれければ、しかゝのあいさつして立出ぬ。家
を過て人に問へは、此人は鹿府の山下氏の娘なるか、嫁きて子
をもふけ、故有て夫にさられ、子を思ふ悲のあまり、後の母あ
るをも恥す、復立帰り子を見たりとて、其家より父のもとへい
ひ越す、故有て鹿府へはおきかたしとて、或人のなかつとして
去年の春、此所に来りぬ、初は谷に下り水汲むになやみ、桶を
いたきて少し斗つゝ汲しか、頃日は人なみにかつきならひし、顔
の色白きも今ははるかにやせ黒みたり、鹿府より来りしも、足
いたみ行きなやみけるを路人いたわりて、やうゝたりつき
給ふなる、二度鹿府へは帰らざるたらちねのいましめなり、と
語るを聞て、あわれさにあまり、其夜は打もねいらす、あんし
つゝけてよめる、

親にはなれまた子をすてゝはるゝと此山里にすめる悲しき
立寄て見るも中ゝ哀なりはにふの小屋にすめる怪人
あわれなりたゝうたゝねの夢ならて又見る事もなてし子の花

* 4 「埴生」か。都城本「垣生」

* 5 都城本「見えず」

此人、母なんましゝと人の語りければ、

たらちめのせめて此世に有もせはかゝる浮目を見さらましもの

あけの日大峯を立とて煙草をおくる。

こかれぬるむねの煙も心してしはしは消よくゆるその間は
身をこかす思ひもしはしわすれめや煙はあたに消はつるとも

中野といふ所にてしはし腰かけやすめる家に茶汲出る女は、鹿
府塩屋のもの也と人のいひければ、くはしく問ふに、家まつし
く親の為に十四の年こゝにうられ、十九になり侍るといふ。姿
は艶なるさまなれと、足手のあらゝしき、見るもうたてしき
ほと也。溯明か僕を買ふて子に贈しふる事まで思ひ出られ、あ
るにしかゝの物語して、

心せよまつしき家そ悲しけれうられ来る身も人の子なれば

帯野ゝにしはしやすみける。家はおとゝしの冬、爰を通りける
時足やすめたる所也。其時此家に使はれたる女は、鹿府横井の
者也しか、おさなきよりこゝにうられ来りしといひつるを思ひ
出して問へは、去年の冬福山嘉例川に嫁ぬとかたる。嘉例川は
ひなの山里也ければ、

ふるさとを出てはるけき山里に身を終るなる人の悲しき^{*}

* 6 都城本「悲しき」

とまり山といふ所にやすみて、

立寄れば人の心もとまる哉浮世はよそにすめる山さと

はしめ財部に来りける時、南俣村上鶴に泊り、五六日を経て所
ゝに宿移りし、今日又はしめのやとにうつる。

故郷にあらねとけふはうれしけれ又立かへるもとのやとりは

睦月中の九日、財部の 公事終て恒吉にいたる。去年の秋、恒
吉の浦河内に泊りける時、あるしの語りしは、我家は常におふ
やけの沙汰し給ふ人ゝの宿し給ふ所なるか、多くは権威高く、
呵りものし給ふにおちおそれ侍る、君かことき柔にして和ある
は少くて、又此村に来り給は、我家にとまり給へ、違へ給ふな
といひしか、今宵其家にとまると路にて聞しかは、

ひめ置し人のことのはたかはすはけふ立出て我や待らし

やと入れは、かたのことくもしてなし、夕餉とゝのへて待し
など語りければ、

年経てもいひしことのはわすれすも待つる人の心ゆかしき

*7 都城本「ことの葉」

此宿は山近くして小川流れ、面白き詠ある所なり。たくれ、ふ
くろうの声しければ、

さなきたにつれ／＼あまる山里に聞もわひしきふくろうの声
くれかゝる此山里のさひしきに軒はも近くふくろうそ鳴く

旅つかれ、うまくねいりける暁の夢に、所は住吉の浜ともいひ
つへき松原に、美代清相、寺山用央、其外名も知らぬ老人三五
人并居たり。何事そと問ふに、歌の会也といふ。面白き事にお
ほえて、其すへに座したり。各題を取てよみ給ひし。僕か取た
るは寄鏡恋なり。かたくいなみて、歌の道まなひたる事も侍ら
す、折にふれ興に乗して思ひを延るのみにて、題歌よみたる事
もなし、恋の歌は猶よまず、といひければ、人／＼、和歌は漢
土の詩に同しく心のゆくまゝをのふるこそ本意なり、題歌は其
興を設る為にして、本意に背に似たれとも誠はそむかざる所あ
り、恋の歌は猶ゆへある事也、とてせちにすゝめ給ひければ、
力なくよみしとおほえて夢さめたり。

立寄て見れば思ひのます鏡くもらて移せ人のおもかけ

*8 都城本「読みたる」

*9 都城本「故」

*10 都城本「おもひ」

春雨つれ／＼なるに、かわつの声しければ、

草の庵ふる春雨の終夜山への小田にかはつ鳴くなり

*11 都城本「かはつ」

松吹風にねもやらす、老の行末おもひつゝけて、
吹風の松にこと問ふ終夜ねやらておもふ老の行すへ

*12 都城本「行末」

こゝかしこ移りゆくほとに、賤か家のならひ、塵積れとも払
ふことなく、心よからぬわさなるに、大谷のやとのあるしはあ
さな／＼のきよめおこたらす、物こときよらにして、しはしは
心やすらか也ければ、出るあした、西行か江口の歌あんし出し
て、

かりの宿心はとめぬ我なからしはしはこゝと思ひ社すれ

*13 都城本、読み仮名「チリ」なし。

下大谷にて、高き岡のうへより谷川の流れを見て、

谷かけの下ゆく水のみとりより白きを見る瀬々の岩波

内山といふ所にて勸農使牧野氏と同じやとに泊り、もろともに
相具しける人／＼寄つとひ、酒のみ、ものかたりして興しける
に、僕に、初の字を上置き歌よめ、と人のいひければ、

初音をは聞そめしより朝ことに軒はに近く来鳴く鶯

初花をいつか待見ん深山木のそれとは見えぬ木／＼の梢に

須田木村梶原といふ所にて、光学といふ盲人の語りけるは、み
つから八歳にして目しひけれど、農民の子なれば、耕し草きり
て業を欠く事なし、自田数十畝をひらき、今日初て貢税を定め
らる、とて茶汲みもてなしける。娘也けるは、すくれて目かし
こく見えければ、目しひの子とは見えす、など人々たわふれけ
る。年は十五といひしを聞て、たわふれによめる、

村雲の立おほひたる中よりもみかゝれ出るもち月のかけ

恒吉を出て、市成に至り、柏木*14といふ所に泊る。やとのあるしの田舎めきたるか、いと誠ありてもてなしけるもうれしくおほえて、

誠ある人の情はうき旅のうきをわするゝ心也けり

*14 都城本「柏原」

よもすから風はけしく寒むかりければ、

さえし夜の嵐の音も冬ならはゆきけもよふす空と聞まし

夜あけ、淡雪庭にふりたるを見て、

朝戸あけおとろく庭の淡雪は時にさきたつ花かとそ見る

柏木を出るあした、あるしの女、六十に余り多病なるか、又あ

ふ事もあらし、なといひ出て、涙くみしを見て、

ゑにしあれば又あふ事もあるものを只なかゝれといのれ玉の緒

老のねさめ、夜ことに鳥の音を待わひければ、

鳥の音を恨し事もむかしにて今は夜ことに待そ久しき

*15 都城本「こと」

百引に泊りける。やとは岡辺の岸のもと也しか、田舎山にも花

の咲、と軒近く諷ふて通るを聞て、山青花欲然といふふる事を

思ひ出て、

ひとりなる深山の中にあらはれていとゝ桜の色そしるけき

日もやう／＼長さおほゆる比、春雨ふりくらし、

公のわさもおこたり、暮しかねつゝ、故郷思ひ出られて、

つれ／＼と草の庵に春雨のふるさと遠く思ひこそすれ

暁、鳥鐘の音も聞へす、松風の音たになかりけるに、後の小田

に蛙の鳴を聞て、

小田になくかわつの声を小夜更て老のねさめの友と社聞*16け

*16 都城本「きけ」

百引丸山寺の山に桜の盛なるを見て、

春立といひしも夢の間にすきて花の盛を見るも程なき

淡雪の木／＼のこすへに残るかとあやまたるまで見ゆる初花

*17 都城本「あやしまる」

如月十日、地大明神の祭とて、老若寄つとひ、遠近より詣て来

るを見て、

道すくに守れる神の跡とめてはこふあゆみのかすそ尽せぬ

小夜更、こしかた思ひつゝくるに、身のあやまりのみ多かりけ

れは、

ものことにくやしき事そはてしなき過こしかたを思ひ廻せは

ねさめ、きゝすの声を聞て、

あけかたも近づきぬらん岡の辺にあさるきゝすの声を聞ゆる

二月中の五日、松山にて花*18の盛也ければ、

ちりもせず咲も残らぬ如月のその望月の花の盛は

*18 都城本「花は」

村釘といふ所にて、羽衣の諷思ひ出る事有て、たわむれによめ

る、

乙女子か天の羽衣かくされて空飛*19ふ鳥を見るも悲しき

*19 都城本「飛鳥」

鶴地といふ所を通りけるに、おとゝし泊りつる宿の庭に、おも

しろく作りなせる松有しを思ひ出し、立寄て見るに、一しほ色

まさりければ、

立寄て見るに色ます庭もせの枝おもけなる松の緑は

山／＼の桜、残るかたなく咲みたれけるを見て、
なへて世の花盛なるこの比は人の心もつかれ社すれ

去年の秋、福山に至り申良の郷大塚山を望み、前の年彼所に至りしを思ひ出し、歌よみし事あり。今年松山に至りて問へは、大塚にはあらて志布志の山也と人のいひければ、

さならてもそれと思ふ心よりいひし詞はさはりあらしな

わすられす思ふ心のあれはこそそならぬかたもそれそとは見し

中のたらしめの世を過給ひ、けふは四十年^{*20}の忌日にあたりければ

とも、手向たに心にまかせず、かくなん申侍りける。

年へても思ひ出れば悲しさのまのあたりなる心地社すれ^{*21}

*20 都城本「四十日」

*21 都城本「こそすれ」

此春野山を経めぐり、思わすも日ことに花をなかめければ、花見てくらす春そすくなし、といふふること思ひ出られて、いたつらにすきんと思ふ此春にあかす詠る花の盛を

中原といふ所を通りけるに、ある人のもとにつゝしの色ことなるか咲乱れけるを見て、歌よまんと思ひしかとも、おふやけの事しけく、心せかれて打過けるか、今日また此所を通り、あるしに招かれ立寄しに、手折て旅宿の家つとにせよといわれ、かくそ申ける。

よそに見てやまんと思ふ岩つゝし手折もふかき恵ならずや

あるしのたらちねの立出て、酒すゝめ給ひしか、父は白髪の翁なり。いと浦山しき事におもひける。又、その母也とて八十余りなるか出たるを見て、初のたらちめを思ひ出し悲しくなりもてゆく程に、しきりに哀もよほし、さま／＼いひまきらしけれ

とも、涙制しかたく、人目恥かしくてよめる、
たらちめを思ふ涙と人知らて心乱るゝわさと見るらし

*22 都城本「初のたらちめ」

友常といふ所にまかりてかへりけるか、くれかゝる空に雨ふり

山里の賤か家に夕餉かしく煙の立つゝきたるを見て、

山里の草の庵に立つゝく煙さひしき野路の夕くれ^{*23}

くれかゝる遠山里の草の庵に野柴折たく煙さひしさ

*23 都城本「夕暮」

五位の松^{*24}にて竜の雲に登るを見てよめる、

音にのみ聞しより猶あやしきは雲に登りしたつのふるまひ

*24 都城本「原」

深川を巡りけるに、堂菌といふ所^{*25}にあたらしき堂あり。しはらく腰かけて休ける。本尊は観音也といふ。筆を取て漫書してひけらし。夫、一字の堂を立るや民の力を勞し、民の財を費すこと幾はくそや。愚俗猶慨然たらさるあたわす。況や大慈大悲の仏に於をや。是を以、戯に堂壁に漫書して一笑をなすといふ。

もろ人のはこふあゆみのかす／＼をあたに思ふな観世音仏

*25 都城本「処」

*26 都城本「暫く」

梶ヶ野といふ所に泊りける夜、宿の女に或人戯れて、その父母を尋る。故有けるに知らすとこたへなから、知れはとていふへきものは、子は親のあやまりをかくし、親は子のあしきをかぐす事となん、鄙人はおほえ侍し^{*28}、といふを聞て感にたえす。子為父隠、父為子隠といふいにしへのひしりのことは、おもひ出しかくなん申侍りし。

賤女か誰にならへる子は親の為にかくすといひしおしへを

歌よむ人のいひけらし。此歌を吟ずれば、詩人の僧家の偈よむことく、あまさかるひな人の都に出て、物語るに似たり。意の通せざるにはあらねと、ことはいといやし。

* 27 都城本「故有けるにや」

* 28 都城本「侍りし」

* 29 都城本「教へを」

内浦陵嶽は彦火々出見尊の陵にて、神代三陵の一なり。末吉の原より遙拝して、

千年ふる神の御山そいちしるき幾里かけし遠き詠に

* 30 都城本「経る」

ありきめくるにつけて、わらはへのうたふを聞は、今年すへよし御竿かいとか、さげてたもれや、御奉行さま、さげてたもれにや、わたしか身せめ、花ちやなけれど、ちりくゝに。夫、農政は国のもとひ、いにしへのかしこき御代、いつれかおろそかにし給ふはなかりき。国家のまつりことは民の心を得るを本とするとなん。辛きをいとひ、寛なるを願ふ人の心、いつの世か同しからざらん。わらわへのうたひもの、むかしよりすてさる事とこそ聞侍りければよめる、

鄙野の歌謡ことはを修せざるは心におもふ事あるにや。

賤女かうすつく歌も心してあたにな聞そ世にしある身は

* 31 濁点、底本のまま。都城本「さけて」

* 32 濁点、底本のまま。都城本「さけて」

* 33 都城本「辛をいとひ」

* 34 都城本「ことく」

岡の別府にとまりける。やとの女はみめうるはしく姿艶なるかたなりければ、皆人興しもてゆく事となん聞し。そのしうとめのましくてよからぬわさのみ多き、など折にふれ語り出しけるを聞て、うたてしき事におほえ、仏の女を血囊といひしをおもひ出して、

血をつゝむふくろと誰か名つけけん色うるはしき人の形を

* 35 都城本「きし」

福山より船に乗りて故郷に帰る。風はいかにと船人に問へは、向ふ風なりとこたへければ、

浦風も心して吹け年をへてけふ立帰るたひの船路に

* 36 都城本「経て」

* 37 都城本「旅の」

誹諧六歌仙 或人にかわりてよめる、

財部真人

とふかなとおもへと酒と肴なし只しゝ鳥を御賞翫あれ△
○出銭禁制の砌なれば、

家居社そまつなれとも菽と粟つしにあげおく是そ財へ

禹王も合点く

* 38 都城本「靱」

大納言恒吉

御馳走は雉より外は何もなし海は遠くて山かなければ○

△おかんたなをや

常よしとおもひし事そはかなけれ砂降ぬれば喰物はなし

遠きおもんはかりなきこそ道理

散位橋市成

川こしは尻ぬれそふに見ゆれとも落駕籠めして怪我は有まい

晏平仲も市成むまれか

ならはしや人の渡世も何事も末からかそへ本の一なり

弱きを侮るへからず。後陣の大将は廉頗か、

相如か

左大弁清原百引

市成はせめて数たに残しに百ひきすて、何もこれなし

差引は算家の大事、暦算全書は

唐本はかりで

*39 都城本「残りしに百引すてこ」

立ならふ役人かたを見わたせば人とは見えぬ神の寄合ひ

高間の原の岩戸の前に

*40 都城本「渡せば」

松山内侍

恒市や百引に是をくらふればほむる詞をいつと松やま

正銘奇応丸一粒か十二銅

*41 都城本「恒吉や」

松山にはたかる程の地黄かな水かつへなる田地療治に

泰野、松か茂る故、先肺気を潤して

金生水

前左大臣末吉

末吉と思ひの外に立のほる煙も薄し民のかまどに

つしにくふきの見えかねて、雨には

平家の落人そろひ

朝寝する事などかめそいにしへのとこやみの世の残る末吉

憶か原やさくら谷の跡とめて

*42 都城本「末よし」

天明壬寅紀行

壬寅の夏、洪水国郡にあふれ、蝗多く、暴風頻に吹て田畠を損

し、五のたなつものみのり薄く、万の民饑餓を憂ひ、貢税に苦

みければ、かしこくも 仰事あり。有司を四方に巡しめ、糶を

考へ、税を降し、給らざるを助け給ふ。僕も其数に充られ、神

無月初の八日、国都を出て船にて福山に至る。

行船にいや遠さかる故郷の山ははるかに雲かくれして

ことし春夏の比、日隅のほとりに官遊し、此所より船にて帰り

し事おもひ出て、

こき出て又こき入るや渡し船の

*1 都城本「此処方」

*2 東大本、都城本とも以下空白。

末吉住吉山のほとりにて、日のくれければ、

いそぎ行く旅の細道日はくれて心ほそくもたどり社すれ

*3 都城本「暮ければ」

*4 都城本「こそすれ」

月聞く行く道さたかならさるに、松山よりむかひの人あまた松

明ともしつれて、人あまた出来りければ、法華経に説ける如渡
得船、思ひ出て、

うれしさのたとへにそ似れくらき夜の闇地をてらす松の火のかけ
初夜過る比、やうく松山に着き、宿に入て見れば、此春泊り
し所也。あるし、うらなくいひなくさめけるほとに、いとこゝ
ろよくやすみけり。

立帰り又問ふ宿のしつけさに都に通ふ夢やむすはん

あけの日、こゝかしこめくりけるに、また秋めきて紅葉山く
をてらしければ、ことしの春、此所にて花見し事思ひ出て、
花の春紅葉の秋の折くにかさねきて見る旅の衣手

* 5 都城本「処」

* 6 都城本「はな」

新^イはしといふ深き谷の底にて公^ケの事とも沙汰しけるに、日
くれ風寒く、人く^ナなやみける。あけのあしたはやく此^所に至
りければ、あたり近き山の上に住ける賤の乙女ら、芋頭やうの
しなく^イいれたる桶かつきつれ、山を下り来りつゝ、民の為と
てかゝるさかしき谷の奥までさまよひいたり、夕部より今朝に
いたりなやみ給ふこそいとたふとくおほえ侍る、とてもてなし
ける、誠有りて見えし。

都とは誰かいひけんあまさかるひなこそ人の誠ふかけれ

* 7 都城本「公の事とも」

* 8 都城本「此処」

四五日過て、秦野といふ所^所にうつりける。やともまた此春の同
し所也。庭の面、つゝしの籬、梅の立木など、いとおもしろく
かこひおきたり。あるし、いとかひく^クしく見へたるか、さま

く^クいひなくさめければ、

旅人のしはし心のなくさむはあるしの情ふかきやとかは

* 9 都城本「処に移りける」

* 10 都城本「宿」

* 11 都城本「見えたるか」

末吉二のかたといふ里に泊り、終夜落葉を聞て、
旅のやとねられぬ夜半の凧に落る木のはの音そさひしき
南の郷のうちに、伊諾册尊の身を清め給ふ桜谷の跡有り。岡の

はさまの谷あひ、巖嶮しき間にくろかねの銚を立たり。東の岡
を高間の原といひけるとなん。是よりあやまり来れるにや、桜
谷をあまの岩戸といひ^伝へける。

千はやふる神世の跡の桜谷とめくる今も香やにほふらし

* 12 都城本「伝えける」

柿の木の谷川にいたりて、

ゆく旅の駒のあしなみ引とむる岩間をつたふ清き流れに

* 13 都城本「つとふ」

刈屋といふ所^所に泊りける。宿の女は面け高く形きよけにて、い
やしき鄙人とは見えす。されとも、いかなるやまふをうけん、
かたく^ク目しひ、あしなへたるか、かく浅ましきありさまにて
見え奉んもいとつかし、といひしをなくさめてよめる、

心なくさそふ風にも紅の色は片枝に残るもみちは

* 14 都城本「処」

夜ことにはやく目さめ、鳥の声を待侘ければ、
老らくのねさめさひしき旅枕夜ことになるゝ鳥の初声
ものおもふ旅の枕の夜なく^クに鳥にさきたつ老のね覚は

山口大明神は天智天皇を祭るとかや。木たちしけりあひ、いと
たうとく見えたり。

昭按に、大明神社は南郷村に鎮座、本社は志布志に在り。邑
人のいへるは、昔、天智帝の後、都を出て頼娃郡に忍ひ下
り、開聞宮に祭られ給ふ。帝、その跡を慕ひ下り、志布志に
崩し給ふ。此故に山口社は遙に開聞嶽に向ふと也。後人附
会、妖妄の説なるへし。其詳なる知らず。

おもわずよ心つくしのはてにまたかゝる宮居をおかむへしとは

*15 都城本「其詳なるを知らず」

二之方にて俄に雨の降り来りければ、憶大明神の社に雨やとり
してよめる、

ふる雨に神の御かけをたのみ来てかたしけなさに袖しほる也

都城を通りける時、志和池、野*16、美谷、勝岡、高城など、まの
あたり見えわたりければ、慶長の昔の乱れおもひ出られて、
今も猶見る心地すれ武士の矢なみつくろふむかしおもへは

*16 都城本「野、三谷」

高原水流村といふ所にて、終日西風つよくふきもてゆくほと
に、皆人いたくこゝへければ、其夜は僕か旅の宿にともなひ行
き、さゝすゝめ、人々酔に乘し、世のありさま、おかしきふ
し／＼かたり出したのしみけれとも、僕はさのみ興もなかりし
ほとに、老来ては世情も疎く成りゆくもかなしみてよめる、
物ことに遠さかりゆく老そき月雪花の折にあふにも
水流を出て小林に通りける。路すから、霧島嶽まぢかき*17ほど
ければ、

高千穂の麓の野辺にめぐりきて仰けは高き峯の白雲

よそよりも思ひし事よ立寄て仰くにいと、高千穂のたけ

*17 都城本「程なりければ」

*18 都城本「仰くは」

霧島山華林寺錫杖院は、天台の徒性空上人の開基なり。中比、
真言の寺となる。二王門を入り、坂を登る事八町にして寺に至
る。左の方百歩斗、東霧島宮の華表有り。入る事百歩斗、神社
あり。又左方、嶽へ登る路有り。一里余にして絶頂に至るとい
ふ。嶮岨いふへからず。寺の楼に登れば、都城、山之口、高城
の山々見へ渡り、山中の池水、一瞬の間に在て、海に似たり。
絶景、詞もなかるへし。

音に聞く此ふる寺に尋来てかへさわする、四方の詠に

*19 都城本「霧嶋宮」

*20 都城本「有り」

*21 都城本「見え渡り」

小林の町にとまりける。やとのあるしは備前の国の者にて、近
き比より此所に移りし。妻は都城の者なりといふ。家のさま、
庭の木たち、ゆへ有て見へたり。

はる／＼と遠き国より尋来て此山里に住るわひしさ

*22 都城本「遙く」と

飯野木崎原を詠め、元龜のむかし思ひ出で、
今も猶涙そさそふいにしへの旗手なひけしあとを尋て
栗野、奥山より柚人の柚木を牛にひかせて出来り、いたくむち
うつを見て、
うつ人もうたる、うつしも世の中のうちにはもれぬわさと社見れ

栗野徳元寺に詣、点碩和尚の墓を拝みて、

あらは世によるこひぬへしふる寺のこけむす塚を問ふにつけても

加治木に泊りける夜、年比相しれるものゝ、品くもて来つゝ

旅のうさなくさめければ、

年へてもわすれて問ふそうれしければ移れは替る人の習ひに

* 23 都城本「知れる」

* 24 都城本「経て」

* 25 都城本「は」なし。

夜あけ、加治木より船にて帰るとて、

浦の波けふ立帰る朝風に真帆引かくる湊出かも

* 26 都城本「かへる」

けふは心のまゝの順風也といひのゝしるを聞て、

うれしけれかへりゆく身は出船の船子もきほふけさの追風

癸卯春紀行

天明癸卯の春、かしこき仰こと奉り、日向、大隅の地を巡り、

民に農を勧めける^{*1}。都を出て桜島に渡り、白浜といふ所にて多

くの人を集め、御恵みの深きふしく申教へし。あけのあし

た、松浦にうつりなんとせしに、宿のあるし夫婦立出て、夕部

ものし給ふ教のほと、いとたうとくおほへ侍る、今まで村巡り^{*3}

し給ふ御方はかきたるふみよみて教ほとこし給ひしかとも、い

やしき民等の耳には春風牛角にて社侍りし、今かくまめやかに

語り聞かせ給ひしにそ、初て 公の恵みの深さ、青海の底に類

ひ、あふきたふとむへきは島の御嶽の高きになそらへ侍るへき

教のさまく、涙こほるゝ斗おほへさふらふ、せめて今夜泊

り給ひ、かしこき御物語をも聞まほしく侍る、はや出給はんは

いとあきたらすおほえ侍る、といとねんころにとむるを聞て、

何の為かくしたしみの言の葉をうとき我身のうへにきくらん

* 1 都城本「すゝめける」

* 2 都城本「処」

* 3 都城本「めぐり」

* 4 都城本「深き」

奉行は親のことく、民は子のことしと教給ふを聞て、若き比親
也けるものゝさいひし事思ひ出し、誠にて侍りしと感するにた
えず、と語りしかは、

ひな人も道しある世にむまれてやそのことわりを知るそやさしき

藤野村にすめる藤崎某といへる人の庭に、楊梅の老樹有り。慶

長年中、関ヶ原役の後 惟新公、此所^{*5}に三年蟄居し給ひし比よりありけると云。又庭の傍に垣ゆひ廻したる石あり。御腰掛の石ならん歟といふ。御家の跡のしるしに置たる石にや。尋来てむかしを忍ぶ此庭の老木やけふのあはれ知らまし

*5 都城本「処」

赤生原にすくれて富る民はらから栖けり。兄は心すくならず、ものおしみのみしければ、人悪みてよからぬ者におもひ、弟は心す^{*6}なおにして、ほとこしを好みしかは、人皆ほめてはやし、たふとみけると聞て、

さく花の種は同じき種なからかわる色香を聞くそあやしき

*6 都城本「すなほ」

*7 都城本「かはる」

松浦の宿のあるし、僕か民に教示すを聞て、田舎にすめる賤の身とてかくやんことなき事とも、今まで聞さりしこそほいなくおほえ侍る、と語りければ、

あまさかるひな人なれとかく斗世のことはりを知るそかしこき賤の民等のおるかき、おきてたかふ事多なりもてゆくよし、有司の語るを聞き、すくふへき道にうとき我身をくやむものうし。

おもふへき袖そ露けき旅衣道なきかたになひく民艸

おろかなる人のわさこそ悲しけれ道しある世にむまれながらも

赤水に泊り、時うつ鐘の音幽に聞えければ、

ふる郷の鐘の音遠く聞ゆなり小夜更わたる旅のまくらに

*8 都城本「きこゆなり」

曙、きゝすの声を聞て、

岡の辺の旅のやとりのあけかたに枕に近くきゝす鳴なり

相ともなふ上山氏の語りしは、静山公御年若きころ、桜島御狩の時、有村といふ所の飯の御宿に女とも参りつとひ、歌うたひ、酒すゝめまいらせしか、一人の女の髪とけたるを見給ひ、かりの枕に乱れし髪をいふもいわれぬ我思ひ、といふ小歌作りてうたはせ興せさせ給ひ、今も猶うたひ侍るといふを聞て、たわむれによめる、

かりのやとにとけて乱れし黒髪をとりあけいわん言のはもかな
華岡を通るとて、円覚山に登り最勝院殿の御墓に詣てけるか、ませし世のあらまし、まのあたりなる心地して涙せきあへず、手向する詞さへ申あへさりければ、かくなん申侍りける、かきくるゝ涙の外はことのはもなきやまことのたむけならまし

*9 都城本「ことの葉」

大始良横山を出るあした、あるし夫婦いと名残有ていひしは、あらゝしくいひものし給ふ人ゝさへ、かく泊りて出給ふには名残多く侍るに、賤の民等にめくみ有て情ふかき御方の二夜泊りて帰り給ふに、いかほどの御名残とかおほし侍る、とまめやかにかたるもあわれに聞なして、

旅衣ひかるゝ袖の心かな出行くやとのけさのわかれば

*10 都城本「ありて」

*11 都城本「語る」

大根占城元といふ所にとまりし。庭につゝしの咲乱たるを見て、山ゝの桜はまたき庭もせに咲やつゝしの花そ色こき

*12 都城本「処」

*13 都城本「はな」

小根占川北に泊りし時、小夜更、夢打さめ軒端もる月あかく、いと々物すこく、ねられさりければ、

ひとりねの旅の枕に見る月はふくるにつけていと々さひしき

小川原に着き宿に入るに、むかし泊し所也。あるしを問へは、

おと々しの春身まかりし、といふを聞て、

此やとのあるしを問へは過し世のむかしかたりと聞も悲しき

夕日の海に入るを見てよめる、

波の上に入る日のかけを見ればけにこ々や筑紫のはてしなるらん

川北村に鬼丸大明神社有り。木たち物ふり森／＼として神さひたり。祢寝右近太夫重虎、後に重長といひし武勇すくれたるを

崇めし也。始は此宮の辺、海道なりけれども、往来の人に崇り

多くなやみぬるゆへ、今は遙に西の方を通る。されとも猶崇ある神也とて人皆おちおそると語るを聞て、

今は吉利の内に鬼丸大明神を勧請して小松氏の崇敬しけるとそ。

たけき名の残るはよしや今も猶ものとかめます神そあやしき

* 14 都城本「ふりて」

* 15 都城本「勝れたるを」

同じ村の内に高き岡の上に、性察和尚といふ禅僧入定の跡あり。淫行の議を受け激して定に入るといひ、又法類の僧と争論して死するともいふを聞て、

何ゆへのわさとは知らぬあとなからまよふ心を悲しとそ見る

おろかの民等、此僧を恐れたふとみけるにや、石のきさはしを作り、金剛力士の石像を立て、近き比まては華表もありけれども、朽損して今はなしと也。石室の上には草の庵せしか、いら

か破れ、たるきまはらなりければ、草の家こほち捨て二たひ修する事あるへからすと堅く令し、墓前に立て戯れていへるは、

性密和尚地下の靈、勸農使越智通昭か言を聞け、爾元來迷聞徒、不弁義理致冤死、費民財勞民力造茅屋、於爾何益、今破茅

屋除民害、不毀石室、爾之福也、嗚呼、

まよひぬる其身は今は力なし人まとわするわさなあらせそ

* 16 都城本「迄は」

川南安楽寺は天台僧憲英法印か立る処也。本尊か如意輪觀音は

仏工運慶か作也といふ。志布志宝満寺觀音と同作也。仏像も亦能似たり。運慶は彼藝に巧有りて其刻める仏は世に珍しき事と

なんいひ伝へける。

名を得てし人のかたみの仏そとはこふあゆみの数も猶ます

* 17 都城本「所」

* 18 都城本「本尊は」

* 19 都城本「伝えける」

小根占の山の中に初て桜の咲けるを見て、

咲花はいつかと待し此日ころけふそ見初るみよしの山

山もにて松風しきりに音つれ、さひしかりければ、

峯つ々此山もとの旅のやとに音もさひしき松風そ吹く

大根占城本村へ河上大明神社有り。天竺摩竭陀国より来れる神を祭るといふはいふかしくおほへし。宮居太く、山よく茂れり。

鳥居、二王は暎手五丁を隔て麓に在り。所の惣社也。神のきら

ひ給ふよしにて、家／＼井を堀らす、鮎鱸を食はず。死したる鱸を見て社辺に埋めてはらひをなし、又、二月卯日祭の前は

田に紗把を入れず、女はたおらすといふ。夫、神は正直にして、

ゆかみひかめるわさなきを以て徳とするなるに、かゝる事とも
神の知る所にあらず。好事の愚民の妖言、なげくにあまりある
へし。

神なればひかめるおしへあらましを迷ふおろかの民ぞ悲しき

* 20 東大本は「たる」を右傍に小書きする。都城本「死し鱷見れば」
城元の内に巖の高く聳たる山有り。去年の夏、大雨降りける
時、崩落て人五人撃れ死したるといふを聞て、

あたし世にあたしうき目の跡見ればあたしたもともよそにしほるゝ

* 21 都城本「袂」

佐多辺塚より小根占横別府に越ゆるは、類ひなき深山なり。

西東北南をもわきまへぬ山は柚木の音たにもなし

山のいたゞきよりはるかに国の都見ゆるといひけれと、今日^{* 22}は
霞て見えわかさりければ、

故郷の空は霞に立かくし雲と水とをわかちかねつる

* 22 都城本「けふは」

谷川の音を聞て、

谷川の瀬々の岩間を行水は音聞^{* 23}くさへに心すゞしき

* 23 都城本「きく」

田代河原にてこゝかしこぬかつく音を聞て、

賤か家にぬかつくきねの音聞て民のかまとのにきわひを知る

米良氏、花瀬に至り帰るさに桜一枝めくまればは、

手折こし情ならずはたひの宿にかゝる色香の花や見るへき

横別府より田代へ越けるあした、雨のふりければ、

^{* 24}たひ衣しほれこそすれ春雨のふる郷遠く越る山路に

* 24 都城本「旅衣」

田代より池田へ越る山路、桜の盛なりければ、
うき旅のうきをも知らぬ心哉花盛なる志賀の山越

* 25 都城本「しらぬ」

夜半、月の光さし入、ねられさりければ、

軒端もる月のひかりにねもやらて物こそ思へ旅の枕に

田代の日高氏は、むかし僕か隣に三とせ余り旅食せし人也。此
所に泊りける夜、夫婦尋来り、むかし今の物語して、妻なん語

しは、みつからは鹿府の傍白浜某の娘にて侍しか、夫官遊せし
時、或仲人して、永く鹿府に住る人也しなといふを誠に聞なし、

嫁て後に聞は、夫は故郷に帰るといふ、生土を離る悲しさいわ
んかたなし、されとも約をたかへ異なる夫にまみへんは女の道

にそむく也と、一すちにおもひきわめ、はるゞの海山^{* 26}こへて此
山里にさまよひ来り、初のほとは朝な夕な涙のかわく隙たにな

かりし、などなくくかたるを聞にたえず、かくそ申侍りける。

海のうへ遠き山路を越来にし人の心のおくそゆかしき

* 26 都城本「こえて」

鹿屋下之村といふ所にて、山／＼の花盛なりければ、

ふるさとを出てつれなき旅ながら花の盛そうさもわするゝ

鹿屋川東といふ所にとまりける夕かた、ふくろふの声を聞て、

くれかゝる旅のいほりの軒ちかく鳴くふくろふの声そ淋しき

去年の春、松山にて花の盛を見、ことしの春、下大隅にて花盛

なりければ、

^{* 27}年ごとに花に心のうかれてやつらき旅にもまよひ出らん

* 27 都城本「としごと」

高山後田を出て前田に移りける時、垣生^{（垣生）}の小屋の庭に躑躅の盛

なるを見て、

賤か家に植おく庭の岩つゝしこき紅の色はかわらす

高山より船にて内浦へ渡る時、高崎コウキのこなた、茂りたる磯山のうち、草の庵かすかに見えたる。傍に、煙の立のほるを見てよめる、

立のほるけふりならずは磯近き山辺のいほりいかて知らまし

岸良にいたる磯辺、巖聳へ山高く、樹木茂りたるありさま、あたかも唐絵に写す山水にことならず。

写し絵にそのまゝ似たる此里の海の汀や山のすかたは

岸良の谷川を渡るとて、

岩間行く水の音こそさひしけれ心ほそくもたとる旅路は

波見の山越、たくひなき嶮岨なり。谷川漲り流れ、水の勢ひすさましく、巖のさま筆に及びかたし。

滝つせの漲りおつる谷川の音にうき世の夢やさめなん

同じ山路にて十五六の女子とも薪荷ひつれ、坂を下りゆく。いつくの者そと問へは、柏原のまつしき家の子ともにて、日こと

に山に通ふ也とかたるを聞て、

あわれ也まつしき賤の子也とてくるしきわさに通ふ山路は

串良川東に泊りし夜、こしかた思ひつゝけてよめる、
かわりゆく老の行ふぞ悲しけれ過る月日は夢の又ゆめ^{*28}

*28 都城本「また」

川西に移るへかりけるに、雨ふり、其夜はもとのやとりに留り

ければ、

かきくらしふるもさひしきかりのやとに心も留る今日の春雨

花の盛もいつしか青葉に成りぬるを見て、

咲花を待も久しく思ひしにちるはほとなき春雨の空

去年の秋、たなつもの実のらす、まつしき民ら^{*29}、飢にのそみけるよし 公に聞へ、御蔵をひらきにはし給ひけるを、老となく若となく御恵みをかふへにいたゞき背に負ふて、歎ひいさみかへるを見て、

今そしるひしりの御代のいにしへもかくこそあらめふかきめくみは

*29 都城本「民等」

*30 都城本「帰る」

細山田の宿の床に、ことやうなる神の形を忍かひてかけたり。

三目六手あり。矛、珠、如意、鈴、独鈷を持。又、裸女の髪を提く。左右に青赤の鬼形、又女の形有り。前に不見、不聞、不言の三猿有り。雖も書けり。世に伝ふ庚申の本尊成るへし。た

わふれによめる、

祈るともいかてしるしの有ぬへきかゝるあやしき神の形に

相知れる人のとひ来りしか、十年斗見さりしほどに老はてゝものいひけるさま、さたかならず。昔には似るへきもなきを見て、

老ほれし人のうへたに悲しけれ我身の末もかくやあらんと

*31 都城本「程に」

福昌寺疎山大珠和尚は近世の善知識也とて人の国よりしたひ来るほとなれば、まいて我國の流れを汲るともからは石屋禪師の再来のやうに思ひたふとひける。今年、串良郷新川西に至る。

和尚は此所の農民の子也。和尚臨終の前かた、一卷の系図を写し、したしきかたに遣し置けるとて人の見せけるか、ふるきむ

かしよりかきつたへ疎山に至り、松野十蔵、貞祐和尚養子也と

みつから書たるを見て、戯にかくなん、

家を出てまた捨かぬる世の中のむかしわすれぬ水くきの跡
串良より大崎に越るとて、日隅の境塚を過るとて、
薩摩かた大隅こえて日向路や三国をめくる旅のはるけさ
行く旅のかきりも知らず日向ふ国にもけふはめぐりにけり^{*32}

* 32 都城本「来にけり」

大崎仮宿村にとまりて、

里の名もかりのやとりと聞はけに定なき世のことはりそしる

横瀬村にて賤女^{*32}らか蓬つみてあしたゆふへの命つなくを見てよ
める、

草の葉におく白露にたくひなんよもきか枝にかゝる玉の緒

* 33 都城本「賤女等か」

野方村にて三月尽

おしむへき春の名残もゑそしらぬ日ことにかわるたひのやとりは

首夏風

きのふまで花にいとひし風もまた今朝ぬきかふる袖そすゝしき

内の倉といふ所を出て志布志に出けるあした、谷川を渡る。両

岸の岩つゝし陰を写しきゝ波立つありさま、いふもさらなり。^{*34}

少し隔てゝ通りしかよめる、

立寄らはさそな心もすみなまし音さへ清き水の流に

* 34 都城本「更なり」

国の境に至り、饑饉を問へは、他の国の民等は飢に及ひ死も且
夕にせまれとも、我國はかゝるおそれなしといふを聞て、

よしあしの二つの国の境にて君^{*35}のめくみの深さをはしる

* 35 都城本「君のめくみの」

大崎益丸にとまりける。やとの隣に五歳に成りける子の疱瘡や

みけるかおもくなやめる、とあるしのいひしを聞て、先たちぬ
る我子の事思ひ出られ、父母の心おしはかられるほどに、其
父なんよひに遣はし^{*36}ければ、ほとなく来りつゝ、六年まへ同じ
やまふに六つになる娘なんはかなくなりしなど悲しき物語、こ
まやかに語るを聞くに忍びず、くすしやうの事ともつく／＼語
り聞かせければ、いとかたしけなき事におほえしさまにてよろ
こひ帰りける。日数経て同し郷の持とめといふ所に泊りて、其
子の死したると聞くと悲しく、身の上のやうにおほえければ、
聞からに身をしほるなり子を捨てゝなけきかさなる親の哀を

* 36 都城本「遣しければ」

* 37 都城本「捨て」

鹿屋立本といふ所にしはし腰かけ足休めし宿のあるしは、四十
に足らぬ女なり。夫なりける者は、おとゝし馬にふまれて死し
たり、子はいまたいとけなく、つま木こりなどしてやう／＼日
をくらし侍る、先たつは何知らず、残れるは悲しき事のみ多く
侍ふ、とかたりければ、

悲しけれさきたつ人の哀よりあとのなけきを聞につけても

残りつゝなけきこる身そ悲しけれ鳥への山の煙消は

鹿児島県史料集刊行一覧

集	史料名	執筆者	集	史料名	執筆者
1	薩藩政要録	桃園恵真・五味克夫	29	要用集(下)	芳 即正
2	丁丑日誌(上)	村野守次	30	桂久武書翰	村野守次
3	薩摩国新田神社文書	芳 即正	31	本藩地理拾遺集(上)(薩摩国)	桐野利彦
4	一向宗禁制関係資料	五味克夫	32	本藩地理拾遺集(下)(大隅国・諸縣国)	宮下満郎
5	薩摩国山田文書	桃園恵真	33	江夏十郎関係文書	山田尚二
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜	五味克夫・郡山良光	34	示現流関係史料	宮下満郎
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記	桃園恵真	35	樺山玄佐自記並雜 ^{薩末} ・樺山紹劍自記	晋 哲哉
8	御登御道中日帳御下向・列朝制度	五味克夫・郡山良光	36	島津世禄記	山田尚二
9	明治元年戊辰戦役関係資料	原口虎雄	37	島津世家	畠中 彬
10	伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説	村野守次	38	譯司冥加録・漂流民関係史料	宮下満郎
11	管窺愚考・雲遊雜記傳	増村 宏	39	薩摩藩天保改革関係史料一	尾口義男
12	川上忠塞一流家譜	五味克夫	40	薩藩学事一・鹿児島県師範学校史料	宮下満郎
13	本藩人物誌	五味克夫・桑波田興	41	薩藩学事二・薩藩学事三	畠中 彬
14	薩陽過去帳	桃園恵真	42	薩藩名勝志(その一)	吉元正幸
15	備忘抄・家久公御養子御願一見	宮下満郎	43	薩藩名勝志(その二)	吉元正幸
16	鹿児島縣地誌(上)	五味克夫	44	薩藩名勝志(その三)	吉元正幸・塩満郁夫
17	鹿児島縣地誌(下)	桐野利彦	45	鹿児島県布達(上)	宮下満郎
18	薩藩舊士文章	桐野利彦	46	鹿児島県布達(下)	宮下満郎
19	薩藩先公貴翰(乾)	五味克夫・桑波田興	47	伊地知権左衛門日記・先君掖官遺抄	堂満幸子・林 匡
20	薩藩先公貴翰(坤)	五味克夫・桑波田興	48	加治木古老語 薩藩雜事録 雜事奇談集 舊薩藩奇譚日記集 上下	安藤 保・徳永和喜
21	小松帯刀傳・薩藩小松帯刀履歴・小松公之記事	芳 即正	49	西藩烈士千城録(一)	徳永和喜
22	小松帯刀日記	芳 即正	50	西藩烈士千城録(二)	徳永和喜
23	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)	芳 即正	51	西藩烈士千城録(三)	徳永和喜
24	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(下)	原口虎雄	52	通昭録(一)	安藤 保・清水 勝
25	三州御治世要覽	原口虎雄	53	通昭録(二)	塩満郁夫・尾口義男
26	桂久武日記	宮下満郎・桑波田興	54	通昭録(三)	丹羽謙治
27	明赫記	村野守次	55	通昭録(四)	中山右尚
28	要用集(上)	宮下満郎	56	通昭録(五)	中野翠・尾口義男
		芳 即正	57	通昭録(六)	丹羽謙治

鹿児島県史料集刊行委員会委員

五十首順

安藤 保 九州大学名誉教授

尾口 義男 前始良市歴史民俗資料館長

金井 静香 鹿児島大学教授

五味 克夫 鹿児島大学名誉教授

佐藤 宏之 鹿児島大学准教授

塩満 郁夫 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

堂満 幸子 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

徳永 和喜 西郷南洲顕彰館長

中野 翠 元指宿高等学校長

丹羽 謙治 鹿児島大学教授

日限 正守 鹿児島大学教授

三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部名誉教授

「通昭録」(六)

(鹿児島県史料集 第五十七集)

平成三十年三月

発行

印刷

鹿児島市城山町七―一
鹿児島県立図書館

電話 ○九九―二四―九五―一
FAX ○九九―二四―五八―二四

鹿児島市中央町二七―一六
かわち印刷有限公司
電話 ○九九―二五四―五〇五四